

廿四日。此夕の題に、夜網代。草庵燈。

もるかたにあしろの水魚のよるふかくよるや川瀬にみゆるともしひ
更にけり草の庵に夢もまたむすはぬ床や灯火のかけ

廿五日。菊池清茂の、

おろかなる海士たにもかる玉藻あらはかつきてもみんなわかのうらなみ
となんよみてあかもとに聞へしかは返し。

いさともにたまもやからんしるへしてよる波わけよわかの人

廿六日。冬こもりのつれくゝに爐のめぐりに在て、かたらひ居ればわらはおなじま
とゐに灰かいならして、へんつきしてあそふをこゝにつきりといひ、いさはえさしい
はゐなどの郡にて間越といひて、木のはしそぎたのやふれを爐の中に立てあそぶ童
はや正月こよ、おもしろうあそびてんとはかなうかたるに、

春來なは猶しもこゝの宿にとへむつきはいとゝたのしかるらん

廿七日。ことなうくれて雪はいたくふり來り。
廿八日。あきはま武憲のよめる。

またしらぬ方にみちひく心をやたとへてもみんなおくの海山

この歌のかへし。

いと浅き心をおくの海山とたくへて人のたとらんもうし

廿九日。寺まうての人々に、太雪ふみしたきたいらにみちけたれたれとけふいまは
たふりそへたり。

斯波數朔の日。雪はあしたよりふるに、鱈よ安渡たらよとよはひ、昔むしろよ、へりな
しよ、つまごぞうり木の皮のくつあさり貝はまくりあはびえおほ百合の根おしかも
たかべすとめかひたまへと、雪おひたる市女ますらお聲とよむまてあらかひうりぬ。
二日。あしたなへふり雪ふりて冴へたり。冬夜といふことを、

明るやと見へしは雪の光にていまた夜ふかくさゆるねやの戸

三日。夕附行ころ、齡香山徳玄寺徒門のかたはらにある、智愚庵のあるし、實元上人をと
ふらふとてゆく。橋のうへに、童あまた集り、しものやうなるものにまたかり、竹う
まのことくにのりて、しみ氷たる雪の中をつぶてなどの行やうにくたる。これを、は
しのり坂のりといふ。松前のわらはのせりけるすりかいにおなし。

うなひ子か小坂さかのり橋のりてかゝるみゆきに楽しきやつむ

四日。橋のうへにたちて、遠近を見やれば、河の面はこのれるくまもなう八重氷のゐて、雪のうへにつもりたる川上より鴨のむれ来る羽音聞へたり。

残なく氷る川瀬の夕まくれいつこの浪に鴨や立らん

五日。徳元寺の寂隆上人をとふらふに、ふるきかゝみに穴みつまであきたるをあるしとうたして、見たまへ、これなん明和のころをたきといふやまの野良より土とるとてほりいたしたり。いと大なる人の頭と、錢つるぎたちなとに、この鏡もましりていてたり。世にはたゞ、永樂通寶のみにて、こと世にはなかりけり。いかなる人かを埋みおきたりけんしらす。いそきもとのことに埋て、今はこれひとつ寺にのこし侍る。かうべはなへての人のともおほへ侍らす、大なりと聞へたり。

十二日。この五六日はかりことなければ記さす。あさひらけ行ころ、なへふりてひる牙へたり。

十三日。ある人にいさなはれて、おほはたの湊邊に行。あしたより空はれて、長閑さ春の思ひせり、舞山里に來けり。此邑はおしなへて、牛飼のみ住てうしひくをわさに

世わたりをる、其童にやあらん、うしふたつによねつけて、しやつうしやうなしの牛よ、とこに入ならんといきまきふときむちしておふ。

あけまきか雪のなか路ゆきなやみうしや世渡るわさにひかれて

女あまた、いろく衣を着、あるは木の皮のけうみのといふものをうへに着て、つかいしとて、うさぎのかはきつねのかはをたふさよりかひなに、さし木の皮のはゞきに櫛をふみつゝみふろしきやうのものにかしらをつゝみどきをのを腰にさして、山路にゆくは、さらに女のけちめやはみゆる。とし高き翁の、つま木おひたるかこなたさまに小坂くたりて、

こりつみしたかき年木に老の坂こゆるやいとくるしかるらん

雪車にもつみたる男、しはし休らひ給へは、みちくかたらひ侍らん、あしこは、那胡の林とて、むかし盗人のみすみて、今もかみさひたり。あなたは、圓仁大師の石經つかこゝにも侍れと、今は雪の下にとかたりもて來るに、時の間に空くらかりて、雪はかきたれてふれり。左は山かけ、右は海つらのみちを行にいと遠くおほへてたとるに、くる人も、行過るも、あなさむあなさむとのみ、ひとりこちていふ聲まで、寒けに雪ふりて、

風さへいたくふけは、おなしこゝちに、

山おろし雪吹はらふ濱風を寒さしのへと行すりの袖

三途河の優婆堂をかみたまへ、たふときみほとけなり、慈覺大師のたましゐをこめて
作たまへは此ひかりにおちて、おいぬいぬうちなゆめ此邑に入來す、又きつねたぬ
きにをかされたるものなけん。いてあない申さんとて、村のをさにかきこひとりて、
みちなきかたを雪しとくとふみしたき、平等庵とてなゝさかの地藏ちうそんにた
てるたのくまに、たけ二尺斗のうはのみかたしろいけるかことし。これにくろき麻
の衣をかけて奉れり。あなたに大なる庵あり、それにおましましたしかとあはれたれ
は、近きころこゝの堂にすへ奉るといふ、平等庵の額は洞上大成書とあり。やをら庵
の戸に鎖さし、あらすたれ引まはしておく、さはかりひろき川瀬ひしと氷にふたかれ
は、汀はなれて、井のことく氷うかちて水くみあるはゆきかひをしたり。

あやうさはよみならねともみつせ河うすき氷を渡るかち人

こゝを海邊に出て行に、いよゝ雪降來て、こしかた行すへも見へす、なみと衛との聲は

ふめる、糠杜の梢はかり仄に見やらるゝに見しかたとはしるへにたとるゝ、

むらちとりなれもつはさや重からんはらへと袖に雪のふれゝは

ゆふへ近う來つきて、田中なにかし、直躬かおやなる館にとまる、小夜なかの月おもし
ろし。

十四日。あしたよりふる。此夜爐火似春といふことを、

冬こもりたれも花まつ埋火の圓居は春の思也けり

月前戀といふことを、

月見れはものやおもふと人のとふつゝめと宿る袖のなみたを

十五日。ひとりある女のもとに、人々酒のみて、かたはらに、かたのあるを見て、このか
たともにたくへて、戀の歌いさよみてん、此女の近きころは、男したれは、夜るはひとり
のみもあらさりければなといひて、墨すりてければ、此人々にかわりて、

おもへとも人とつれなくすみかきのえやはむすはん契也けり

十六日。中臺院寶國寺へ行とて、人の路にかたるを聞は、つかろの浦より、こなたの
磯に、なためくりする舟の、はやちにふかれ、浪にうちかへされて、ちやうごうしたきと

いふあら磯に人みたりよたりなかれよりしみかゝまりふしまたいきたへさなるや、
狼の山より出来てくひもて入たるにやあらんひきたるあとは雪のうへに蘇枋をな
かしたるやうに血のなかれたり。このころのことといふおもひやるへし。

十七日。雨をやみなくあしたより夕になりて風猶吹たり。

十八日。あさ雨ふる夕に風ふきぬ。夕鐘といふことを

入逢のかねより霜はおく山に歸るゆふへの袖や呀らん
十九日。雪の空はれんとはあらねと、日のほのかにてれば、田名陪に歸らんとてひ
るよりいてたつほとなく野畔の濱中になれば、ふゝきいやふきにふいて遠近の方露
見やれす。雪のうへにふみつけたる路もふりうつもれて、たまゝわけ來りしあと
あれは時のまに吹かくろひて、さらに人の通しかたもあらさめれば、

行さきに猶ふる雪やふかからんそりたにひかぬおくのはま路

三途川の邊にくれば、女をきなかいしき雪かい分を杖にすかりちかとなりに行ら
る具なりんたちとゝまりて、こはいかにそやいつこにかいかれん、このふきしはれにといふを
見れば、過つるころみちゝたすけともなひ來し、みつわさしたるしらかみの女なり。

此もは^(マ)うの云うさねとりて辛勞をい行てんよりは、きたなけなりとも、一夜とまりた
まへ、ゆふけには、ひえの飯にてもうさんなる人ならば、ひえにてかもしたる酒すゝめ
ん、又そばのもちやあらんわめゑのわか家也かせはへとも、へがらひえのへりなしるるなりし
きかさねて、寒くともあかしてといふは、七府には君を宿してわれみふにねんといふ
歌のこゝろはへにひとしかりければ、

よしみふに夢むすふとも宿からんとふの菅こもこよひしきねて

ものはてゝたき火のほとりに、小夜更るまであれば、これくひねとて、ひえしときとい
ふ物を焼て、おしきに盛たり。ものほしげにもあらねは、くはてかたらふを、さそきた
なうやおほしてん、ふすまもいとうすし、さむさしのひてとてふさしむ。鶏の鳴いつ
るに夢さめて、寒さにえふしもつかて、ひましらみ行はひとりこちぬ。

ねやの戸のさへてそ明ぬみちのくのとふのすかこもめもあはすして

二十日。かち人の來らんをまちて、路つきたらは出ゆけといふ。行かひあれば出て
來る村はしのかたそは、尾のやうなるところに小ともあまた、ちいさき雪車にのりて
坂のりのわさしたり。

うなひ子かくたるもはやしのるそりの尾上の雪のいとたかくして

ひろ野になれば、山かせさと吹來て、青うなはらなと浪のたつとおほへて、ふりつみたる雪をふきもてありく。かい分て遠近に人の來かゝるは、磯なみわくるかと見やられて、

旅人のけふりの波を分るやと見へしは遠のふゝきなりけり

くらくくになりて、田名陪につきぬ。

廿一日。ひてれり、市人あまた軒もせに入みちて、なにくれのものうりありくに

ふみわくるちまたの雪の高ければ軒のしたみち通ふ市人

廿二日。すゝとりすとてうち拂ふ門多し。

廿三日。せちぶん、豆はやす男炭、松の葉いはしひろめなどいり、豆にませて、楯に入てあといふいきに鬼はとにといひうといふ聲にふくをよはひ、なにのめをうつ鬼の目をうつとよはふは、打擲四方鬼、眼睛ならんか。御菩薩の池の邊なる鬼やらふとて、三石三斗の豆をうちしをいふにやあらん。くまゝうちめぐり、かん棚あるたなに、しときいり豆そなへ奉りて家ことにぬかつく。

廿四日。けふは立春なりければ、

としなみはまた越なくに春のたつ末の松山いかにかすまん○秋田本かすみ初らし

夕くれちかく遠かたのやまゝを見やりて、

春のけふたつとはいへと嶺の雪かすまぬほとやことしなるらん

廿五日。あきはま武憲のもとに行しかは、かゝるうたありとて、森岡の里なりける、小本尙芳といふ人、うらく見ありき、おかしきところゝに、ななめたりける、かいとおほくありけるを、あるしとうたして見せけるを見つゝ、

おもひやるまた見ぬ浦の友衛つけしすさひのあとをしるへに

きりがきのとに、行あひてあな久しともひさしまつことなしよと、男女の聲にてかたるを聞は、三年掣とりてけるはいかに、わか家のさんねんむこは、はやをなめもちてけり。此ころはあつはかむねの内は、おこりこのことならん、いつもくせちありけるといふ。その男にむすめをやるべけれど、女の方の家つくへきものまた心をさなければ、三年むこ、五年むことして、みとせいつとせとさためて、其家に行て、あるしとなるかをとなひたるを、まちて契しとしも過れば、むすめをむこのかたにつれ行ならひ也

世にいふうしろみをしてかへる也、三年嫁もこれにひとし妻をあつはといひをなめとは妾をいひ、おこりこは炭火をいふとそ。此男女にかはりて、たはふれうたをと人もひたにいへれはひたにかいつく、やのあつはのよめる、

むねの火のおこりことなる我をかくよそにみとせのむこかねそうき
三年むこのかへし。

末かけし契たかはし妹かうむをなめに心よしかよふとも

廿六日。けふはとしの市とて、岡のやうにつもりたる雪のうへに、小松さしつかねだこたらそひあぶらめ、普むしろ、手桶かひげいふをなとし越のやうみの具ともうりかふなかに、八十の翁さゝやかの松に、雪のかゝりたるをふかかさしありく。

しら雪のかしらにつもる老も出てとしの市とてさはいとなみ

廿七日。わらはへたか枝をかた雪の上に投やりければ、その行ことのとさ、矢などのやうにはるくとなり行、これを捧やりとて、ひねもすして、誰まけてわれかちてとあらかひたり。

廿八日。歳暮のころを、

ひきかへすためしもあらて年くれぬあたゝら眞弓春ちかきまで

うまの貝ふくころ、やもたふるはかりなへふり出てければ、ありとある人、みなくつもふまで、高雪のうへにけのほり、聲とよむまで、まんさいらくくのみとなふに、舟なとの浪にたゆたふかことく軒かたふき、ひしく鳴うこき、雪もうこもちてやみぬ。こゝらの人いきつきもあへす、又なへしてひねもすよひと夜ふりたり、いかならんとか

廿九日。けふもをやみなうなへときく頻たり。人のころさらにおちるすたゝにけやうのみそしたりける。

三十日。わたくし大なといふわさもあらて、たゝこよみのはかせにまかせたり。此日三部の田子村の長蛇沼惣左衛間、相米彌左衛門の家より、粟糠のもち鬼の醬裏白の雉子とて、きゝすの足のうらましろなるを奉りて、正月の朔のまさなことにめして、市路に人つかはして、にこり酒かひもて國のかみのあるし給ひてのち物はしめには、此二人の長かかへさに、御傳馬御切手といふものかい給ふかふてとれるのはしめ也とか。此長か遠つおや軍起しころにや、此かみの遠つみおや、いまたのいなきもなうい

はみし給ひしとき、そのみくさのにへ奉りしかことはしめといひつたふる夕近く、雪の中に杵^{モウ}すり久波、かいしきもて、山なす雪をかいならし、門松立るほとなへふりて、くれ行は、みたまに飯奉るころ童とに出て、門々の雪のうへに、椀の皮に火ともし出て、まつとし、又たきぬ。これをさいとりかばといふ、柴燈にやあらん、幸^{サチ}とりやあらん。

寛政五年丑の夏、うつきのはしめ、みちのおく、鉏のみなとより、午瀧の浦に渡り、脇野澤越の山路をわけて、田鍋のあかたに歸り、去年見し宇曾利山にふたゝびのほり、水無月つこもりの日、かいとゝめておなしく奥のうらりと名つけたり。

奥のうらうら

咲けるさかさる花のやまゝに見ゆるは、春たにいまたいたらぬとおもふへかめるに、けふは宇都支の朔になりぬれと、みちのおくのならひとて、いまはた袖もいや寒く、北の浦風身にたへかたう、衣ぬきかふるとはあらねとどしことにいひならはせるためしなれば、

夏はけさきならし衣かふるとも又花の香や袖にとめなん

午瀧の磯を見てん浦山のさくらも見なんとて、犀のみなとべを西に小舟にのりて、辨財天のおましの島をこきさくるに、大魚嶋とて遠く見へたり。

中つしま霞の衣ぬきかへてなみのしらきぬかゝる涼しさ

めをの矢越やまの籠をこき行に、わたりの嶋の矢越ねも仄に、見やるかたは、しほにくもりてくらきに、釣するならんこゝらの小舟たゞよへり。

夷人のはなつ矢こしの山ちかくわけてなみある海士のつりふね

かんかけのうらとふみやしろのしたつかたは大なるいはやととかいそやといふや
 かたある邊をめぐりて、あなまといふにあま鳥むれり。長後長はまをへて、福浦山に
 入道石とてみね越にさし出たるあたりは、なへてうす紅の櫻盛なるは、むら消ゆる雪
 に、夕日のてれることし。

さくら咲山のした風ふく浦のあまのたもとやいかににほはん
 た、此山かけに、こき離れんことのうけくて、

いましはし楫とりなをせ舟寄ていそやまさくら盛をや見む
 ふねのときことのねたく、かへり見かちに、なかめ捨かたくて、

なみ遠く濱風のふくうら山にさそはぬ雲やさくらなるらん

つりする舟近く行に、さかつきとれるふなこらなによけんとして、あはひいけなからく
 ふめる、又ながらといふ黒きいをつりて、舟にみちくたり。

あま衣かへてけふより夏ながら花の香さそふうら風そふく

ほとけからだといふ磯邊の石ともは、たからなのならひ生たるかことく工などのけ
 つり出せるやうに、これらの岩のけにや佛に似たりけん、極樂はまといふあり、いさ

こなとは、しら雪をしきたらん、ひとしく、世にたくひなう見ところおほき岸邊なか
 らやま／＼の花さければ、これに心うかれてそことめもと、まらす。あらししほせ
 の灘なれと、ゑひたるこ、ちもおほへす。うしたきのやかたちかくなりて、てんがい
 石といふは、衣笠にむかしは似たりけるを、石くたけて、いまは蛙のかさなりをるかこ
 とくなれば、かはつ石ともいひてんか。うし穴といふ洞あり。うし石といふか磯に
 ふしたり。舟よりおりて、浦のをさ坂井何かし、とみうとにやあらん、間ひろく家きよ
 らに作りなしたるにとまる。此やに左井のみなとへなるくすし三上温といへる人
 あれば、うちものかたらひ居るに、雨ふりいて、浪風しきりたり。

花の色のあすはうつらん磯の波よるの音きく雨そものうき

二日。晴たり。たちならふやは、高き山の麓なれば、ふりあふきてあさゆふの窓に花
 や見るらんなどおもひやられたるに、おきなひたる男花あるかたを見やりた、すむ
 に、

浦人のあふく軒はの山さくらいまはた雪の残るとや見ん

近き邊見んとて、神明のみやしるにまうて辨財天の祠にまうて眞如庵といふに入ぬ。

元祿のむかしは、祥雲院といひしとかみほとけをはしめ清らかにたてり。みきりの櫻盛なるかきり、籬の中に見へたり。

明らけくすます心の月見てもさわりやはてん花のしら雲

此山かけに瀧あり。いそに牛石あれば、ところの名にせりとなん。

ひきかへすうしの名におふ瀧つなみかけてにこらぬ世のためしとて

三日。あしたよりくもる。磯邊に出て、うし穴のあたりを行めぐり、遠方を見れば、かきりなきうなのうへ、ひのもと、北みちのくのはて、つかろちの烏鐵よりはひんかし、尻箭の埼よりは西に中りて、そのふたつのなかに、扇のことくさし出たる泊にて、人しらす世の中となるおもひすれと、ふりことからは、あかたの人にことならず。わきて水きよく、家居はあかたよりもきまけにすみなし、うまうしをかはされは、やの前しりに、露斗のちりもみさりけり。むかふ海面は、紆數鷄都函館をいふの山いと近く見やり、其沖邊につりする舟あれば

榜舟の行かひ近くみちのくのちしまの蝦夷にこととひやせん
猶そのかたを見つゝおもひつゝけたり。

見る人も浪の千里の外にすむ夷の鳴邊も花や咲らん

軒はの山に聞たるは、つゝ鳥にやあらんとおもふに、みねに鳴はどゝ鳥籠に聲したるは、てふま鳥と童のいふに、

さらぬたにちれはそいとゝ行やらてふまゝくもおし花のしら雪

夜くたち行ころ、わらはおとのはかなう吹すさむ笛のやうに聞へたるは、何ならんととへは、火鳥にや侍らんか、ひとりにいことなるやうに侍れとほかにまきるゝ鳥もあらしかしと、

夜とゝもにさかしき山を吹笛の聲としきけは鳥そ鳴なる

四日。よきあさなきなれば、浦回見なんと、近き邊まで、小舟を岸のみこかせて、汐もなみもこゝろにかなひ長閑やかにて、棹のとくさすもねたく、佛か宇多てふ所を過て、極樂はまといふにつけて、しはしとておりぬ。磯の沙は、しらけのよねにたとへつへう、はた雪霜をふむこゝちしてしら洲の上にゆひもて戯うたかいつくる。○圖あり、一は「ほとけか

宇多、こくらくはまのかた一は「うしたきのうらやかた、てんかいし、うしあな、べんさいてんのおまし、ふくうらの磯家のかたとあり。

やをらこきはなれて、福浦につけて、山路も分見まほしく、舟の中にいさなひつる三上
 温にわかれて、磯やかたに休らひ居れば、やの女、これたうひてとて、細くいと長くぶた
 さかみさかの紫菜を、おしきの上にいさゝかのせて出せり。これなん、冬になりてい
 と寒く、海のある行ころ、腰に長き綱をつけて、今ひとり、高岸にのほり、岩にかゝりた
 るを、そこゝとらしむ、あらしほのからきめいはんかたなしとかたりぬ。この名
 を、絲海苔、又蔓海苔ともいふとなん。萬葉集のうたに、海苔の奥に生たる繩乗の名は
 そのものうし戀はしぬとも。〔わたつみのおきやなはのりくるときと妹かまつらん月
 はへにつゝとよみ聞へしも、此ことにや、いかゝ繩苔ともいふへきものか。しかはあ
 れと、こと所にはゆめあらさなるものにて、こゝにもまれゝに摘てけるなとかたる
 に、石管自折もたる童、この宿の門に立て、茵花を口にふゝみて、たゝ吹にふき、あるはく
 らふ。こはいつこにとへは、あのやまかけに多く咲たるをとねさしおしへたり。
 かつらのりといふことをうちたはれ折句歌に〇圖あり

かけたかくつゝし咲てふらん山をのきはに近きりんせんと思ん

大黃楊の阪なといふさかしのみねをかりのほりて行に、櫻こゝかしこに咲たりける

梢の風はあらてうちそよくあり。いかにやあらんと見るに、まみてふけものゝ木の
 うれにのほりたるにこそ。

花のさくつゝらやまみちわけ捨て出こしあとにかゝるしら雲

遠近に花はさけど、雲ふかく埋て、えしらすりければ

まかひにしみねは櫻の色なからまことの雲にかくらうそうき

長濱といふを行なやむに、まりこといふ貝多きを見て休らふ。

うなのそこに誰かあけゝんまりこかひ磯邊に高く浪の音して

長後のやかたに至るに、岩のかけやふれたること、き石に、わらくつさし通す斗あゆみ
 こうして、そのところになりぬ。あなまをへて、いそや村を行て、箭越のこなたに、雌矢
 越石雄箭越石とて、其の高さ、百尋ならんか、たてる巖あり。ちいさきほくらの、ふたつ
 あるは、ほんたの神やふねとようけひめを祭るといふ。二の鳥居に、木の枝をかきと
 し、うちかけたるは、けさうするねかひなりといふ。されは、神掛カンカケといひ、又鍵懸ともか
 くによ。矢こしの磯やかたの高きかきねことに、あし長き鮎魚をほしたるか、藤の咲
 たるに似たりければ、行ゝ戯歌

めつらしなたこのふち浪夏かけて咲る矢越のむらさきのいろ
左井になりて、しほたのやにつく。

五日。雨ひねもすふれは夕つかたの晴間、松齡山法性寺の櫻見に至て、

咲はちるならひありとも此寺の花にはゆつれ松のよはひを

夜邊になりてくるに、大なる蛙、小石のあるやうに出て、路をふさはふみしたかれて、
死る數をしらす、うるさく世にことなるみち也。

六日。日はほのかにてれり。龜井山發信寺に、珠阿上人の在けるをとふらひ行は、砌
の池に藤の咲たり。

萬世をふへきかめ井の水清くなひきそ渡る花の藤なみ

ちかき隣に、大法山淨信寺といふとなん、うちあはれたる寺に、妙法とかいたる佛の具
など、花そのにくちまろひ、さくら山なしの盛なるに、李花の風にふかるゝかあはれな
れは、

咲匂ふすもゝは雪とふる寺のあれし軒端にやま風そふく
きのふの雨に水かさまされは、山河に柳木をかして、海の面にちりなかれたゝよふを、

小舟あまたのり出て、これをとりにて曳てんと浪のまにゝもとめありくさま、書なと
見しにことならず。

行春のなかれてとまるみなと邊や、柳木もなみの花咲にけり

ひきとゐならひ、うたひつゝみうつやあり、此浦の多古とて、ぐゝつうかれめのたぐひ
也。かくよんことにうたふなれば、

うかれたるみほの松風吹すさひたこの浦なみよるゝの聲

珠添河のなと、ころにたくへていへは、聞人おとかひをはなしたり。

七日。夜邊より雨ひねもすふれり。

郭公ふり出てなけまつおもひをやまぬあめの夕ぐれのそら

過し頃、ゆくりなう、澁田かもとにありて、珠阿上人にふたゝひまみへしむしろに、上人
ありつる句に、こよひいひつきたるをのす

幸にけふおもはす友にあふひかな

待つてきくやまほとゝきす

いさなひてゆかはや里の見ゆるまで

珠阿
秀雄
秀

眞帆にいさみをもつかちの音

島松の梢ほのかに出る月

あしふく軒にころもうつなり

阿 秀 秀

八日。長福寺に圓居して珠阿彌陀佛のいはく、

佛の身灌くしつくやのりの海

卯の花山のしらむあけほの

雄

名香の薫る臺に圓居して

聞鈴むしのこゑも殊勝(毛)ぬ。

出るより月の照そふ高樓に

薄に残るむらさめのつゆ

秀 阿 阿 秀 秀

けふは、此浦山におましのあるやしふちにのほりまうつるとて、手毎にさゝえににこれる酒をもちて、これをみきに奉りぬ。こゝに夕近くのほれば石のほとけ、みたてりけるに、つゝじさくらやまふきすみれなどの手向せり。やまゝのさくら咲みちたるは雪か雲かとわか葉の梢におしへたてられたる猶おかし。

けふこゝにわけすはそれとしら雲のかゝる櫻をよそに見なさん

鳥の聲はそれかあらぬかなと人のいへと

ほとゝきすまたんおもひも夏山の花のしら雲かゝるたのしさ

雨のふり出れと、みのあらねは、まうてたる人の、布のつゝみをかゝけて、あまつゝみにして、やをら晴たればかへしやる。

雨しのくみのしろ衣ほすひまや袖につゝみてかへす花の香

をたきてふ山にさくらいたく咲たるを見やりつゝくたる。谷かけに鶯の鳴たり。

むら雲のとつると見れば谷の戸の櫻にこもる鶯の聲

九日。風はやう吹て、海のうちくもりて寒し。田鍋のあかたなる菊池成章、こたひおほやけのことになつさわりて、磯の浦山わけめぐりて、けふの夕つかた、此みなどに來やとれるときゝて、

郭公いつこの山に聞つやと初音よりまつ人をこそまで

十日。つとめて、なりあきらのもとより、又來けるを見れば、とみにあかたの君にいさなはれ行なと、ことつてにいひて、きのふの返しあり。

時鳥ありとはきけとかたらはんいとまもなつの葉山しけやま

この夜邊、雨のわりなうふりてけるに、

はつ聲はつれなきものとほととぎすまたて目をふる雨の夜そうき

あめの音もをやみたれば、かゝるはれまなとおもひめぐらして、さらにいねもつかで、かけろと鶏の鳴、はた聲たかう行ものあり。何ならんと聞は、水扎てふ鳥の鳴たるつれなさに、

數ならぬ身をもおもはとほととぎすよそのかへさの一聲はなけ

とてふすかとすれば、しのゝめ近う、二聲三聲なのりたるを、ゆくりなきはつ音なれば、それかあらぬかたととりて、

鳴ぬ夜をまちならひつゝ、時鳥心つからやまよふひと聲

ふしたるやの空さらす、百千返鳴ことの麗しう、あたなることの葉も、まことしあれば、あめにも通ふならんと、和歌のかんたちにぬさたいまつる。

十一日。浦のをさ若山のもとより、松のたてるもとに、琴たつさへて、瀧見たるかたに、歌よみくはへてとてもて來けるに、

松風の音も涼しくことのをに瀧のしら糸むすひそふらし

はた、寒山拾得の畫に、

つもるともはらひな捨そちる花の雪をふみ見る窓の光に

清水寺のうはそく、自性院のやにとふらへは、あるじわれふるきものもてりとて、からうつふたおしあけて、後西院の四の皇子、春日忍照宮の御手にて、箭根八幡の額あり。僞になりとしてこそなりなましおもはとおもへともかくにも、色紙かた、兆傳司のよに出給ふ雪のやま、人、一休上人の諸悪莫作、修善奉行、菅大臣の御筆に、霞あへす猶ふる雪に空とちて春ものふかきうつみ火のもと、此くにかみ源重信の「又も世に似るものやある春夜の花よりくもる月のにほひは」とかいなし給ふに、智海大とこのゑかける不動尊、いはゆる十萬體のうちならんか。八十あまりのとしにてかくとあり、四句梵形のめてたさ老のほけくしきすすみとおほへす。これなんもてるやに、はゆめ火のあやまちあらしかし。さるゆへにや明應のむかしより、あへてことなけんとよろこひて、みなもとのことにとりてをさめたり。

行末の恵そしるき此寺もさすかに清き水くきのあと

十二日。郭公聞はやと近きあたりのかたそは、山かけをめぐるに、このあたり材木石の機輪にいと多ければ、○圖あり材木のうらのかた、このうらをはしめことうらにてそきはしらのこと、石をとりて花そのくろにおきやねにならべり、はた左井みなとへなとには、又圖の下に「左井のうらかた、つかうらとしあるは、きたはしかんかきとせりけるは世に」とりはこひて花そのへたて、やの上にあけて、そきたにおき、あるとなる石なり云々はうちおり、みしかきをつみて、寺のつゐひちなと作り、又はおしたて、よき木などをわりたるかことに、七尺八尺あるを、それくにつかひたるか、よく見やられ、柴垣ゆひめくらしたるなかに、女ともあまた、しら布の前たれにこしをまとひ、つゝみにかしらおほひ、はち巻し、ちいさきくわして、つちかいなし、豆まきわたし、山かけの小田かいならせり。

いかに又四手の田長はなつ山のしけきをそふるわさのいとなさ

十三日。夜邊より雨ふる。午のときはかり、郭公の家の邊を近づき、あまたたひなけは、

雨にけふ翅やぬれんほとゝきすしはし軒はに宿りてもなけ

十四日。申はかりなへふりぬ。夕ぐれつつかた山腰の淵、折もてかへるを見や

て、

夏山にまじるつゝしの下わらひ折そへて家路かへる柴人

待郭公といふことを、

はつ聲は人もまつらんいとまあらはこゝにかたらへ山ほとゝきす

時鳥つれなきものと初聲を人の心に里やわくらん

十五日。清水寺よりかりて見たる万治三年寛文四年の勅點和歌の冊子をけふなん

そのうはそくに返しやるとて、

かしこしないまもその世を水くきにみかける玉のこゑをとゝめて

十六日。ふたゝひ、午瀧の浦をめぐり、田鍋にうらくつたひ見つゝ歸てんとて、しほのひるまはかり出たつ。磯邊の小舟をたのみて、ごんべ嶋に渡り、べんてんを拜み奉る。むかしこのほとりまで入江にて、白鳥のおほくすみて、白鳥嶋といひしとなん、近き世にかもめの多くむれり。かもめをかこめといひあやまち、かもめをはぶきごめと、わたり嶋などにもはらいふを、此うら人のなへてこんべとはねいふめるもあやしきに、僧侶などやしたりけん、辨財天の梁に、權部嶋とかいなしたるも又あやし。やか

て糠森○田名部のうらに此の邊よりおりて、箭越の大岩のこなたにましませる、
かんかけのみやしるの鳥井に、櫻をこきて、大朶のかきをうちかけたるに、○圃あり「左
よりやこしのさかをくたりていなりのやしる八幡のやしるならひてあり、その鳥居
ひとつあるに木の枝をかきとりてうちかけるはけそうすへき人をねかふねかひと
あり

こゝろせよ花のしらゆふ神かけてよしやうけひくためしありとも

此細路のさかしきところをおりほるくろしみにけにやあらん牛の蹄のあと、岩の
うへにくほみ入たりみち行友しはしくと休らひやすらひ行に、うちむかふかたは、
松前の嶋消へ残る雪のやまゝ、夷かちしまのたけゝつらなり夷山、うち浦かたけ
たうへちのまるやまなど、わけ見しところゝは、そこそとしられつかるのいはきね
の、磯山こしに見やられたるは、清見かたに、やよひの不二のすみたらんにひとしく、あ
きたらず見つゝ坂のほり磯やの浦近う見れば、松前のひんかし、沖邊のあたりならん
いかめしきやあるは函なと見たらんかことく、おほへおきなにや、蜃氣たつにやと見
るかうちひかさのかたちにくゑし、やをらまほのすかたしたるは、その沖の大嶋の
くゑするにこそあなれとて、けはしき坂にかゝり龍のなかるゝ邊にあふけはしら雲

のかゝるたかねに、火のもゆかとおほしく、いはつゝじの咲は、

つゝじ咲くたかねの雲のうつろひて照す夕日のいとゝ色こき

長後の浦にとまりて、夕さりのかれぬたうへて、日はくれたるに、時鳥のなくを、いさ聞
せんと、とにいつれば、あまの女ならんか、老たる聲して、三人斗、君をおもへと空ほとゝ
きすとうたふに、月はうすく曇て、たへてふたゝひ鳴もやらねは、

月しはしつれなき君をおもへと空子規いつち行らん

たへまつもて渡る邊を、こしき石とて立岩のあれは、

雲のゐる山路こしきてあすも又あくへきみねやいくへなるらん

こゝらの小舟こき出て、するめいかといふものをつるといふ火かけ波をてらしてた
ゝよへり。

露したふ草葉の螢ゐるかけと見へて灘に集ふいさかひ

十七日。あさなきのうなのおもしろさに、ちかきさかひを見めぐり、磯におりたちて、
ところゝ空行雲のかけおちて浪にあやある浦の朝なき

時のまに雨のふりこんやうに、遠澳のかたに雲いやたちぬれば、いかゝとおもふに、や

かてふり出て、山坂のみちけふはこへてんこともおほつかなしと、まりてあれと、あるしせちにいへれば、それにつきてんとて、ためらふうちにはれたれは、いてたちて鉛の舗穴なとたつねもとむれば、朱なる水なかれて、血をそくかことし。入道石のほとりには、出湯わくかたのありなど、人のをしへたり。長濱になれは、いはつたひのみちのあゆみくるしめるに、まよはんとて、行へきすちのところくくみせ、木のえたなとをさしたり。これをたよりに、たとるくおほつけの山さかになれは、雨ふりいて、みのとりいてけるに、太谷の橋ゆらくとうちなひくは、何ならんと見つゝをれば、猿の二三つたふなり。

ひとつふたつみやまの梢ふみしたき友よふさるの聲のあはれさ

この山みちの小阪おりはつれば、福浦の海なり。過にしころやすらひしやに入れば、雨猶ふりて、こゝちもれいならねは、こゝにとまりなんとさたむ。海へたに、人のあまたつとふは、いかにとおもへは、おほいをつり得たりといふは、石なきといひ、夷人のソキマスケットで、つりくふいをのいつさかはかりなるを、鋤もて鱗かいやり、これをつくりて、浦人もてわたりぬ。

みつしほにかくろひ見へぬ沖のいしなきてあるうの栖家なるらし

やのわらは、紫石映もて來けり。こは長後の澤邊より出るといふ、それにやあらんととへは、しかり。枝たる松の邊をよちて、水のなかるゝかたにありきなとかたらふを聞て、しせきえいてふことを折句にせり。

しみつわきせはやき川のきしかけにえたゝる松やいく世へぬらん

くれ行空おとなしう、軒の芦原風おちて、そきた吹ちるはかり吹まさり、風おこりたるこゝちいとゝまさりてつゆもまとろまれず。軒近く潮やあふれなん、たゝこゝしき音のみして、夜ひとよ海あれ、浪のさはかしうさらにいねもつかれねは、

いかはかり沖つ風ふく浦なみにうちおとろきて夢もむすはす

十八日。この浦の童、うしたき越へすといふをあないに、くらき山路を軒はよりわけ入、わけのほり行に、猶木々しけうたちおほひたる太谷より、鼠水鶏のひるさへなけは、鱸はたきといひ水鶏の鳴をかねうち鳥とよひ、郭公の啼行をあふきて、こなへやきよ、そちやとてたあちやとてた誰に小鍋かくされたと、たはれこといひ、母子鳥は、一日のうち八千八聲なとか啼そと、おなしあけまきのともにかたらひ、あなこうしたりと、

岩群にしりうたけしてけるに、さゝやかなのむし、顔の邊にふためきむれてうるさければ、とく過てんとさいたつに、わらは木の葉折もて、此の櫻蚊のおほさよとてはらひはらひのほる。

すたくとも拂を捨そちり過し花の名におふ山のさくらか

ゆくく山そひへ、谷ふかく里遠うして人の至れるはまれなる山路也けり。けにやあらん、おかしありけるものは、男女のわいためなう此邊に流る、國ののりなりけるとなん。そのいにしへは、蝦夷もわひしとやすみうとみたるうらくならん、飽田の淳代、あるは、關入籠津輕郡とかそふれは、問菟のわたり嶋も近くへたち、過來し左井もうたかふらくは、膽振鉏にや此いふりさへはいつこともえしらされは也。佛かうたなど名あるところくをうしろさまに見なし、尾越みねこへてわけつゝ來れば、牛瀧の屋ともは、谷のそこにさむしろなとしきたらんやうに見くたし、とくもくたりてんとおもへと、三四日風おこりてこゝちよからねは、だゆけにやすらびくからくして、木々かつらにたつさはりてくたり、坂井のやにいたれば、珠阿上人、澁田政備くすし三上などありて、きのふ舟にて至りつるなとふもふとちの物語にすこしはこゝちふほ

ゆれとまほなるおもひさらにもあらで、いまたくれはてぬより枕とりてふしぬ。

十九日。雨もよひの空いと、心もくもらはしく。

二十日。たゝふしてのみあれは、澁田三上のかへるといへと、枕たにえもたけす、だゆけに風おもりかおこりたり。

廿五日。この四五日ものもおほへねと、すこし斗おこたりぬる曉の月、びまもるに、水鶏、火鳥時鳥の鳴あはせたるおもしろさに戯歌、

郭公まふやひとり、の笛ふけはたえす、鴨のつゝみうつなり

廿六日。枕上のさうしにかいたるは、桃水和尚の手也。こゝに宿て、松前にわたりおはせしなとやのあるしの翁の、いにしへのことかたれり。

廿七日。けふこゝを出たゝんといへは、珠阿上人の云、おほまのうまきの邊にて、はしめてまみへ、奥の戸の浦にかたらひ、鉏のはまやかたに、十日もなれてとひむつひ、残れる花を尋ねて、まらぬ夏山にまよひ、みちもなき野原の草をたとりて、郭公聞はやなど、牛瀧てふあら磯まてはとも、にさすらひ來つれと、日あらて松前の嶋渡してん、こゝろさしあれは、こゝにわかれにやなりなん、ふたゝひあふへきことはいづくの空にかな

とありて、硯をあるしにこひて、

人もまれひち笠雨もふらぬ日にたもとをぬらす旅の別路

歸るさもたのしからなん家つとにかたるもあまた國つ名ところ

とたふかみにかいて、たひけるにかへし、

逢ときをまちてかはかん旅衣ひち笠雨はほすまありとも

かき贈る言葉の花も折ませてつとにかたらん國つ名ところ

小舟にのり出て、小つなさかり大つなさかりなといふさかしの磯をこきはなれて、小あら川大あら河といふあり。この大荒河におりて、山ふかくあらし山河をさかのほりてわけ入は、楨の茂たち、胡鬼子の木の立て、奥くらくたきり落る水のみ渡で、行末遠し。

山河のいくせわたりて旅衣ぬれしを誰か宿にほसान

谷水とよみなかるゝに、青葉さす木々におしへたてられて、櫻の一本咲たりけるは、めつらしくてとまれば、こま鳥、水乞鳥、鶯の聲聞へたり。

なれもさそ花やめつらんかへるへきふるすわすれて鳥の鳴なり

坂のほれは大嶋小嶋今別母衣月の浦も見やられて、さふの路を分れば、平なる路に、野かひの牛放たるに、里や近からんとおもひて、ゆけとくさらにあらて、柵してみちをふたき、垣ねの上よりはしのことく、間遠に木をあみてかけ渡し、人これを通ふは、うしの人こんをとめんかためとか。又山よりくたる河にしたかひ行こと、みちは三里の山、いくはくならんか、里のなきはいかなるところにかふみ迷ふならんといと細き路也。みちのあるにまかせてゆくに、おほやますみの神おましますにぬさととりて、はるくと過れば、家の七八見へたるは、あなうれしいかなる里かとは、源藤次郎といふ村也、むかしその人やすみそめたらんか。此あたりは、山子とて、柚山賤をわさにて、そきたのみつくり、女は山畑にたかやし、あるは布おりぬ。柴橋を渡るに、けふりたつかたは、潟貝此貝小川に在りてふ村のありといふ。ゆくくおもひつゝけたり。

木々ふかくしけれ山のかたかひになひくけふりや夕けたくらん

その村に入は、いまた咲のこる桃の花そのあるに、寒さおもひやるへし。瀧山といへる村ひきつゝきたり。山ふゝきのくきをさきて、よねぬかをふりかけ、日にほし、かきねにかけたるを、あめやふりこんと、とりをさむる女翁のいはく、此山里はし、ましが

をろけて、あはほひえほまめそばなとみなこきくらへは、とることのかたく、かゝる草をもかてにつきて、世のすきはひとすれと、折としてはかてつきうへ侍るとてなけくなみたおちぬ。むかしはこゝにおもしろき瀧ありたりとて其名流つれと、今はわつか斗落るかた岨に、ほとゝきすのなけば、

ほとゝきすこゑもひとつにひゝき来て瀧山かけの宿のたのしさ
くらくになりて、脇野澤につきて、里のをさかもとにやとる。

廿八日。うらふれあれは、けふはとゝまりて、正覺寺悦心院など見めぐり、脇澤庵のあるし、犬仙とて、さがみの國あしから山の麓より來れりなと、ねもころにかたらひてかへる。此庵の前に川あり、大なる土橋かけわたせり。外山のしけみにほくらあるは、をたきとか。

みつかきは青葉へたてゝ夏山に神の鳥居の見ゆるかしこさ

此みなと邊には、むかしハツヒランといへる蝦夷すみたり、その末今も残りたりとどころのものかたれり。

廿九日。あしたより風とく吹いてたゝはやとおもふに、雨いやふりにふれは、えな

んいてたゝすしはしとにのそみてうれゝのまゝ、こゝの名を五のかしらにおきて、

わきやらすきほひ雲たち野も山もさみたれ近くはれすふる雨

坂のほれは、神明のいはくらあり、右のかたは、觀世音の堂也。御前の鰐口の鈴に、大同二年とあり。まことにとしへぬる森にてやらん、老たる木々にしられたり。

三十日。近きうらわ見てんとつち橋より鶴首山のいたゝきにのほり、をたきの神にまうて、尾越のみちを行は、つるくひうしのくびと、立石雄元にた雌鳴雄鳴新井田新井田の磯邊に見へたり。猿樂石、烏帽子石などいふ名は、叟山といふ磯山のあるよりいふか。

としふれと山は翁の名におはてしけるわか葉にこまかへりぬる

木浪の浦にゆけは家はふたつたてり。此磯のまさこの中より、ましろなる舍利石ひろふとて、たまゝすきやう者の至れと、母衣月のことにしれる人まれ也。清き汀にたゝすみて、

沖つ風ふきにけらしなたもとまで寄せてきなみの浦の涼しさ

鮎田芋田といふ浦つたひて、九艘泊といふあり。こはひのもののはてにして、扶桑留ならんとうへなるものがたりを人のすれと、石腦油ソラ油なと涌いつる川あらんか。松前

の西の磯江差のはまやかたに九艘川といふあり。いかにととへば、そのむかし、此水上の山よりふなの材木、九艘に作るへきを伐出したるといへど、その小川にあふらの氣ありといふめる人のあれば、むかしは臭水油なかれたらんよりいひたるとしられたり。九艘泊も臭水油にや。此泊を舟にてめぐりて、附子フシといふをへて、牛瀧に至るといふ也。此くさうとまりはむかし夷のみ栖しかと、いまはたへにきなど、その處のものゝいへり。おなしすちをひるつかた、脇野澤にかへりたり。女あまたあつまりて、かいてふものして、桶に水くみいりてになひさるなかれありけるを見つゝありて、

うち集ひくめともさらに盡せなくわきの澤邊の水の流は

郭公の啼やおほへて、折句うた。

わか方に聞へこそすれ野邊近くさはなく聲のはつかなからも

五月朔の日。つとめて五日の祝の幡を門々にけふよりたてゝけり。此ころのなへふりてより、いよゝ空のくもりかちにはるゝけちめも見へねと、さつきの空のくせにこそあらぬ、いさふらはふりねとて、脇野澤の幡をいつ。神明のかんやしるにぬさと

りたいまつれば時鳥の聲頻なり。

わきてけふなきもをやまぬ郭公をのかさつきを空に名のりて

松か崎とて木々おほひ立ておかしきところあり。此浦人の海參あみに入たるを曳あけたる石を、こゝにすへて、石神とて祭しかは昔よりはかく高くなりほれりなといへり。口廣河といふなるなかれの末は海に入る。水上にとしふれる杉の生ひたり。

いくちひろむらたつ杉のかけおちてみとり涼しき山河の水

此河邊の岸よりはしめ、燕子花多く、草の中に在ければ、

かきつはた色もやつさす咲にけりふかきみくさに生ひましりても

小澤といふ村をへて、殿崎といふあり。古城の址に木立ふりたるは、いつの頃にや、松前のおほんつかさの遠つみおやの柵し給ひしところといへり。そのころより祭れる飯形のやしろあり。近き正徳のむかし、金海といふものいとよき手してかいたる額の半くちなから残りぬ。寺々のこぼれたるあとならん、御佛の具なといまも畑たかやせはうることのありきなとかたる。陌のかたはらにあや杉のふりたるかあり、

これなん松子の君といふかうへ給ひたるとて、杉なから姫小松とよひ又の名をひめ
こすきといふと、里の翁のをしへたるを聞て、

ひとともにめてしその名はこもりゐてすきしむかしそき、渡める

蠣崎の里を過なんとすれば、行人の云、こゝに鷺の湯といふよき湯あり。むかし火矢
にあたりて、はぎのくたかれたる鷺の湯の泉に入て、日をふるまゝいえてとひ去ぬ。
さりければ、しか名つけて、身をうちたる人にわきてめぐりよしなといへり。こゝを
離れ行片岨の草にましりて、山吹のうつろへるも、いま咲いつる多かりけるに、撫子の
みちもせにさけは、

誰かいねしあととし問へとくちなしの色のちりしく床夏の花

めくら河といふ小河わたりて、宿野邊に來けり。こゝをむかしは夷人のスクノヘツ
○秋田本ヌとかいひたる河渡て、廣野を過て檜河をわたれば、村あり。世中やは
しきとし、人みなにけしそき、松前に嶋わたりして、むなしく平所といふ名のみたてり
といふ。暮澤といへる邑のあれば、おもひつゝけたり。

澤の名のくすのわか葉に風吹は秋をおほゆる袖の涼しさ

あさり貝とる濱つたひくれは、河内の里也。松の林に立る鳥居あり。こゝにまさし
め給ふ觀世音を神としまつる。うはそくか庵の前に、今盛なる櫻のありけるは、あや
しきまてめつらしかりけり。

夏かけてちらぬためしをみしめひく松にやならふ花の一もと

里なかにいとひろき河あり。からうつふたのとき舟さし寄るに、これは、此ふな
もりのかたるは、近きとしから國にはなたれて歸來る。おほ船の楫とりにて、そのふ
ね流したるつみはてぬかきりは、おほふねのるわさもえせて、かゝる河長となりて、身
もたゝす、あけくれのほそき煙をたにたてわひ、老かゝまれる母ひとりをはくゝみか
ぬるとて、なけいてさほさし、このみなかみにさかのほれば、銀杏木といふ山里のあり
てふるきみやしろも金七五三、神明といふかおましませりなとかたらふまに舟はつ
きたり。櫻の木の皮をとり、櫻の皮もてぬひて、沓つくりてあきなふや多きは、津刈の
郡にひとし。此市中のやよりもたかくうてなのやうなるものを造あけてけるは、火
などのをりの料にやとおもへは、ふな見やくらといらへて、みなと入あるは、沖行を見
やるまうけとなん。こよひはこゝに宿つきたり。

二日。ひるになりて出たつ。里の末に熊野をあかめまつれるみやしろあり。いつのころにか此社をひきより高きにうつし奉とて、つちあはきたれは、大同二年と記したる鰐口の鈴ありきとて、今も御前にかけたり。舍利河といふにつち橋かけ渡せり。玉やいつる舍利の石などや涌出てんなかれかとふに、ゆめさることのなきよしをこたふ。こひちに濁りたるみなそこを見れば、こゝにいふさりこがに、又いふ去蟹てふむしのいと多し。おもふに此あたりの詞として、さもしをしやといひ、さりをしやりといへれば、さりかに川を蟹をはふきて、さり川といふへけんを、れいのあやまれるならんに、舍利川とふみなにも、書かせてけるも又あやし。此山おくに、行ほと、二三里にして、湯の河といひて、よき温泉のあれは、そこにゆあみすとて、行人ありて、休らふかたはらの水草の中より、小鴨のとき鳥のたつを、鋤よこたへる男の、蘇我の馬子鳥といふもあやしき名なれと、ある人のこれなんすかのむら鳥のあやまりにやといへり。けにやあらん、たかへを、田かふといひ、あしかもをよしかもといひ、あきさをあいさといへは、すかのむら鳥もうへならんかと、おしはかられておかしければ、

澤水にあさるやふかき夏草にたちましりたる菅のむら鳥

おくの海に足を空になして、波を離ては、羽うつこともえせぬ鳥の、善知鳥に凡似たるをわたり嶋にては、平家鳥といひ、又おやをおろそかに足もてふみたりけるものは、みなかゝる鳥となりても、やすけにつちだにふます、あがおもふかたに飛ことあたはず、あら波にたゞよはされ、潮と浪とをちからに、うきめ見けるおそろしのむくひはあるなり、よくおやにはつかへまつれと、きようならぬ子にこれ見よとて、しめすを、おやふみ鳥といへて、此浦にては、もはら平家たをしといふは、いかにとなれば、やしまのたゝかひのむかし、この鳥のなくか、霧霞の中にかくろひて、人の呼ふやうに聞へしかは、たひの人々、こは友ふねのあまた集ひて、叫ならん、いてその方に、とくこきてんとて、沖へくくと、かちふりたて、あらぬ潮みちにまよひ、あらき波間におほれて、おほくの兵のふねともくつかへりたれば、平氏たをしたる鳥なればと、かたる海士とともに、田野澤といふ小村に出たり。山かけに、稗まきたる小田の、もへわたる水、涼しく見へたり。

生ひしける苗の葉すゑのかくるゝはやま田の澤の水や増らん

山かたつきて行に、分安き路ありと、人のいへるにまかせてゆけは、あらぬかたにふみ入て、たとるくかへりて、戸澤村に出て、角違といふところにかふ。むかし斐陀の

工等か、魔利支天の御堂いかめしく造るとて、墨繩引あやまちても、たびくみたるかゆへ、村名とはなりたり。その堂はやけて、今はしるべ斗に建るなといへは、

ひたゝくみうつ墨繩の長き世をかけてものうき名にやたつらん

泉澤といひ又の名をは、二里越しともいふ村を左に見つゝ、城箇澤になれば、日かけかたふけは宿とふ、いなきやむかしありたりけん、月照山城澤寺といふ寺あり。此海邊にては、うへなう古きおや寺ともいふへけれど、田鍋の圓通寺の六世、大休善遊和尚の寛文の頃開山とせり。

三日。朝とく出たつ。里のはしに木ふかき杜に、神明のいはくらあり。木下くらく、水なかれて、こと草もなく、麻のみしけう生ひたちて、あさ清めする人あらねと、おのつからきよけに見奉りて、

このまゝに手向む麻のおほぬさや名越の稜こゝにはらはゝ

宇曾利河をわたり、宇多邑河森邑をくれば、りうここのその茂たり。釜臥山をまつる、下居のみやあり。安渡の入江を見れば、城ヶ澤よりさし出たる、芦崎とて、糸引わたしたるやうに、二里はかり海中によこたはりあら波をさかふれば、さゝら波たちて湖に

ひとしう、船もやすけにかけ泊もとめ、冬は鱈つり、春は鱒のあひきに里とめり。舟の行かいすれば

生ひしけるあしてふ崎の名はあれと分る小舟はさはらさりけり

いかはかり芦や多く生ふるならんといへは、此崎は、としことにいと長くなり出ること、わらはなとのはきの生ひのほるに似たれば、足崎といふといらへたり。ほと近く大平の里なり。田家村よりうつしたる、願求院のあみたほとけはかりは、そのいにしへのまゝに残りたり。近きころあらため作りつれと、むかしの梁の札に、朝日さす夕日かゝやくその氏にうるし千杯、朱千盃、こかね万兩とありしとなん、平泉に聞しとは、まこしはかりことのかはれり。いはれあることにや。野も山も、金帯花盛なるは、夏山のもみちたるやうに、青葉にましりておかし。此入江のへたのみ、はるゝと行にいくはくかひろき野邊に、金鳳花の咲たるは、目のいたらんかきりくちなしをなかしたらんかと思やられて、去年見しわたり嶋の女郎花の盛なるにおなし。こゝをそむきて行に、林の中に三日月堂とて、ほくらあるに、雷斧石をはしめ、いとなかき石を立てまつりぬ。行ゝ見れば、女あまたして貝つものとりぬ。

おりたちてしゝみはまくりとる海士の袖やぬらさんしほの入江に

肥泥邑を左に、金谷に出たり。むかし、飽屋仁土呂志宇曾利のともからを、いくさにかり集しかは、二千騎にたれりとかごは去年の日記にしたりければ、かいらしぬ。海蝦河をわたりて、万人堂の杉こらのみちをくれは、田鍋のあかたなり。

四日。雨ふりぬ。公世の館にいたりて、遠の杉村に郭公の啼を、あるじとともに、聞つゝありて、

軒近く遠にや聞んほとゝきすこなたはよそに杉のむらたち
雨のをやみぬれは、いよゝなきたり。

なれもいま心やはるゝほとゝきす雨の名残を見せてなく聲
海士の子か、菖浦うりありくを門ことにかふ。

あま衣ぬれて匂はんあやめくさ曳手にふかき露もこほれて
五日。笹の粽に、百^{*}倍[†]の根くひて、しほてくさやことにも、のし、此くさのくきもて耳か
くわさは、飽田のふりにおなし。けふも且より雨ふれは、

沼水にひちしたもとに引かへて軒のあやめの雨にぬれなん

さと風たちて、あやめひとすち吹おとしたり。

あやめくさけふたかやとも軒はふく風さへ袖に匂ふあさ戸出

六日。男女かたらひてたゝすむを聞は、きのふは一日ふれくれて、けふにきのふのいやしありくといふを、男の云、その雨のまきれには、おもふかたにさそなひねもすあそひて、いか斗たのしきめにや逢ひてん、男のならひとて、われはあしたより雨にぬれて、いやしありきてくれたりといふに、女いなわかこの身は、野山におきたりとも、鳥けものすら口しても袖ひとつ引こともあらし、世にたのしみあらぬ此身、あかとし十とせもわかからはなとたはれいひて過る。女にかはりて、

いまは身も六日のあやめ引人のあらぬたもとほぬるゝともなし

十日。この四五日はかり、風にふして、日記もせてくれたり。ひるつかたより人々と共に、赤坂の野らをへて陣場平を行て、飯形のみやを拜み奉らんと、遠方に鳥居を見やられて、

夏山のもみちするかと紅に見へしは神のとりゐなりけり

河の中に、くゐせさしたるに、木の枝なとくちとゝまれり。

山河のぬく井にちりのと、まりてはやせの水も行なやむ也

十一日。折かけ垣のあるやの邊に、杜若おほく生ひたるかめつらしければ、見つゝありて、

咲にけりかこふめぐりのかきつはた池のこひちの色もへたてゝ

十二日。公世の句に暮雲能伎後、只有蛙鳴頻といへるに、

山のはに夕ある雲もくれはてゝたとる田つらに蛙なく也

十三日。雨のふれゝと、近き小田の早苗とるを見て、

五月雨にぬれてとらすは小田なへて生ふるわかなへふしたちやせん

十四日。馬いくつもひきて、田の中をめぐると、田植る前には、かくそせりける。うまともおふ聲のくれても、籬のとに猶聞へたりければ、思ひつゝきたり。

つかれこしたゝすみやせんくれふかふませのそともに駒のいなゝく

十五日。中嶋公世の弟なりける、くすし徳廣てふ人の脇の澤といふところに、しる人して、そのみちを行ひてんと聞へて、けふなん旅よそひして、出たちてけるにおくる。
いく薬とりさかへなん大汝少彦名の神のめぐみに

大なる松にたちまじりて咲たりける桐の花の、風にふかれて、庭の面にいたくこほれかゝりたるをひろひて、わらは笛のやうに吹すさひありく。

松風のしらへもそひてうなひ子か桐の花吹聲の涼しさ

十六日。人の藥かりすといふにともなひて、青蒜の邊までいきてんとて行に、石神とて、梵字石にゑりたるを立てまつる。みちをへたてゝ、清水のあれば、

石神のみたらし河や苔ふかきいわ井のしみつ清くなかれて

他家の村のはやしと、妙見の森とのあはひに、うつき生ひ、松むらたてるほとりに、六尺あまりの大石のふしたり。これなんいにしへの願求院のあみたふちの庵のあとにて、秀衡のうしたてたまひしそのしるしの石とて、あさ日さす夕日かゝやくぞのしたはこゝならん。此そこに、うるしこかねはさたかにうつみあるならんともとむれば、そのまろひたる石を草むらよりおしたてゝ見れと、さらに文字なとも見へす、ほろにもあらで、野はらのまゝ、田屋のはやしに入て、ちいさき祠三あり。ひとつには、いとふるき石の地藏尊六をおさめたり、そのゆへはしらす、梭河の橋わたるとて、子規のなけは、

田やつくる四手のたをさかはやまより行かへりなく聲のしけきは
 此村の子ら、田うへするならん、うたひとよむこゑの、木々しけき岡邊のあなたに聞へ
 たるをりしも時鳥のをちかへり鳴は、

うたひつれ門田やうふる乙女子かかたらひなる、山郭公

十七日。雨のなかめおかしとて、公世の館にひねもすあれは、かきのとの田面にうた
 ひこちてなへとる。

けふいくかおりたつ田子のぬれ衣ほすまやはある五月雨の空

五月雨といふことを、

さみたれにいさゝ小河や増るらしめくりの垣をくゝるしらなみ

遠方の山のすかたは雲にきへ軒端をくらき五月雨の空

五月雨のふるやの庭に落瀧つ日數かけそふ軒の糸水

しはしのはれま見へたれは遠方をのそみて、

さみたれのはれまにみねの松一木のこしてふかく雲のいやたつ
 くれ行くこゑ雨のふり頼ぬれはあゝるし公世の、

五月雨のふるもしつけき入相のかねにくれ行遠の山寺
 となんいへりけるを聞て、

あすもまたおなしなかめにまとあせんふりくらしぬる五月雨の空

十八日。雨猶ふりぬ。すこしをやみたるゆふくれふかう、うはそくのやならん、梵貝
 の音聞へたり。こは月まちのためし也。

山伏の夜のおこなひに五月雨のはれまに月の出るとはしれ

十九日。正一位明神のやしろにひねもすつゝみうちぬ。日てるをやいのりけん晴
 たり。夕くれて田面近きところを過るとて、女どもの歌うたふを行くきゝて、

いとまなきほともしられてさなへとりくれて田歌の聲を聞ゆる

二十日。此あたりはなへてよねよりひえいとおほく、田ことにまきていな田よりひ
 え田の町はおそく苗とりわたせと、ひえ田もふしたてるかたありとて、いな田とおな
 しうとりうふるかをちこちに見やられたり。

おりたちていな田ひえたのわかなへをとりくゝうたふ聲聞ゆ也

廿一日。廿二日。廿三日。あへてことなし。

廿四日。あしたより雨ふれり。河五月雨といふことを、

五月雨につなく正木の綱たへて柚木なかる、山河の水
夕つかたはれ行に、雨後早苗といふことを人のすゝめたり。

雨はるゝちまちのさなへうちなひき露吹こほす風の涼しさ

廿五日。去年見たる宇曾利山にふたゝひ登てんとて、中嶋公世とともにかたらひて、
あしたの間くもりたれと、雨はふりけにもあらねは出たつ。こゝにも石神平いそとてひ
ろ野を行ほとに雲雀おほくあかるをあふきたゝすみて、

もゆるより葉くさになれていとあつき夏野の雲雀聲もたゆまず

矢たて山の路はいと細く、槇のみ茂りあひてくらきに牛の背に大なる木の鍵四をゆ
ひかため、これに材木をのせてあまたみちもさりあへす曳いつれは、いかんかたもな
うかたそはより生ひさかりたる梢を力によくれば、きのふの雨のなこりにや、木々の
雫雨のふるやうにこほれかゝるに、おくふかう日くらしの聲しきりたり。

ふる里をおもひくらしの虫ならて音にこそたてね袖ぬれにけり
梢のあはひより、はるゝと海の見へたるもおかしと見つゝ、こゝを行ゝおほつく

しこつくしといふたる山のかけ湖のうへにおちて、岸邊はなへて石楠花の盛なるか、
うす紫にこほれかゝるを分れば、左右の袖もかくはしく行てみてらに至る。川島秋○
川邊な かし湯あみすとて在けるをとふらへは、その優婆堂のはしらに、

人まちて太山のおくにかりねする窓の戸叩あらしたになし

とやよひのころとかいたるは、武憲の手也。ともに湯あみしてんと、その比契したれ
と、こと方に病ありてたかひたるを待けるにやあらんと、そのかたはらに返しをせり。

なかめ捨ていにしもつらしかりねせし人はあらしの音のみはして

廿六日。菩提寺のおちくほなるところにふして、あけくらの頃鳥の山ふかくなくか
幽に聞へたるを佛法僧にやあらんと人々の寝さめていふ。こや慈鎮和尚正治のこ
ろ、むか國は御法の道のひろければ鳥も唱ふる佛法僧かなとなかめ給ひ、はた松の尾
のみねしつかなるあけほのにとふるき歌にあれば、夜あけなんころは猶鳴ものにか
あらんたとすゝかへして。公世の、

夜をのこすはやましけやまかけふかく佛法僧の聲をこそきけ

といへるにわれも、

山ふかく三のみのりをなく鳥の聲ほのかなる明方の空
手あらふとて湯ふね近くたゝすみて遠かたを見やり、

あさもよひ霧のたつ山かすむ山湯氣よけふりよ空になびきて

山にいつくさの悶石よりなかるゝ湯あり。朴消あり。雄黄あり。石鹽あればかな
つゝみ鐘鱗口花皿をはしめなへての金の具釜臥山菩提寺とある、二の額のこかね色
に書たる南岳禪師の毫のあともしもさびくちたり。鶏頭山と、林碕の明神の岡との間の
したつかたを行に雪のつもりしかと見まよふ斗ましろのたかすなをふんて湖の
へたをつたふ。

又たくひ波のいつこに鳴つ鳥すむやうそりの山の水海

公世。ゆくゝいへり。

鳥の名のうそりの山の水うみのなかめ涼しき朝な夕くれ

劍の山の麓に、地獄の引つらなりて、涌いつるあはひゝに、ふる瀧の湯ひえの湯
女の湯花染のゆしんたきのゆとて、ゆけた五ところにあるに、やまうとそれゝに居
集る。湯あみするに、女あまた紺の湯まきしてならひ、かしらにたのこひをかけ、大な

るかいけといふものして湯をひたにくひ、これをかぶるとてもゝたひちたひかし
らにうちかけてければ、いと長き髪のかた過てぬれみたれ、あるはくしけつるに、みな
まなこふたきたるさま、ところどころ十戒のかたなと見たらんやうに、さなからち
こくのふるまひをせり。伽羅陀山のほさちのおほんたけはむさかふたつあるのみ
ほとけは、恵心定長の作り給へりとそ。去年の日記にしるしたれば、ことゝにしる
さす。いにしへは、天台のみてらにや、圓仁大とこのかい給ふほくゑきやうあり。そ
のおくに妙法蓮華經序品第一、天台座主梶井宮盛胤二品親王、奥州南郡田名部庄、吉祥
山圓通寺住持大英和尚、寛文西巳祀五月としるし給ふていまは田鍋の圓通寺の末院な
り。この圓通寺は、しもつふさのくに東昌寺の郎庵禪師の法孫、三世の覺翁和尚の弟
子、文明のとしすけして、宏智聚覺和尚とて、大永二年にひらき、山を吉祥といへり。此
大英は七世にあたりとてか。水うみのへなるやまゝのあはひより、釜臥山のいた
ゝきのみ、仄にあらわれたるをあふく。此たけの神を、正一位嶽大明神とて、明暦三年
の棟札に、本地釋迦佛、七月九日、山主雲外軒の比丘とありきとなん。夕くれ近づくに、
しら雲よこたひかゝりて、杭社のみねしるへはかりにあらはれたるおかしさに、公世

たゝすみていはく、

何くれとおもひつくしのもりの雲見るに心のはるゝたのしさ
わかなかめたるは、

長き日をなかめつくしのみねのくもかゝる夕の風の涼しさ

廿七日。けふ歸りなんと、おき出る枕かみの壁に、可も不可も不二摩訶薩の湯のかけ
ん、知枝と落書ありけるは、蒲野澤の法林寺の僧、呼玉とて、此年身まかれりしの手也、さ
すかに學生の言葉としられたり。大師堂の邊にいたり、榑石舍利石つとにとてひろ
ふ。舍利は粟の大さして、しろきは、あこや貝の眞珠に似たり。そかなかにくろき星
のありけるは、かへることなるをよしとて、人いみしくめてたり。鶏頭山のしけ
き梢にかくろひて、人の聲してあやしうもの呼ふやうに鳴を、まをとりといふ。

一聲に猶淋しさそ幽なる谷よりやまを鳥の行らん

あけ行ころ、水鶏の啼しをなかめたるあれは、湯ふねのかべにかいつく。

かけくらしき眞木のとやまや叩らん明て鷗の聲を聞ゆる
湯坂を過て、大武奈の坂より、田鍋をいつこにやとのそめはたゝ野原のやうにはるは

ると見へたり。

里近く植にけらしな小田なへてみとり涼しく見ゆる遠方

廿八日。田鍋の里のしりへより田つらの見やられて

ふしたゝぬまとてうへにしほと見へて遠のちまち田なへ茂る也

廿九日。夜邊より雨ふる。けふは早月の餘波とて、かきくれてふるに出ありけは、か
ゝる雨もいとほてなと人のいへる。

けふといへはふらはふらなん五月雨のあめの名残はぬるもいとほし

簑くちぬ斗にそほぬれて、田子のうた唄ふを、

雨に着てみのためしやうたふらんいな田ひえたのなかにむれゐて

成章のもとより、けふは雨のまとゐにかたらんなど、せうそこにいひて、そのおくに、
うとくとも時にこそよれ時鳥としにふたゝひ逢ふ五月かは

となんありけるかへし。

杜宇ともにかたらへあすよりはをのかさつきの名やはたつへき

やかてそのやとにいたれば、咲いつへう、卯花を花かめにさして、郭公のふるきうたを

かけてける、あるしの情もあさからねは、おもひつゝきたり。

うの花のかけにこもりて子規ふたゝひ宿にはつ音なかまし

六月の朔。けふの氷室の祝とて、ひと夜酒つくり、氷餅など、わりこかれぬけやうのものにもりて手ことにもてありく。雨は夜のまゝにをやみもやらて猶ふる。

五月雨のおもひのみして涼しきはけふのひむろのためしならまし

已のときはかりあめははれたり。

二日。この日、山のうへ宇曾利山をしの湯あみにいきてんとて、きのふより、智愚庵に

在て、あるしの實元上人、あきはま何某、ひきと墨花ほうしなど、いまた（マ、）とはくらよりのしてんとおき出さいてんとよそひたては、神うちしきり、雨いたくふれゝは、たひ衣たちなんこともえせて、ためらふうちに、はれたれば、

いつこにか音も仄に鳴神のはれて涼しき白雨のそら

遠の山もとのしろきは雲かとまよふはかり見やるはみな卯花なれば、

やまのはの雲とし見ればうの花の咲る方よりしらむ夏夜

うはらのかきねも花さき卯の花もいま盛なるは、こと國と五十斗の日敷をくられたれ

は、たゝうつきのはしめにわくるこゝちして、

よそにふる雨のなこりに卯花の露分衣ぬれて涼しき

笹長根まる山、かれぶな湯さかをすくるにふたゝひ神のひゝきたるはいつこの空ならんと行に、板しきのことく木をしきならへて、かけはしのやうなる路を、こゝらの人ののり行母馬に、小うまの乳をさかしあまたいさなはれて、あとさきにしたかひたつ音の、こほくゝとふみとゝろかすは、なる神より音たかう過て、菩提寺近くなりて三途河のへたに、馬をとゝめて人みなおりぬ。

のる駒のからきめよそにしほならぬ海のみるめも涼しかりけり

うは堂といふやに、あまたの人と間をへたてゝて入ましりてふしたり。

三日。ひるのま風とくふきて、やかて雨ふれは、

いや高きまきのしけ山かせおちて梢涼しく過る夕たち

四日。夜半斗くもり、あした雨ふれは、鶏頭山にたちならぶ、遠近の山も見へすつくしもりも雲ふかくかゝり、かりふす庵の窓のうちになかめたり。

そひへたつ軒はの山も見へぬまで雨にいほへの雲かゝる也

五日。はれたる窓にひきとをはしめ、實元上人、琴かいならしけるを、地獄めくるすきやう者なと、立とまり聞つゝ、行にましりて、閉郡みやこ島邊より來るとて、くつやうの女湯あみしてありたるか、おかしとやおもひけん、唯此おもしろさにいさなはれて來るといへは、ひきどにやあらん、さ一手くくとせちにいへは、すへなうかいならしたるは興あり。

琴の聲嶺の松風涼しきやいつれのをより秋をしらへて

六日。鶏犬の聲もなき山寺なから、三四のからすつねにすみて鳴にめさめぬれば、湯のやかたも見へす。秋ならぬ霧に、鶏頭山、伽羅陀山、劍山のみね麓をこめて、夜を殘す燈のひかりに、けいしうちならして、みすきやう聞へたるに、やかたくくにふしたるうはそくそみかくだのおき出て、かなつゝみうち、さくしやうならして、よりくにきやうよみ、なもあみたふちをとなふ。

霧の中にてみたらは、そこと灯のかけも、仄にぬかのこゑく

けにや、ひるになれば、空かきくれて、雨ふり頻り、やま川のみ音たかうなかれて、をやみたれと、四方は猶もや霧と霞と、なへてもふかく、近きあたりも霞見わくべうもあらで、

軒端より重なる山も見へぬ、まてはれてもかゝる夕たちの雲

七日。里より人の來てかたるを聞は、去年よりアツケシの磯邊なる、ネモロといふところ、に在し、カムサツカのほとりなる、ヲロシヤの人、こたひめしあればとて、松前の福山のみなとに行とて、エトモが崎よりのり出て、霧ふかければ、ふなみちにこきまよひ、此南陪の岩屋の浦によせて、わらはの居るにこととふに、あなおそろし、だけ高く姿ことなるもの來しとて、なき叫ぶをいぶかり、浦のをさ、ものかきなと、海邊におりてとは、日の本の詞をさへぐやうにもいふあり。こは世にいふ赤蝦夷人なめ、譯辭のいふにやとおとろきて、いそぎあかたの君に申ければ、人々集ひ來りて、けれと、まほの風吹來て、うしのかはの小舟して、沖なるおほふねに行と見じかと、霧の中にこきまされたりきのふのことゝ、人々もはらかたる。

八日。田鍋の徳玄の新發意、寂秀と聞へてけるかもとより、

恐山人欲上 行矣半天中 釜嶽濛然雨 澤邊颯爾風

步成凌磻道 攀盡望晴空 時掬幽溪水 應知有梵宮

となん聞へたる風と宮とをものして、

しほならぬ海を朝夕みやま風ふけは涼しく波たつのみや

九日。夜邊よりまちかき隣にふしたる、越中の國砥波郡なるすきやう者二人、此旦、劍山こへて、おほはたのはまやかたに行といふにつかはしたり。

つるき山わくるやいかに焼太刀のとなみの關を越るおもひと

十日。きのふよりの雨ひるまにはれたれば、近き邊にとてひとりふたり出ありく。

此山は蓮の花ひらのことく八のみねくそひゆるを、佉羅陀山にたとへ、むかふ左を鶏頭山、右を劍の山、大都具志山、小津久之山、屏風山、釜臥山、湖の水は八の瀧とおちて、正津河に流て海に入る。此水上の嶽をやたきといへは、八瀧山といふ山をそへて、名たゝる八の山、八のたけとて、秀たるにかこまれて、水海の岸より、岩山むらたてるに、雲つねにたへす、あさ日おそくさしのほり、夕日はやくかけるひ、ごさめそほふる日おほく、つちさくはかりの水無月すら、朝な夕くれは衣かさねきてくれぬれば、涼しきかせまたんと、水むすひはしるする日まれなり。

みな月の空ともいさやしら雲のかゝる涼しきみねのやま寺
十一日。鳴神して、雨ひねもすふりて露はれす。

十五日。この二三日ことなければしるさす。食堂に湯あみし宿る人の浪のかたあ
るうちはをもち来りて、これにうたひとつかいてといふに、

吹風の秋かとおもふ河水にあつさも浪のうちわすれては

十六日。此山に十の景をさためたり。四のとさくさくの歌よみてと、人のいへれ
は、つくりてしるす。

大杭山晚霞

雲もまたおほつくしねに消やらぬ色を花とし霞む夕榮

鶏頭山躑躅

山の名のとりの尾上のいはつゝじ咲て春とや告渡るらん

八瀧山納涼

涼しさよ夏ともさらにしらま弓やたきの水のひくく山かけ

小杭山白雨

あつさはよそにつくしの高からぬ嶺によこたふ夕立の雲

屏風山秋月

吹風もへたてす峰のうき雲をはらひてすめる秋夜の月

湖邊楓樹

こや時雨そめていくしほ鹽ならぬ浪よる岸に立るもみち葉

劍山叫猿

時雨ふる山のつるきのつかのまもをやまぬ聲や子を思ふさる

釜臥積雪

春はもへ秋はたく火の色に染て雪には埋む釜伏のやま

佉羅陀山三法鳥

鳥さへも三の御法のことさへくからたの山の夜半のしつけさ

林崎鈴音

湖の波のしらゆふ神籬にかけていく世をふる鈴のこゑ

十七日。この六日七日雨雲四方をおほひふたきてけれど、こよひ晴れて、湖のきしへの山より、月涼しくさしいつるに、おかしう琴かいならしけるは、ことさらえんになかめたり。

琴の聲波のしらへに風過て水の海てる月の涼しさ

二十日。はやし崎のしたより小舟にさをさして、きふたひにこきめくらせは、遠く沙

瀬の灘行おもひしてあやうけれ。とくふねつけてんと、わらはさをとりあやまちで、

笠よりはしめ、水いたくうちあけて、よろつぬれたり。○圖あり、うそり山に瀉といひ

くしのもり、釜臥山のほのかに見へたる三途川のきしに石楠花のさかりなるに林崎

の明神の岡のさし出たるこはいにしへ圓仁大とこのけさを埋み給ひて女ののほる

ことあたはす又恐山の圖にうるきの山からた

せんけいとうさんそのあらましをうたにせり

みちひなき海も涼しくみるめかるあまにひとしく袖ぬれにけり

廿三日。あけなは、地藏會なりけりとて、きのふより、かり小家たて、なにくれまうけたるに、午末の頃より、村々里々の、人あまた來集り、國々のすきやう者がなつ、みをうち、鈴ふりませて、あみた佛をとなへ、卒堵婆つかの前には、いかめしき棚を造り、薄かりしきて、高やかのかのいたやの木ふたもとを左右にたて、からほひなてしこ、女郎花紫陽花、連錢馬形に、な、のほとけのはたかけて、あかそなへたるに、御堂より、柱佛とてそきたに出たるをひとと、六文の錢にかへて、老たるわかき男女、手ことにもちいたり、この棚におきて、水むすひあけ、あなはかな、わか花と見し孫子よ、かくこそなり行しか、わ

かはらから、つまよ子と、あまたのなきたま呼びに、なき叫ぶ聲、ねんふちの聲、山にこたへこたまにひゞきぬ。

おやは子の子はおやのためなきたまをよはふ袂のいかにぬれけん

ちいさき帛の中よりうちまきいたして、水そゝきたる女、あか子かさいの河原にあらは、今一め見せてとうちなけきて、しほみたるところなつを此のたなのうへにおきたる女にかはりて、

をふしたてゝうへさらましを撫子をけふの手向に折るとしりせは

くれ行は、あまたの人々むれありき、おもふ人に物いひ、はくやうにかゝつらひてのゝしり、うは堂食堂、尊宿寮、小家へ来てこゝらの人の入みちてければ、ふしところなくとよみありく聲にましりて、山鳥(鳥)の明ん鳴なり。

廿四日。夜は明なんころほひ、こゝらの人、南無からたせんの延命ほさち、むつのちまたにおましまし給はゞ、あかよみのくるしみをのそきたのしきをあたへたまへ。十くさのさちをたはひ給ふのおほんちかひのあなたふとさとて、なみゐてねんすおしもみぬかにあてゝ、ふしていたゞきの箱の落るもしらて、わか子むま子のなきたまを

かそへかそへてなみたおとし、あるははしら板戸によりて夢見たるも、夜明はてぬれは、むれたち、圓通寺の大とこ、拂子とりて、からたせんの御前より、地こくの邊くまゝ残なくみす經しめくり、此たま柵に至り給ふに、又はせ集りはてたり。人みなしそきぬる午末のころ、田なへより馬曳てむかひ來れば歸りぬ。

廿五日。空うちくもる夕くれ行ころ、智愚庵にゆけは、なみのよりくかとおもふ音して、松杉の林にむしのむれて、ひしゝとくらふかなりとよみて、四方にひゞきたり。此虫は、豆の葉に集くに似てことなり。たまゝしにたるが、木のもとに落たるは、からすの多くむれ集りてくひこほしたるなり。はま邊にあさるからすはみな、松杉の森にむらがり來て、日ことにはみつくせともつきす、これにおぢて、山路に入て、蕨のほた、草の葉をくらふに、細きみちは此虫のくそまるに埋たるは、ごまなどをしきたるかことし。いかにしてかゝる虫のわき出しそと、ふる人もためしおほへぬことゝて、夕くれことには、みや寺の杜林のこのもとに、人もむれこのあさる虫の音を聞つゝ、あきれて、あさみあへり。

三十日。此四日斗風おこりてしるさす。けふの夕くれは河原に出て、手あらひて、み

そきのはらひ心になへて

夕風の袖ふくよりもみそきじてまとふ○秋田本心や涼しかるらんと世中のみな月はらひおもひやりぬ。

寛政五のとし、秋のはしめより末まで、みちのおく、北の海へたにある、おほはたさと、又いこんくまのうらつたひて、猶ほまのうまきおくの戸の、うまきのうまひくを見、言葉はかなうみるにたらさるころもて、まきのあさ露とはつれたり。

よき朝露

書月朔の日。此ころふりつゝきたる雨もあしたのまをやみて、空は猶くもりかちに、
風こちぬれは

秋來ぬと涼しくふけと誰宿もまた身にしらぬ袖の初風

近き日、このあかたをたゝはやとおもへは、去年よりもものかたらひむつひたる人々、
別も告てんとおほはたのさといきてんとほりして、路のほとちかければ、とくもいてたゝす、
うまの貝吹ころものして野原のみちに花咲たり。

露にけさほころひぬらし藤袴きにける秋の色を見よとて

關根野を過れば、はまみちあるに、ゑひすめ刈るいとなみに、さゝやかのかりやを磯邊
にひしゝとたてならひたるは、松前に見たる、紫苔稜津倍におなし。けふは海あれ
にあれて、かるてふわさこそあらね、波に根こしてうちあくる海帯を、浪かい分て拾ひ、
馬うしに附てもてはこぶは、みちもさりあへす曳たり。

すむあまのやすく心もひろめ草治れる世の波にまかせて

そのところになれば、田中なにかしかもとにやとつきぬ。

二日。きのふのことに小雨ふれり。寶國寺にとふらひて、深阿上人とともにまとゐして、雨中薄。

ほしあへす月をもやとせむさし野の尾花か袖にかゝる村雨

尋虫聲。

こゝにわけかしこにとへと秋もまた淺茅の虫の聲そまれなる

小夜ふかく、あるやよりかへるに橋の邊に、ほたるの集くを、

あき風に光も薄く吹れこし雨の螢のぬれてとぶなり

三日。寶國寺にあそひて、夕つかた雨ははれなから、ふかく霧こめて、砌の萩のなかはほころひたるに、虫のあはれに鳴を聞て、蟻光山てふやまの名を折句うたにして、めまへのけしきを、ありのまゝによみてと人のいへれば、

きりのうちにかくろふ萩のうすくこきさかりや愛るむしのこゑく
四日。あした日てりて晝より小雨ふりぬ。萩風といふことを、

こと草はふくとも見へす秋風のやとり定る庭の萩原

小田のほとりに、澤濁の花あへかに見へしかはだゝすみて、

咲にけりした葉はうきてゐさら井になかるゝ水の面高の花

五日。あしたくもりて、ひるつかたに雨そほふりてやかてはれぬ。夕くれてけふりふかき宿の門に、むしろしきて衣櫛つ女あり。このふん月、はしめて見たる月のをかしきかけに、残る暑さもけたれて、行くなかめたり。

蚊やり火のけふりいふせくたち出て月見かてらや衣うつらん

六日。空はれて、暑さつちの中よりもいや増りて、いなひえのほ出て、やはしき世にはあらしかしと、つとふ人よろこひぬ。 田上袖鴈。

めつらしなけふやきそむる初鴈の田面のほなみよしと鳴聲

いまたくれたてぬに、わらはむさかなゝさか、あるは文計の棹のうれに、いろ畫かいたるけたなる火ともしに七夕祭としるして、ぞか上に小笹薄なとさしつかね手ことにさゝけ持て「ねふたもなかれよ、豆の葉もとゝまれ芋からく」とはやしつゝみ笛に、聲とよむ斗ありくは、いてはの國、秋田の山賤のわらはは麻芋のからをおのれくのと

しの數に折て、藤豆といふ野にはふかつらに、卷ゆひにゆひて、この夜一夜枕としてふし、
あくる七日のあした、河にうちなかさよりことおこりていへと、おなし國なから久保
田の里などには、唯燈たかくさ、けありけと、さるをこなひもせさりけり。飽田郡に
ては、ねふりなかしといへと、こゝにてはねぶたなかしといふめる。はたねぶたにや
あらんか。ねむたとかけるにやと、人のあらかひ語るに、をからくとはやしもて行
を芦のすたれこしに見つゝ、ねむたといふことをかくして、

あすは又まれの一夜にふたりねむたなはたつめやうれしかるらん
七日。朝とく雨のふれゝは、

雨にけふぬれ渡るとも銀浪こよひは袖をほし合のそら

夕霧ふかければなかめわひて、

秋風に天の河きり吹はれよ逢瀬まよはん妻むかひ舟

こよひも火ともしたかやかにふりかさして、童のしかありけと、過し夜よりは、ひのか
けおとりたり。此灯火のかけ、寺々のたか燈籠の、松杉のうれにかゝやき、軒毎にはな
ぬか盆とて灯をかけたるに、螢の光、夕月のおかしさとめて、小夜中までありて、戯れ

うたに、ねぶたなかししてふことを、

あなねぶたなかしと秋の一夜をもおもはて星や祭るなるらん

人々こよひの歌よまん、銀河いつこをなかるゝや、いまは空かいけちくもりたれと、こ
ゝろあてにあふきて、夜半も過ん比。

棚機にあまの河なみうつゝとも夢ともわかつてこよひあけなん

八日。とみなることとて人のことつてしておこせたれば、田名陪にかへらんと、馬に
ていてたつ。路は朝霧いとくらきまで、四方をへたてゝ、うなの邊ともさたかならね
と、浪の音聞えたり。

まかせすはそこともしらしのるこまの行もおほつか波のうき霧

さと吹はま風にいさなはれて、餘浪なうはれて、行すゑも遠く見やられたり。野小路
といふ濱ひさしに、いわしとるなやのあるほとりの草むらのなかに、捨たる槌のあり
たりけるを、

秋もはや夜さむのころも構つつちをいとなき海士やわすれおきけん

鴉澤といふはまみちに、すんさあまたつれたる人の、馬にてとく來るは、たそと思ふに

近よれば、成章清茂のふたりのぬしなり。こはいかになとかたらひぬ、清茂は、於呂之夜阿の人來るにだつさはりて、松前の嶋わたりして、きのふ今日かへりきけるほともあらで、又、鉏のみなと邊に、おほやけのことにつきて行けるとて、此ふたりのぬしたちのおもむけるとなん。さりければ、どみにむちしてわかるゝにのそみて、なりあきらへ、行かふ駒中の別をといひやり、きよもちには「月日へて逢見しほともなみ遠く」といひ捨て、玉くしけふたゝびあはんことをねんして、はるゝとへたゝりぬ。關根てふ村をくれは、はせに小麥ゆひあけて、ほしたるかたはらに梢おしたはめ、蝦夷のしまをりの衣かけたるか、風にしふかれて、ひるかへりたり。

たなはたにかしつる海士のぬれ衣ひるまに風の返す也けり

九日。この田なへもあさ、夕霧いつもたちぬれと、山の神のしどきやまの神のはしこ多ければ、はたつものもよくみのりなんと人のいへり。いな葉粟葉の雪のことくものかゝるをじときといひ、松前にきつねむすひといひ、佐渡の島にうさきむすひといふものゝ、粟の葉にあるを、山の神のはしともはしこともいひて、とよとしのさとしとか。

十日。あした雨ふり、ひるはれたり。霧にこめられたる夕顔の咲かゝりたる籬根、ほのかに見やらるゝを、

わきて此いろもへたてす咲にけり霧のまかきを夕かほの花

ひるつかた赤阪野に、草花見にとて、川島中島なと行、坂にのほらんとほりして、左の草の中をほそくなかるゝをひるよりは、毒ありな吞そとむかしよりいひつたふたるとなん。

午の貝ふきもなかさはわすれ水音はきくとも人なむすひそ

阿加左可といふ名を、

高野山むすはぬ水の外に又阿迦さかまきてみなはなかるゝ

野分はしたなう吹て、眞萩葛はなひとつにみたれあひてちるへうふしなひきたり。

眞葛はふ萩のにしきのうら見せていくむらかけて野分ふく也

十一日。大島に行に、きのふのこと風吹けるに、百舌鳥の聲うちしきるかたは、椈山といふ。

秋風につはさふかれてもすの鳴梢さひしき山のかげ路

柳ふたもと、みもと、さしたるか、茂りあひたるあり。

みちのへの井くゐの柳うちかれていまはちるかに秋風そふく

けふの市路にたま祭のもうけの貝、それ〜にかひて、何くれもてはこぶに、うしうまの行かひ、みちもさりあへす引たり。

十二日。風いや寒くわたあつき衣かさねきてなりはひをうらふ。(むき)
萩のした葉も、

風吹は露そこほる、みやきの、萩のした葉もうつる斗に

月はうき世の、

山ふかくおもひ入ても思ひ出て月はうき世の外に見るかは

十三日。あしたの空かい曇りて、寒さきのふのことし。市中はけふのためしに、人さ
はに人たちわたれば、かまひすしく、おましらはんもにつかはしからねは、野山の秋も
見てんと、みたとへの河ふねさ、せて行に、風たち波いや高し。

みなと河こきそわつらふ渡舟しほと水との浪たかくして
そことなうわけ行に、野原の花ことにおもしろく見る、うかれありけは、つりやは

まやかたも過て、つかはらのうへに柵を作り上たるに、かれぬけやうのものもち行、水
さ、けたる女ち、母やしたふわか子やおもふはら〜とないて、ふしにふしたるは
こよひのたま祭にこそ。

袖ぬれん手向のあかよ折そへし水かけ草の露になみたに

水澤かんかけの阪をくたりて、おかしき瀧のあるを、栗の粉清水とて、きよければむす
ひあくるとて、袖いたくぬらしたり。

岩つたふ瀧のしらいと風にくりのこるあつさを袖におほへず

かくて、大澤になれば、相しれる龜磨は、海士のまねして、庵も海邊にのそみて、山かけに
たて、此十とせあまりも住つなとかねて聞へし處になれば、しはふきて入は、あるし
は机にひちつきて。源氏ものかたりのあかしの巻のなかはひらいて、ひたふるに見
いりたるをおはと見るあはちしま山のなかめを、そこと尻屋の磯山にかへて、のこる
くまなき月やおかしからんと音なへは、こはめつらしとなにくれいひはて、

海山を軒はに近く月花のみるめよしとてすみやならへる

あるしとりあへす、ふてをとりて。

海近き軒端の山の花もなみすむかひあらぬ月のわひしさ

こよひはこゝに在てなとかたらひてくれ行ころ、海は猶あるれと、舟あまたのりいつ
るは抱烏賊とて鯛つりのあかくといへは、

しほもみちいかにあれ行なみの上をやすけに渡る海士のつり舟

紅葉いかてふことを折句うたにして、

もゝふねのみるめあやうくちさとまていかにこくらんからき汐せを

十四日。またあけぬより人のおきいつるけはひしてけいしほのかにうつ音の聞へ
てせみ聲にすんしけるは、あるしにや。これや此あたりは、海士のならひとて、過しゆ
ふへたま祭るへきを、あかつきほらかいとて、夜ふかうおき出ても、ものさゝけたいまつ
るなりけり。雨はいたくふりいて、ひねもすやます。夕くれ行ころ、

あれはてし海士の笹家の旅枕かたしく袖に露やおくらん

となん。あるしのよめるに返し。

露ふかくかたしく袖を雨にさへこよひはほさん人のなさけに

十五日。きのふのことに雨ふり浪はいやたかくうち、渚の巖のこるましう、海のあれ

たるに、

たへてけふこく舟もなみいやたかくもゝへにへたつ沖そしられぬ

十六日。此ころの雨もけさははれて、蝦夷のちしままで、露のくまなく見やられて、こ
ゝろのとけく、

沖つ風吹さそふまに雨雲の餘波もなみの末晴る空

けふは、おほはたにいなんと、龜丸とともに、かんかけのさかをよちて、四方のおもしろ
く見やり、鷺の巢といふ山の谷をへたて、近く見るゝゆくに、たへなる文字もあり
とこそ、聞けなとすして、

ひなこもるわしのすみかの尾上には妙なる鳥のあとやみすらん

夕くれ行よりわらはおとりてふことすとて、まちゝにつゝみうちて、よそひたちぬ
れは、ゆくりなう村雨したり。あなものうの雨やぎのふまて鳴物とゝめよとのおほ
やけのおほせことをまもりて、けふになりぬれは、こはいかにはつか斗三日四日のた
のしみを二日のなくさみもあらてとめのわらはあけまきはなりはひのことにひき
かへて、おのれゝかけさうしけることなにとりませて、いたくなけくに、夜ふけ人

さたまるころ、月あかくてれば、つちくにつゝみのこゑ、人とよむ聲したるに、戯れうたをつくる。

つゝみうち手うちまたにうたひまふ聲すみ渡る月のよふかさ

十七日。たなへにかへり、あけなん日にかんわさあるにまうてんと、ひるよりいてたつ。行く見れば、ぞはまの沙のうへにおかき男女やすらひて、よんへのおとりの、たのしさ、けふのはたこはさ、はしといふ也。うしひき、こんふとるわさの、あなくるしさといふを、

磯の浪よるはたのしとうたひても潮のひるまやからき海士の子

十八日。あくるより、けふの試樂のよそひして、しめひきわたし、浦々村々より奉る。ひともしにかさり、みまへきよらにも、とりの机やうのものに奉りたるは、うつのみやをうつし祭りて、柿本のみたまをあかめ奉るとは、しられたれと、たゞ正一位大明神とのみいたゝきまつるは、ひめたるためしにや。ほうしなとは、水の月かけを此寶倉にこめて、そのみかたしるありきなといふめれと、けふに祭りするも、救世ほさちなれはといへと、誰見奉りし人さらに、なけれはすへなし。みまへを月のきよくてらすに

高角の松とすし奉りて、

おもふことをみそなひ給へ神籬をうつす木のまの月のくまなく

十九日。祭見んとて、めかりかつぎの女、老たるわかき、山賤の女の出ましるふりあかきたのこひのときものにかしらをつゝみ、あるは黒きに、こたしのかふりし、うらのあけむらさきなるゑりをそとに折かへし、めのみいたし、又薄衣にまへたれして、はきあらはに、聲たかう人よはひ、おのかいはまほしきことを、はたひめたる人、わらはへなすることを、露もつゝみ、なうかたらひ、ゆくりなうあひたる人にむかひては、久しとなかやうにかたるに、さきおふ聲に、人はらはせて、いつくしうねり過れば、それゝのかたしろつくりのせて、またらまく引たる車、よつとゝろかし、笛つゝみに、はやしもて、みこし出ませりける。ひねもすとよみ行に、こゝろさしのふかきやのあるしは、つちにしほまき、いはひへにみき、つきてみまへに、高さゝけ出て、みこしをいたゝきぬ、かつけてけり。かくてまちゝめくりおましまして、暮ぬれば、れいのもしひ、軒ことにかけて、こゝかしこに車とゝむれは、いまたあつさとも、盆躍ものこれりとて、つゝみうち男は女によそひたち、女は男のふりまねて、ひころ躍て、けふをかきりとやおもふ、

とりくりに聲うちあけあるはたはれ又聲とよむまで、「そろふたく／＼稲の生穂より猶そろた」とうたふを、おとれく／＼躍はとよしのおそひなるにと、老たる女のさしのそきいへは、

八束穂にそろふやからん植おきて秋をたのみとうたふ里の子

二十日。ふみまねひせるやのとなり、あさかほの咲なるを朝な／＼見て、

まなひする窓に植見よ咲ほと露おこたらぬ朝かほの花

廿一日。常念寺に行しかは、中將姫、如法尼となりてのち、薙髪のかみすちを集て、ぬい給ふ。あみた佛のみかたしろに、海よりひろひしかなつゝみは、いほとせのむかしより、ふる館にこもりたる、菊池なにかし、遠つおやより、持つたへたるをこの寺にをさめたり。恵心のゑかき給しあみたふちは、たれか此寺にをさめしとして、しみはらはせて、あるじの上人はこにひめられたり。

廿二日。過し日きくち成章よりきたるふみにその行すりのわかれに、曳かふ駒の中のわかれをといひしむくひとて、おもひやれと、めん袖も露けくて又たなはたのあまの河なみうつゝとも夢ともわかつてこよひ明なんといふ歌をさきのふ手向たるとて、

八日の日贈りたりしかは、此返しとはあらてとて、

あはれとふ人のこと葉にたなはたのいと、身にしむ天の河かせ

おなしぬし、いつくのころはかへり来て、ともにとおせん、とおもひしかと、あし分ふねのことのほかに、こきめくらしてとふみに聞へて、

契にし日數もいつかたつか弓ゐるもかへるもまかせぬそうき

とありける返しかいてたよりもかなと思ふに、此ぬしよべ歸きと聞てと、めたるうた。

待わひてあたに日數もたつか弓おしてはる／＼おもひこそやれ

廿三日。おほはたに行はまちに、かもめ衛とも、交りあさりぬ。

しら浪のよるへになれて浦ちとりむれるかもめにまじりてそとぶ

廿五日。きのふけふあへてことなることなけん。

廿六日。冠岩てふおもしろきところあるをと、村林なにかしかかねていへれば、いとてみたりよたりいさなひて、見にとてまかる路に見やれば、むかしたれならん、こもりし涌館とて、木々ふかう、河むかひの岨をさしていへは、

露時雨やかてちゝわくたてぬきの糸に紅葉の錦をるらし
おなしう川をへたて、深山シノ権現のおましませる山は、としふれる杉生ひたてり。け
にやあらん、大同二年のむかし、鑄たる神鏡をふかくひめて、神とは祭奉るとなん。を
ちかたなから、

ぬさとれは猶かしこさのますかゝみそことみやまの神のみつ垣

河わたりて、山路をしはし行は、かな山といふところの家は、七八ありといふか廣瀬の
河半過れば、木々のあはひに見へたり。麻苧苧もて、こなたにおひくるあけまきあれ
は、

しるへせよあさかるかたの淀もかなやま河水のはやき渡に

かくて、其ところもへぬれば、小目名てふ山里あり。家居きよけに、山賤等か栖家とも
おもほへす、はつ秋のわさには、手ことにあさ苧かりもて、絲引て、ところせくかけほし
たり。

山里の秋はあさをのいとなみにいとまはあらし長きよるひる
館の腰といふところは、と見へたり。むかしは人のすみたるとか。

今もまたその跡やありていにしへの通ひちいつて行て見なまし

河へたを行て、羽色山に入る麓より、ふりたる木々枝をましへて、いやくらき木の下に
祠あり。いにしへ、此山の宮木を伐いたして、五万五千兩のあたへにかへしといふ。
そのあき人浪速のたれとかや、か、正徳のころ建たるは、此みやしろに、三のたからをつ
くりをさめて、おほやますみを、あかめ奉るとなん。

いやたかく人やあふかん生ひしける楨の葉色のやまの神籬

はや瀬に梁うちて、鮎とるしたつかたをわたりて、三つの山河たきりなかるゝをへて、
山河にさかのほれば、いはたかく、越のうしろ國、加久田のいはや見たらん、ひとしく、
壁のやうに立るに、木々生ひたり。この岩のおかしきとめて、みたりよたり岸邊
の岩にまとゐして、ひわりこひらき、酒のみて、くし作りおかしき句ともいひ出しつる
ほとに、日は石のかけともにかたふけは、いさかへらんと、いふに、かたはらの石にか
いづく。

山かけに李やはある手もふれず岩の冠もかたふけにけり

廿七日。あしたより雨をやみなうふりぬ。

廿八日。龜丸をとふらはんとて、此里の人々と共に、里のしりなるふねにのりてつきぬ。のり鞍の池といふあり、この由阪のうへに、涌館のありしといへは、人のかまへとはしられたり。

むかし誰こやのりくらの池水をかひけんこまのあとそふりゆく

野原のくさことに、おもしろく分て、なにかしのうはそく木村たれぬさわの郡、水澤のうまやにすめりし武田氏喜か子、何かしなとゆくくくえんむすひの石とて願ひある人、小石いたく投上たるを見やりて、

けさう石なひくすかたや女郎花 といへは、

鶯の巢にさるやさかるゝ霧のなか

たけた

わしの聲さそうやはけしあきのかせ

うはそく

わしは何鬼神もすまんみねのきり

きむら

坂くたりて、龜丸かやになれは戸さし捨て人ありけにもなし。あるしは磯につり沖にめかりて、あまのまねひをせりければ、いつこにと、萩の茂りたるかたそはの路にたすみて、

風あらてなひくにしるし萩か枝の露なき方や人の分けん

やをら汐にぬれたる衣なから、あなめつらしや人々のとてこと葉數なくて、はや筆とるわさにわらくつぬきやりくるとなく夜は更たるに、雨いたくふりたれと、たれもたれもこのことのみ、こゝろ入て、音もおほへすはるゝやと火にさしいつれば、軒のした草露ふかう、風に吹なひき、袖かつぬれたりければ、

秋風の拂ふとすれとふり過し雨の蓬のかきの露けさ

隣なきやはいとしつかに、かもめ鳴やとおもへは、山からすの聲して、夜は明ぬらんか。葉月の朔。夜とゝもにまとゐしてひましらむにおとろきて、板戸ひらけは、うなのうへのしらくと、朝ひらけ行を見やりて、

遠近に沖行ふねのほのくと見ゆるとまやの明方の空

この舟とも見つゝ、あれは、雨も晴ぬれば、とくあしたの飯ものして、みな大畑のみなと邊にいき。われはけふもやすらひありて、ひるねの枕とれば、夕くれちかくさめたり。

二日。けふのはれまに、伊胡無久万にいきて、中居のやをとふらはんとて、龜丸かやを

たちて、ほとなう木野陪といふ磯やかたを過て、むつち多かるみちの露分こほして、

露ふかく行袖ぬれぬ旅衣きのふやすきし雨のなごりに

赤河といふをわたるに、きのふけふ身まかりたる、つかの上に水むすひしたるを、

なき人に手向のあかゝはかなくもなかるゝ水のあはれ世のなか

下風呂にいたれば、おほはたなるきくちなにかしありて、けふはこゝにとて、かたらひ
くれたり。沖よりおに火のやうに、波のうへの光あるはいかにととへは、鹽光ともし
ほたまともいふといらふ。

軒近く磯邊の浪のよる光玉とみつるはしほにそありける

三日。空くもりたり。此里の海士、鮑のかつきするに、おのれゝかふとして、つり糸
付て小鯛つる、これを腰つりとて上手へたのならひありなど、とひ入て、あはひかつき、
いきもつきあへず、つりたる魚ともをとりぬ。此あはひかつきこしつりてふことを
杳冠うたにつくる。

あさせなきはるけきみそこひもあらしかつきもあけつつりの世わたり
雨いたくふり出つれば、たつこともえせて湯あみしてけるこしのしら山の遊ぶるは

むさしの國ほりかねの井の邊なとあまたる人にましりかたらふに、夕ちかうなれば、
晴て月の仄にてりて、又かくろへり。

秋風に雲吹はらへ玉くしけふたゝひ三日の月やあふかん

四日。いこくまの磯館に行とて、桑畑の村を過て、杉の尻といふ山かけに、家ひとつあ
るか、高かやのなかに埋れ、やね斗見へたり。

生ひしける野原の薄風ふけは軒端ほのかに見ゆる一家

異國間の浦に至て、中井の家をとへは、あなめつらし、契しことに玉くしけふたゝひの
たいめしつるなとあるしの陳業の云。

かねこともたかはて人の九曲なる路ふみ分てくるそ嬉しき

とかい聞へけるそのなごりの筆なから返し。

こゝろさしあるかた唄のつゝらありさかしきみちをくるもいとはし

五日。夕月のてれるかけくらきせんりの草むらことに、虫のこゝら鳴に、むかし此
浦にゑそ人すみたりし比は、いこむくまといひしといふものかたりありければ、その
名を句ことの上におきて、

いさ行てこの夕月にむし聞むくるゝよりなくまくすかやはら
六日。あるじなりのふ萩と露草とを花かめにさせりけるに、

夕月のかけも宿れと草の名の露もこほさて手折萩かえ

七日。あくるより野分はしたなう吹て、砌の萩ともこほるゝはかりうちしほれたり
けるに、ごゝろうくて、

みやきのゝ萩のにしきやほころひん野分吹しく庭の一むら

夜邊に雨けりてけるに、あはらなるやの軒近く海士の女どもの砧うつかよこさめを、
そむきくしけるを火のかけに見やられて、

雨にこよひそむけても又あま衣袴袖ぬれてあすはほすらん

八日。あしたより雨ふり、夜半は猶うちしきりぬるに、むしのなけは、

秋萩に雨のふる枝やみたるらん心さためぬむしのこゑく

又壁に蚤のありて、夜もすから枕かみに鳴たり。

かへのうちにふみやひめたるふてつ虫かくとしつけの枕にそきく

九日。宵うち過るころこの砌に集く虫のこゑく、いかにあはれとか聞侍らん。さ

らぬたにそのうきよなくをとやのあるしなりのふのかいて見せられける。

小夜すから虫の音さそふ秋風に旅寝の枕猶やうからん

とありける返し。

むしの音にさそふ旅ねのうきこともなくさめてきく人の言の葉

十日。田鍋なりける成章のもとより

しら露のおきぬにかけてしのけたゝうき旅衣日はかさぬとも

かくなんありける返し。

白露のおきぬにぬれて旅衣あたに日數はかさねこそすれ

又過しころ、其ぬしをとふらふとてどみなるたよりにいひやる。

初雁のとふよりはやきたよりかな

といふに、そか和句ありけるは、

ちゝのあはれを萩のうはかせ

村雨ふり過る音に、枕をそはたてゝ、木末草むらのさよ嵐にうちそよくを聞すてかたう。

秋風によそにさそひて萩の葉に晴ても残るむらさめの聲

十一日。あさとく草かりて、やのしりなる小坂より馬曳あまたおりく。

露なからぬれて秣にかりぬらん尾花葛花眞萩草かや

十二日。ひるむら雨すれと月はいとよければ、見に出ありく。女瀧川のかみの木立
くらはきはやせに、火のかけ見へて、人の聲したるは、何し居るにやと近う行は、童の集に
河原にほしたる麻からをまつとして、これを夜とぼしすとて、よるくあゆ、石ふしを
とるその火にこそありけれ。

かけとめてさはしる鮎の行かたにみをさかのほるせゝのともしひ

十三日。しらいはといふあたりまで、岸つたひに川上にゆけは、高すなこの上に鹿の
跡つけたるを今や行たらんなど見つゝいふに、

さをしかの浪のよるく妻こひに通ひなれにしあとをこそ見れ

十四日。ひる仄に日てりて、夕邊の空くらく、月はつゆ見ゆへうもあらねはおもひわ
ひて、

雲の中にかげやかたふくはるゝまを待宵更る月のつれなさ

十五日。あしたより雨ふり、風をやみなうたくれて猶はやちのやうに風とくふきあ

めいやふりにふりてければ、ほるななかめて、

心あてに月やいつことおもひやる望のこよひのあめ風の空

ありにありて月のこよひの雨と風人の心のいかにはるへき

名におふ空もむなしくはれまたに見なくに鶏は鳴たり。

十六日。山の端引はなれさしのほるにちりはかりこゝろにかゝる雲もなく、てりそ
ふ月の山くちしられたる、やま川の水に、かけのながるゝさまなへてならず、十五は
こよひかまとふ。

わすれては月のこよひと水かゝみ波にいさよふ影はうつせと

十七日。海の邊に出て、月のいつるをまつに、くもりなく浪の上に、みちくたるじほ
せの光ことに見やりて、

おくの海外かはま風吹からに雲たに波のたちまちの月

十八日。あくるより雨ふるに、こよひの月見んことこそかたからめと、軒はのやまに
かゝりたる雲のふかきをひとりなかめてあるに、ちかとなりのやに、衣うつ音たへす
聞へて、

あま衣うちやわふらん八重雲の空にみまの月はいかにと
ゆくりもなう山かせ吹来て、雨はゆふへに晴たれば、月きよくさし出て、おかしとやお
もふ女とも居ならひて、碓うつあり。

軒近く衣袴也乙女子かならひみまの月も見はやと

十九日。夜こもりの月露くもりなう、いそやまのこすゑのなかよりさし出たるおかしさ。

風ふけは葉分にもれてくれ竹のふしまち月の影の夜ふかさ

二十日。更行空を、初雁の遠きや行らんごゑの仄にいつこならん、めつらしく猶聞はやとまつに、月は出たり。

かそふれはけふの日數もはつかりの月待渡る聲をこそきけ

廿三日。けふしまて、二三日もらしぬ。雁のあまた行をあふきて、だか玉つさをとすして、

初雁に心そたくふ行空をふる里人や見てしのふらん
廿四日。ひるの空かきくれて、鳴神とゝるきわたり、しはしのほとに、雨ふりしきりて、

遠方やはるゝ蝦夷の鳥やまを見わたして、海の上に虹の引たり。

おくの海ちさとの末も名残なく、村雨渡る虹のかけはし

廿五日。夕近う雨ふりはやち吹て空はれたり。

あり明の月もやとさて萩か枝の露吹こほす庭のあさかせ

三十日。雁のひとつら行に、田鶴のあまたおなし雲路をたとるか、雁はとく過て、鶴はことかたの空にいにき。

あふけたゝかしこき御世は行雁に道をゆつるのむれ渡る空

なかつきの朔のあした。空うちくもりひるつかた、雨ひとむら過るをりしも、雁のこゑくに行か、いとあはれなれば、

村雨につはさや重き高からすぬれこそ渡れ雁のひとつら

二日。蕎麥かりもて、こゝにいふはせてふものにとりかけて、やまくろの畠にほしたりけるか、木々のあはひより見やられて、

時もはや色つく木々のはせゆひてすゝめむれ行そはのかけみち

三日。よはり行虫の聲、ほのかに聞へて、いとゝものおもふ夕なから、板戸もさゝてな

かめたり。

袖の露おくともしらし此くれのうきをはよそに三日の月かけ

四日。近き田面にやあらん、鳴子をひきもたゆまず、さと風にいさなはれて、聞へけるををりくなれば、

小山田に小鳥やむれん吹過る風になるこの聲もをやまぬ

ある庵の佛に、老たる女のぬかつきてけるに、老法師のとより入来て、うちものかたらふかたはらに、脛纏茸をさるとして、したみこの中に、さはにもりたるを、法師しはしとにかはやいきつるまに、たかもて来るならん、女たれてもけるこそよけれ、にいし新ををいふをうちにせいといふ多をにてまわれとてさりぬ。法師ひとりこちて、いつも葉月の比萩のした葉のきはむとき、はきたけは生ふるものとしてあかたなにすえてふねうちたりける。此こと葉ともをたはれうたの折句とせり。

はつき来てはきの下葉のきはむときたか家つとにけふそうれしき

五日。あさ日うらくと、春のこゝちおほゆるに、けにやあらん、軒はの山に鶯の鳴たるは、いかにひか耳かときけはいよ、鳴ぬ。秋もかゝるためしやはある。

風さそふ山路の菊を梅か香にまかへてやなく谷のうくひす

神無月くる春やまつよきためしきく咲やとのうくひすの聲

みちはらひきよめすなうちまいてけるは、去年の冬かんな月の九日、びんかしのゑみしの國、禰毛呂といふ崎に、於路志夜の人四十あまりしてうしのかはふねこき来て、天明のころ、風にはなたれたるいせの國、白子の浦人、みたりを、こたひ送り來けりとて、この年の水無月廿日、ふく山のみなと入して、ふん月の朔の日、越呂詩也をさしてかへりにき。此ことにたつさはりて、公の仰をうけて、石川忠房のうし、村上義禮のうし、ずんさあまたして、むさしの國へ、かへり給ふとて、ふん月の廿八日、みうまやの浦に、渡りおはし、津刈のうらくをへて、此なんふ此北の郡ものこりなう、海邊山里を見めぐり、おくのうらくに、旅衣日數を重ね給ひて、けふなんこのいこんくまにつき給ふとて、そのもふけして、あやしのあさり、あひき、いをつりしほ木こりつむ翁かやとも、問せはきとまやかたも、とふのすかこも清らかにしき、まとをにあめる、あしのすたれを軒ことにかけて、すくろをいふすたれまとかきねにさけて、まつほとなう、大間の浦にひるの中宿して、申斗に入給へは、浦人らあしを空にいそきありきて、御酒奉らはやみさか

なには、さたおかこそなけれ、あはひかせてふものは、此磯ことにあれはとて、海士人らの家々にすゝめ、すゝきたなこ、かつほはまさなこによけんとして、しゝものせり。あはれ 君、民をなつるのおほん心、さすかに淺からぬあまり、かゝる臣たちも、その光をうつして、ふりいとかるらかにことそきて、よそひ渡給へはとて、見聞く人々あなかしこの御恵と、なみたおとして、一夜の宿奉らんこと、ましくしけふたゝひあるかはとよろこひあへり。ある人のいふ九艘泊といふ浦に、佐野といふゑぞの末の子、身まかりてみとせになる、そかめ、初子とてよく家をもり老たるをおもふ女あるに、ふたりの君より、錢一つらたはひて、人の心のみちはかはら甘のものとはいへとまことある心のみちにかはりなけれは、しとなん忠房のうしなかめて、あはれかり給ひしとつたへ聞へわたれば、

なさけある君の恵の露ふかくおくの浦人袖やぬらさん

又こと浦につきて、神籬にまうて、左井みなとゝいふことを、かしらにおきて、いつくさのうたを手向給ふたるといへるは、

さても世のちりにくもらぬ神心あまねくてらせ秋の夜の月
いはしみつこゝにうつして淺からぬ神のみかけを願む里の子

みなとぬににこらぬかけをうつしてや行かふふねをまもる神垣

なみ風もしつかなる世をいのるとそ神もちかひやかけしまめ繩

ときしありて此みつ垣を拜むそよぬさとりあへぬ旅路なからも

おなしう、義禮の君。

さなからにかしこき國のならひそとこゝにやはたのみや居うつして

六日。ことなう夜邊のことのたち立給ひしそかしとよろこひをとなへあるくにましりて二十あまりの女かしらをだのこひにつゝみ、はきにとゝかぬきたなけなる衣きたるかつゝましけに行を見て、あの女は、ハ、マ、いてはの國の男に、いさなはれ來て、おほまのうまきやらんにて、こと男して、見あらはされて、かのいてはの男、此女をきりごろしてんとすれと身のまち人なれば、だちかたなもなう、人にかりしかと、人きるかたなとてかす人もゆめなれば、海にはめてんといそへたにつれ行、女の長きかみを手にからまきて、ひころしろひ行を人の見て、にくき女なから命なとりそと、人あまたしていへは、浪の中にふせて、石と石とにかみをひたうち、打ちりはなち、衣なともはきとちれ二布ひとつになりて、命は助ぬ朔の日のことゝいふに戯うた。

としははたちみそか男もきのふすきつゝみたち別れ二日三日四日

七日。古野といふところをさして、雁のあまた鳴來るを見やりて、雨もふれゝは、

なきて行雁のなみたの雨とけふふる野の梢色付やせん

八日。田つらの稗かりもて、またふりをまとりとて、うち叩く女ともかのしゝのよる

くくらはひて、いづもくからのみとることよ、あなうたてのしゝなくはといふを聞

てまとりとひえとのふたつを、

やま。のりの尾上たちわひ夜とともに雄鹿つまこひえこそねられね

九日。たかきにのほらんのためしといひて、けふをはつのせくといへるは、三九日の

はしめなれはしかいふ朝とく菊折るを見て、

けふといへとまた咲やらぬ菊か枝を露の盛にをらは折てん、

十日。飯形の御前に、貝吹つゝみうつうはそく、やかて御湯を奉る御籬の紅葉、ぬさと

迷ふはかり一もと染たるを、

時雨ふるしるしを三の社とてそむる梶のあけの玉かき
この夜月のおもしろきにいと近う鹿の開へたりしかは、

月かけに鹿も樂しとおくふかく出て太山をよそに鳴らし

十三日。この二三日はしるさす。けふは名におふ空なからあしたより村雨をりを

りしきりて、そのうしとおもひのほかに心にかゝる雲も吹はれておかしければ、な

月十三夜の月てふことを一くさのかしらにおきて、十くさあまり三くさのうたを、こ

のみちのおくの近きあたりの名ところをあつめてなかめたり。

那 なみ越る光もよるとわかぬまで月すむ秋もすゑのまつ山

苛 かくはかりうちもねられすおきのみてみやこ島人月やめつらん

都 つらかりし雲はさそひて晴渡る月に吹なりそとかはまかせ

積 きしなみのよるともしらて舟人の月にうかれてうたふやすかた

廻 のたの名の川せの玉と見る月の光くもらぬ水の心も

志 しのふ山忍ひて通ふ小雄鹿のあとさへ見ゆる長月の月

烏 うき秋のうきもわすれてむかひみんあたゝら眞弓月にひかれて

左 さをなくるとまなの身もこよひとて月や見るらんけふの里の子

武 むれて身をはらひやませし月かけの霜とおく野の牧のあら駒

夜 やきかねのこかねの花も秋夜の月にはしろくみちのくの山
 能 のき近くみふにねなまししきたへの枕に月のとふの菅こも
 津 月めて、こさをはふかし夜とともにちさとくもらぬ夷の遠しま
 幾 きくか枝の花とも見へて浪にゆふ間籬か島の長月のかけ
 なか月の十三夜といふことを冠と杳とにおきて、

しら菊のうつろふを見きさえたかつむかふは月かやへに咲はな
 宵うち過るころゆくりなう鹿の近やまに鳴たるを磯邊にや河邊にやなといひて、夜
 毎に鳴しかとわきて、こよひはこゝろありけにやおもふと人のいふにおかしく後の
 今夜鳴鹿といへることをもとすゑにおきて、五くさのなかめせり。

野も山もくまなき月のかけめて、秋田本か 鳴や雄鹿の聲のいくたひ
 ちかき嶺遠き尾上を棹鹿の月に鳴音のたくひあらしな
 のかれすむみやまならねと月になく鹿を浦なみよるくそきく
 こゝに聞へかしこに鳴て長月の月には鹿の方もさためし
 よしとて月にうかる、棹鹿の友よふ聲は嶺か尾上か

あるし業陳なか月の月を好むてふことを杳冠にして、

なみやたつ河風寒きつれなさを君しいとへよ後の月見む
 かくなんありける。返しとはあらねと、

なかめしつかゝる樂しき月影を君とは幾夜のきにあふかむ
 十四日。あした風いやたちてくもりぬ。おほまの浦におましまし給ふ百々いなり
 といふかんやしろ天妃の祠の邊に建るに、こたひみくらみ給りしよしを聞て、この春
 のころほひまうて奉りしことあれば、かの神垣にけふなんよんて奉るうた。天間浦あり
いなるのり、天妃のほくら、奥戸のみなとのわかみや、觀世音の堂、この二の浦のうま
きのかたとあり又圖あり、牧もりかやひこみのかた、みちのく、の牧、十二野といへと
九牧あり、おくのまき野とりのこまのかた
なつけともすれは又ある君かなとあり。

飯形山うつす末葉の末までもさかふしるしの杉やさかへん

十五日。この日、桑畑の浦のかんわさにまうてんとて、こゝをいなんとして、いこんくま
 をたつに、あるしもともにかとの澤けたの澤を過るに、古寺のあとあり。いこんくま
 の榮へしむかしはこゝに浦人夷人も極家したるをあなたにうつしたる東傳庵のあ
 と也といふ。蛇走ヘビウシといふ磯をゆけば、日陰山みちにかゝりて、空うちくもりてゆくり

なうふり出たり。

見るかうちに秋のひかけの山のはに曇れはやかて過るむら雨
杉の尻といふやひとつある海へたの山より落來る瀧やま風に吹やられて、しろき糸
を紅葉の枝ことに引かけたらんがことし。

是も又時雨に染て柵葉にうつろひかゝるたきのしらいと

かくてその處になれは、十日の日いなりの祠に、みゆ奉りたるうばそくいのかひふ
き、ずゝふりて、はんや經よむ。此ほくらのうちには、のほきりのことには、のうちあ
はれたる、つるきたちふたふり、やふれたるかなつゝみに、三郎五郎といふ名、した
るを納めたり。つちよりやほりいたしけん、そのものかたりまちゝにいふ。此社
をつねにもり奉る人もかん司のうはそくもあらねと、耕し木こりのみちなればだれ
となうはらひきよめ奉るは、かゝる五六あるやのあまにこそあなりけれとかたるを
聞つゝ、くははたのやはたのみやといふことを、沓冠におきて、

くる人はわか手にあしたはらふ身のたのみは深みやまかけのみや
日もくれぬればこゝに宿りしてけり、出るより月の色山の紅葉よりも朱になかそら

高くのほりても猶赤きは過し十三日の辰斗南の方八重霧のこめたらんやうに、山の
いたゝきも見へす、たくうへうもあらぬ香の、やまおろしに吹れ來るは、いつこのやけ
山のけふりならん。きのふのことに空をふたけは、月はかくそぬるのもみちたるや
うに、色の見ゆるを、船人などは、こはかしくてふものとひたにいへと、山賤らは、ひたふ
るに、心もおちぬす、こゝろなきもかゝる月なればこそあふきたれ。

染渡す月の桂の柵葉のくまなき色や四方に見ゆらん

鹿の鳴やとおほへて、夢はさめたり。又もきかまくおもへと、浦なみの高くひゝきて
かまひすしく。

磯の波うつゝか夢かわきやらて一夜見やまの小雄鹿の聲

十六日。業陳けふはまことの別なめりとして、

きのふまで月にまとぬし人にけふ別ては又いつか逢見ん
となんありける返し、

圓居せし月のためしに旅衣又めぐり來て友に見なまし

やをらなりのふに別て、やをいつるに、あるしかゝるいふせきすみかのいとひもさふ

らはすは、いつも通りあらは宿りしてといふに、

おなしくははた月のころ棹鹿の鳴音聞にし宿にとひこん

釜の前ふた川おほゆるみこゆるみくろさきつぶたさくまさいとうやけ山なかはましをりさきなど過るにあないの童、沖邊の釣舟を見ていこくまのたい杉の尻の鯛いちのなかれのすゝきくははたのはくとくゆるみのたなご黒崎のあぶらこつぶたのびりくそさくまのなめとなと沖なる魚の名所かそふを聞て、

鱸つり鯛つる翁見つゝ、行人染る紅葉の木々のいろくす

細く曲りたるみちゆくにあかはきまきの緒のとけて、かたはうの萩のした枝斗咲残りたるに引かけたるを(マ)じかなる人のあなこゝろなと見とかめたるを、

つとに折る花はちるとも種しあらはいさはきまきてこん秋も見む

かくて下風呂のいて湯のやかたにひるつかたつきてじりたるあるしのもとになか宿すれば風のこゝちにかしらやめは、この夜はこゝにをりぬ。夕くれて月はきのふよりもあけてりてよともにくらし。○圖ありしものぬに毒湯あるかたとあり十七日、猶おなし宿に在て湯ふねのうへなる、自遊庵のとなり湯調のたてたる庵に

人は、析の實をつなきて大なるすゝとして、佛の前にかけて、なもあみた佛をとなへ奉るを見つゝ、

後の世をたすけ玉へとちたひとなへもゝたひ拜むぬかのこゑ

十八日。新湯とて山かけにあるを見にいたりて、夕日かけ紅葉におちておかしとおもふに、鹿の鳴しことあり。いまや鳴なんしはし休らひてと人のいへは、

小雄鹿の鳴音やいつら吹さそふ風も身にしむゆふくれのそら

この夜あま人ら集ひ來て、こよひは月のいと清ら也、此ころのくもりいかなることにかあらん、過し十二日の日沖につりしありくに、海のいとくらく蜘蛛の糸舟はたにかゝると見しうちに、いくすちも風にふかれゝ行たり。いかゝととへは見し人あまたとこたへき。いかなれるものにかあらん。

十九日。けふはなかのせくなりとて、酒すゝめんとあるしものせり。此日黒森かたけのかんわさあるに、人のむれてまうつれば、おなしうわれものぼりてんと、こゝろをたちて例の瀧のなかみちになれば、風いや吹にふいて、行人の衣ぬれたり。○圖ありうまも人も行かへせりける世中にとありとあり。「瀧の中を

おり立てむすはぬ水も行かひの袂にかゝる瀧のしらいと

赤河をへて、木の陪の村中に幡おしたて、ゆく路のかたはらに、けんへとて、はくやうするなるを、はるくとのほれは、雨のけしきはかりふるやとおもふに、あられたはしり、神なりひかり、まなこにさへきり、みなとくたりはてんとおそりまよひて、ふしまろひたり。時の間にあられふり来て、ぢしほの紅葉のこりなうみなちりうせなんと見つゝのほれは、いよゝあられふりはきさし入て雪のことく細き通ひちを埋みはて、さらにまうてのほる人もなく、ふりあふきて、

森の名のくろ雲きほひあられふりみねにとゝろきなる神の聲

中山の此堂に、観世音をすへて、これより女の登らんことをとゝめり。猶おく山のおましにまうてんと、のほるに、やをら晴たりしかは遠近のしけ山いやかさなりて、としふる眞木の生ひたてるは、ひとと伐ても空かきくもりてあやしのしるしあれば、かくちとせふる中に、紅葉染わたしたるに、夕日てりて、うらうらのこりなう見やられたるおかしさ、たくふかたなし。この神はなにかむかしの比すきやうさ、下風呂の磯やかたにふしたる夜、あか川の磯の山おくにしちようこんけんといふ神おましませりと

のみさがあれば、分のほり、歸りて犬畑に至りて、其あたりもるうはそく三光院のあさりにとへは、こたへに露しりさふらは、ぬことにこそ侍れ、にちようの文字、日陽にやあらん、日曜にや侍らん。むかしにやさるためしなけれは、かしこきみさかのことく、此時由、日陽の神とあかめしをこのころは日照権現と申奉るは、あまてらす大神と犬日如来を石にてすへ奉れば、しかいふにや。ぬかつき奉る梁の札には、延寶のむかし大した大安寺にすめりし、一東禪師とかやか、閉の郡宮古島邊のくろ森か嶽をこゝにうつしたまへは、山をもゝとせこなたしかなつたり。むかしは赤川山とのみいひき。さるゆへ赤川の水上の瀧の中の不動尊を、奥の院といへり。山賤なとまれにこゝに分のほれは、瀧にとひ入て、此いはやを拜み奉るといふ。みね谷のこりなう染なしたるをしはしとて見つゝ居れば、御前のうはそくまで貝吹とよみくたりはつれば、すへなう一枝折て休らふに、げふの祭りしをへたる具ともとりもちたる男等は、やいきね、又雨霰ふりこんといさなふにまかせて、

折とるもまた初しほの薄梶ふらは時雨にます色や見ん

やかてくたりえて、犬澤のひとつ庵にとふらひ、あるし龜磨とかたらひて、ふしたる夜

半に鶴の聲——浪にうちまきれて行を、

つねかてにいそやは夢も浪枕よる鳴く鶴の聲をこそきけ

二十日。きのふのことにひふりてけるに、雁の一行なみちはる——と行か仄に見け
ちたるはいつこにと、

誰かかたをさしてあられの玉つさをかりのつはさにかけて行らん

廿一日。けふはおのとりなりとて野に在るとあるあら駒を、ごゝら人かりめぐり牧
中に作たる追込てふさゝやかものうちのうちに、おく野の駒残なくおひこめて、さいと
りといふ大綱をくひにひきかけて、とりえては盛岡のいなきに引とて近きむらゝ
より、二百あまりの人行に、はまみちもさりあへす、夜べよりあしたにむれ行ぬ。千千
里の磯見にいきてんと、なきたるまに見やり、ちゝりはまてふことを、

海士のこく舟とも見へてもみちちりはま風さそふ浦の山かけ

こは、頼義の君の御足かた硯のかた、此いはやどは、尻屋の崎なる鬼蝦夷人こもりたる
也を征矢して射たまひしところこそなと人のいへり。春見しよりはうなのけし
きことかはりて、きし遊の浪なたやかなら文山にひきき谷にこたふ音すままし、うへ

冬をまつ千鳥のあさるこゑ——こゝかしこに聞へたり。こゝあり「ち」りのはまは名
かしはこゝを七里かはまといひしとなく、
尻谷をしかいふはあたはしとかとあり。

冬近みはま風あれて鳴ちとり聲もちゝりの浦つたひして

廿二日。風いやふきにふけは、ごよひはかりはとて、とゝめられていねたる夜半に、ま
かちとる音にやと聞は鶴の行にこそ、

よるのつるなれもわすれす子を思ふ親ます國のいと、戀しき

此なかめにひとりなみたおちて、やゝいねつくやとおもへはふるさとかへると見
て、おとろきてさめたり。

おもひやる袖に時雨はふる里のはゝその梢こゝのもみち葉

廿三日。この一庵をいてたつにのそみてあるし龜麿かゝる翁の身はなこりをしみ
ても、猶つきせしなとありて、

玉くしけふたゝひとひてみちのくのけふの細布立別るとも

とそよみける、返し。

又いつと契れとこゝろ細布のたち別行けふそものうき

夏のころ、むすひたゝすみし清水のもともずさましく過る。これやむかし、薰陸香ほりいたしたるほとりより、わき出る瀧なれば、くんろく水といふへけれと、人ことにないひたかへて、もはらくりのこ水といへり。

磯山のあるしにつれておちくりのこすゑやいつこつとにひろはん

ひろははや太山のおくをおちくりのこの水さそひ流來ぬらし

おほまおこつへの牧より、六十あまりも、野とりの馬曳出で、村々にたちかはりて、こゝらの人の、田名陪のあかたまでひきく行か、あら駒の力なれば、はゞだうま、ふたとせのわか駒にも、みな大つなを附て、なゝたりやたりも、此つな手にすかりて、はまちをひくにこしかたやおもふならん、引かへされて、しさりく駒にひきやられて、つなたゆると見るに、赤石山の山みちにとりはなちたれば、すみしうまきのかたをさしてはせくるは、けにことはりにこそと、

つまをおもひ子にひかれてやすむ方に心おくのゝ、牧のあら駒

二枚橋てふ山かけに、ほのかに鹿の聲せしやうにおほへて、
そことなくつまこひ迷ひ小雛鹿やいつれの山のかひよとそなく

みなとへの川岸の紅葉いとよく染しと見つゝ舟にのりて、

めつらしな綱引ふねのくりかへしみきはの紅葉時雨ふる空

ほとなう晴て、おほはたに來て、田中の家につく。

廿四日。うし曳あけまき、あやまちて、折かけかきのやふれより、かくち地園とて人のやのしりにうしを入たるを、やのあるしとに出て、このわらし童をわらしといへりかきねくゑていけとて高こゑにのゝしりぬ。このこと、小山田のいな葉をこむるくゑ垣の人うらめしき夕くれの空といふうたのこゝろにかなひて、かれらかこゝろありて、わさとせしやうにおかし。

廿五日。ある寺にいたれば、これめせとて、米丸雪てふものをおゝきに盛てさしいたして、聲さむけにやかてみほとにあかふるすゝの聲したるにおもひつゝけたり。

よしの山ねこしや分てあしたよりらんさんめくるれいのこゑく

又青く黄なる硯のふたに梨子栗榛をいたして、この名ともみなかくして、いまひとくさといへれば、

くり返ししくれてあをきいろもなしはしはみねより染出にけり

此あたりのそのふのかけにはてをゆひてそかくへかりけりといふものをふせやのやうにつくれは雨露にもぬれず鳥もあさらすいとよけん。粟かくるを、あははせといふ、このかたはらにもゑんしかほに、わかき女のたてるを、いさなふ人の見て、このあははせといふこともありて、あなる女のふりも歌につくりてといへは、

飛鳥川なかれて末もあははせをふちとたのまん君とわか中

と女にかはりて、なかめたるをといへは、しりなる人手をうちてわらふ。

廿六日。いこんくまの浦なる業陳のやよりかへさのころやけ山といふ麓にて、竹葉
菫胡といふくすり根こしておくりしかは、

植しおかは宿には根さへこの草の花咲よりも人をこそまて
となん、文にこめておくれたる返し。

うふるよりこと葉の花のまつ咲て根さへこの草茂るをや見ん

又岩菊てふもの、野山のみちに咲みちたるを、ひきやりてければ、この草を庭のくれ
芝てふものある邊にうへたるとて、ふたゝひなりのふのいはく、

ちよこめて岩てふ菊をくれ芝にうへてこん秋君に見せはや

とあるにも返し、

秋もはや一日二日とくれしはにうへなは菊をこん秋も見ん

君か宿にうへなはちよもうこきなき岩てふ菊の秋やとはなん

廿七日。時雨ふりてあしたいとさむかりければ、

十月またてしくるゝみちのくのそとか濱風いや寒くして

廿八日。山もとちかくなかめやりて、

梔葉のこそめ口なしこきませて山は錦のいろくに見ゆ

廿九日。夜半はかりいたく冴へて、あしたの霜ふれるは、雪にやあらんと、菊の花その
におきまとはせる色の身にしむはかりおかしうすして、

おき出て砌の霜にふることのためしをきくの花そまとへる

三十日。秋のなこりさすかにおしまれて、ちりのこりたる紅葉見てんと、こゝかしこ
のやまゝ、遠う近う見つゝ行に、何の木ならん、山田のくろに生ひたてるか、いとよく
もみちたるに、からすの三四ふみしたき居たるを、ねたく見やりたゝすみて、

ちらすなよ紅葉のにしきあすも見んつれなくたちし秋のかたみに

太田孝太郎校訂

寛政五年の冬かな月みちのおく北の海邊なる大はたをたち田名部のあかたをさ
けて尾駁のまきを経て壺邑石碑邑をわけんとて至れとも雪ふかくおふちのうまき
は遠かたにのみ見やりてふたゝひ柁寧夫に歸來てこのとしくれ行まてくにふりあ
かたののりを記し名は鳩布智廻万枳とせり。

おぶちのよき

かなな月一日。はま風あらく磯山の梢なこりなう、よろつ木の葉吹ちらし、空うちしくるめりと見るかうちにふり出たり。

冬はけふ木々の榊葉ふく風に時雨いろある遠近のやま

ときの間、空のけしきも山のけしきも、きのふにかはりてそていと寒く、あられこきませて木葉ふれは、

あすよりは初雪またん又たくひあられを冬のしるへとはして

二日。やのしりなる杜の庚申の堂あるに、相しりたる人さはに居て、はいかいのつらね歌して、夜は更にふけ行ころ、われにもおなしさまにあそひてと人のいへと、えやは其みちたとらんとおほつかなくも、

衛聞てねぬ夜まつらん神のむろ

三日の夕くれつかた。鶴の鳴行をあふき見れば、月ほそう空かきくれて、さとふりす

くる音すさまじし。

月もいま雲のいつこに聲はして時雨そわたるたつのむら鳥

四日。蟻光山の夜半のまとゐに、むさしの國のすきやう者、珠あみた佛の云、近き日松前の嶋わたりせまくおもへは、この夜あけなはこと浦にうつりてふな人などにも此ことものしてんなど聞へたり。われも日あらずみやこしまへ、沖の井ねも見まほしく野田の千鳥もきかまくほりして去年よりかたらひなれし此大畠の浦田鍋今田名部と云へのあかたをたゞばやとおもふ心あれは、珠あみた佛にも、此としの春おほまのうらわにて、はしめてまみへし日より花にさそひ郭公にいさなはれ月のむしろに更るをおしみて、おなし草枕にふしなつさひたる友の別れ、しかすかにつらさいはんかたなきをりしも、山かせに時雨くれは、猶おもひまさりて、

あすは又このもかのもにむら時雨ふり別行袖や沾らさん

となかめたるを、珠阿上人返し。

五日。袖の時雨ふりわかるとも河水になかれて末のあふせをそまつ
珠阿上人けふなん下風呂の浦までといひて、浦心うはそくのやをたち行とて、

入つてに、雨に袖吹分る旅路かなといふ句贈られたれば、梶の落葉人のことの葉と和句せり。

六日。この夜戌のくたち斗晝の空よりもあかく、おほきさくゑまりのこときひかりもの、又ひかさのことく見し人もありて、きたよりにしをさしてとふ、その音なる神(の)ことし、世にいふ天狗てふ星のおち行しにやあらん。沖にいさりするあまなとは、舵をたへてにけかへりしとさはきたちみなどに出てあとのみあふきぬ。

七日。夜半より冴へて、あられ雪をあさむく斗いたくふり。

八日。あくるあした、まことの雪めつらしくみちうつむまてつもりたり。

めつらしな秋に時雨てみちのくはきのふのあられけふの初雪

九日。あしたより時雨してゆふへてるやとおもふ月のしたつかた雲一むら行には、たふりながら月はいと清く冴へたり。

月の前にしくるゝ雲を吹さそふかた山おろしこゝろありけに

十日。蟻光山のみてらのまとゐに、夜時雨。

うちもねす袖こそぬらせ小夜しくれ夢さへかるゝ草の枕に

行路叢といふことを、

花とちり玉とこほれて行かひの袖にあられのふるのなかみち
橋邊叢、

とたへなくふれるあられの白玉のおたへの橋に風わたるなり

十一日。此里のめつた町松前の島にもあれはむかし目出度町といひしとあれと此名
なけれは此おほはたにもといふやはつれに、石橋かけたる月照山心光寺とてなもあ
今は南町とそいひける。とみたふちとなふみてらに、三野の國おほかきより、すめる青柳といふ老上人みつわく
みたる身にあつくと紙衣きてねんすを耳にかけて、火桶のもとにかうひねりして
おはしけるにまみへうちものかたらふほとに雨ふり出たりしかは、

今こゝに袖もぬらさて雨しのくみの、中山きたるかひとて

この上人たゝねんふちをむねとかたらふひまゝにもひたすらとなへたまへは、月
照心光といふことよりおもひつゝけたり。

後の世のやみやてらさん月おもふ心の光さそなしられて
十二日。なもあみたのをこなひ、ほくゑのこなひにまうつるこゝらの人空には

ねところに行からすおほくむれたり。

夕風につはさふかれてむらからすねくらもとむる聲さむけ也

十三日。例のなかてらにて、

夜木枯を、

夜とともに霜をやはらふ木々はみなちりてさそはぬ庭のこからし

十四日。雪のいたくふるに、とに出ありけは、いや高き垣根の松に松菟のきあさる。

秋もかく聞や野はらも近きやの雪のふるえの松むしの聲

十五日。蟻光山にいたりて、なもあみたといふことを折句うたに、

なかき世をもらさぬちかひあなたふとみち引たまへとたのむ人々

十六日。ある夜のまとぬに、北村傳七といふもの、過しころ久南志理のゑみしらあら
ぬすちにいかりの、しりたるその島をはしめ、禰毛呂にわたりて、七十人あまりの人
を毒氣の箭ほこしてころしたるに、われのみはゑみしとしころめくまれたるむくひ
おもふにや、いのちまたくせよとて舟してはるくと送りたり。またとしはいそち
に近きまでしくまにも三たひかけられて、身はいくはくもやふられ、谷そこに夜をあ
かしふねに在ては楫折れふねくたけてやふれたるさゝやかの板にのりて、しほにい

さなはれて三四日海にたゞよひ、いろくすにあし手くはれて、からきいのちたすかれは、世中これにたくふおそろしきめはあらしかし。これや神ほとけのたすけ給ふならんとてさりぬ此人にかはりて、

のかれこし蝦夷の海山あさからぬ神の恵そ身にしられぬる

夜邊いつこに在てたれとなうかたらひて、折とりてかさしやすらんみちのくの□□

□□花のしら河のせきとなかめたと見て、夢おとろきぬ。このわすれたりしところを、

折とりてかさしやすらんみちのくの盛よ花のしら河の關

とおもへとさせるふしもあらしかし。

十七日。あしたよりいて立はやとよそひすれば時のまに雨頻りて、うまさくりのみち行ことあたはしわきて寒さもしのきかたかるへしとて情ある言葉してあるしのとめければ、

旅衣たゞは袂もぬれなましこよひもおなし本^〇秋田宿にしきねん
此夜なか寺のつとひに匂ありてとひたふるに人のいへは、

圓居して時雨をよそに聞夜かな

十八日。きのふまで冴へてしみ残たる雪のよへの雨にふりけたれてとけみちたるちまたのぬかりなとに、うす氷ところ／＼にゐて、軒端ことに、たるひかけわたしたるは、ことにいや寒く見やり、埋火のもとに在て、

ふりくれし軒の糸水よるのまにむすふつら／＼のとけぬ寒けさ

此夜うまのはなむけしてたかへなどのまさなこゝに、とりの子もちひといふものにとりそへて、いけた包幸。

さけすかぬ人はうさきのたくひにてもち待かねて消へんとやする

といへるを聞て、こたへにおなしうたはれて、

さけすける人はしらしなあなうまやうさきのもちにきゆるおもひを

十九日。あしたより雨ふれは、けふのはれまもあらはとためらふに、いけだ包幸てふ人の、

けふははやたちわかる日となりにけり時雨よしばしふらすともあらん

とありける返し。

はるゝともぬれてゆかましことの葉の情の時雨かゝるたもとは
高喜の翁。

なからへて又もとはなん老の身のかしらの雪のとしつもるとも
かへし。

又や逢んちとせをかけて松か枝を友にかしらの雪つもるとも
みなとや邦政。

旅衣たち別れ行あしたよりかはらて來ます日をやまたなん
かへし。

たひ衣袖のあさしもしいかはかりおくゆかしくもたちかへりこん
蟻光山寶國寺にすみ給ふける深あみた佛、

神無月時雨て越へん旅衣なみたたちかへせすゑの松やま
といふなかめして給ひける返し。

末の松山路しくれてたひ衣こへなて波のたちかへりこん
むらはやしおのたくみと名に聞へたる、時明。

大空の雲をつはさに行雁の聲をふたゝひこゝに聞なん
返し。

雲井路をかへるつはさも春は又衣かりかね立歸りこん
かくてこゝを出たゝはやとおもふに雨又ふりいつれは家のぬしこよひひと夜はか
りはといひ捨て、とに出行ければなこりの言葉たにあらぬふしをいひてそかめのせ
ちにとゝめてあるしのかへりくまてとまちて暮たり。

二十日。けふも日よからねはえいてたゝす人々とかたらふ。

廿一日。田中のやをうまにて出たつ野畔ノハのはままもさけて、正津川近う右の山かけ
に外山てふ山里のほのかにはさまよりしくれて見へたり。

冬來てはいや寒からんすむ人のたか袖山のかひにしくれて

樺山にうしあまた曳捨たるに、冬來てははむものもなき牛の子のやせ行里の頃のさ
ひしさと慈鎮和尚の詠めたまひしふることをおもひ出て、

かれ残る芝生も雪のふりしかはやまのかひなくうしや曳らん

女館の坂みちに、法呂權現といふさゝやかかのほくらあり。此神とこゝろゝにあかめ

奉はある人の云これなん秀衡のうしのみたまをあかめ奉るあら人神にてわたり給へともはらしれる人もなしと。

引わたす杜のしめ繩くちなから梢さひしくかゝるみやしろ

田名部のけふの市路に馬のり入て新相か旅館につきたり。

廿三日。きのふけふ時雨いたくふりてくれたる成章のやをきのふとひしかとたかひてあはさなるを恨て贈ける文のおくに、

ふる雨もいとほすもとへあひともに通ふ心をみの笠にして

となんありける歌の返し。

ふる雨もいとほすとはん人をけふみの笠やとりしてかたらなん

廿四日。うなひのあつまりて「ちゑからく」と聲々によはふに、鶉のあまた來ればよねおこしこめなけてはましむ。

うなひ子かよはふになれてむらからすむれて梢をよそに鳴也

廿五日。ある人のいふ七日の日海あれて、秋味誰かい引かへりつみたるこゝらの舟はな

廿七日。山本世獻の家にて、雨のつれくに楚泊てふめしぬひとのよめる。

おもふとち雪まぢくらす冬日に雨のふるこそつれなかりけれ
といふを聞ておなしうおもひつゝけたり。

まちわひて圓居に雪と見る雲のいかにつれなく雨となるらん

廿八日。松前よりふみ來りけるは、西なる蝦夷のくにスツロツといふ島こきさけて、ふたもゝちのふね浪にいさなはれ風にはなたれて、あるはべんけいてふ島なかに船のみとゝまり、あるはちりのやうにくたかれ、人は三百あまりもうせたりとかいたり。そのふなぬしものりつるあまたの人も、みな此あたりより行たるとて、そのめこのゆかりの男女、聲とよむまで家こそりよゝとなきぬ。

廿九日。大はたの里よりふみおこせたりけるにそへて、邦政の椎の實といふ毫を贈ける此かへりことにくはへてやる。

ふるさとのつとにひろはん椎の實の華の情も深き言の葉

又おなし里なりける、伊之といふ人。

ふみまよひ又歸りこん君か行みちふりかへせしら河の關

となんよんて贈りけるに返し。

せきなくも越そわつらふしら河の雪にたくふもふかき情に
深あみた佛のふたたひかい聞へたまふうた。

又もこんかた見とみまし言の葉をかきもとゝめよ壺の碑
このことのかへし。

とひむつひなれし名残の言の葉は書つくされぬ壺のいしふみ
いけた包幸のふみにまきそへて、

しなのなるふせやに生ふるそれならてありとは聞と逢よしもなき
とよみたるを見つゝ返し。

かたらひて逢と見しまもなかゝに夢の伏屋のよなゝそうき

かなな月のしくるゝ空のならひも雪ませにあられふりくれはけふなん霜ふるとい
ふ月の名もあさもよひきのふよりつゝくみゆきにふりけたれて行かひのみちもや
ふみわけてはれ行頃あさひらけ沖行ふねのほからゝとおかしければ近きあた
りのけしきなつかしく見まほしくきつねのかはこゝろもきて名にかふ十冊のこもや

うにあみたるはきまきしてまたふりのつえにみつわさす老のまねひしてたなべの
あかたを西にはつかはかりゆきて万人堂の杉むらを左にいにしへのかななやにと
ろしらしり川の名ある今いふかなやひとろなといふめるあたりを分んと至る。三
本松とて立る邊にたゝすみて、釜臥の山の麓にあふき、足崎のいと長くつかるの沖邊
までさし出たるは、えもいはんかたなうおかしく、舟の居れば、○圖ありたなふのあか
た、かなやとおとしの澤の
ふたつやひたるの村、大たひら、あんとのうら宇田河森じやうか澤うすり川、あしさき
の一里斗さし出たるに、遠かたはつかろい、はき山をはしめ、かうたのた、□、其外のこ、□
いそ山のあらま
しのかたとあり。

浪速かたそれにはあらぬ崎の名の芦にさはらぬあまのつりふね

しはしのほとに見けつはかり、いはきの山はうなのうへに遠う見へみ見へすみ見や
られて、

つかろちやそれといはきの雲と浪いづらをいつらわきて見なまし
いやふりしたかねの雪をふりあふきてたはれうたひとつ。

釜臥に足埼あればかなへともみもとの松のたてるすかたは

二日。この夜半うち過るをりしも雨いたくふり出に鶴の聲して、

子をおもふなみたの雨のはるゝまも鳴てやたつの羽ぬらすらん
三日。あしたよりふりたる雨もをやみて、夕日かけるふ一村雲を吹さそふ風たもと
に牙へたり。

雨はるゝかた山林いや寒くたゝよふ雲やゆきけなるらん

十三日。この十日はかり風おこり、こゝちよからねばしるさす。ふしかちにをるに、
申ひとつならんかなへ大にふりて家を捨て雪のなかに、ものもふまてみなとにかけ
り出るは去年の冬にひとしかりき。

十四日。村木たれといふかやに、竹の畫のさうしの前にすへたりける鉢の木の五葉
の朶の灯にてらされて、おなしやうにうつりたるを、

枝かはす松と竹との相生やちよにちとせの色そあらそふ
となかめて、こよひのほきことのあるしにやる。

十八日。近き日こゝをいてたゝはやとがねておもひをれば、心のあはたゝしくな
くれとめにとまることゝもおほかりつとも、かれと語りこれとかたらひつれば、心の
いとまもあらさめれば、かいらしかりに、くれ行山のはの木すゑあらはにいとまか

しう月のさしのほりたりけるを、

袖ぬれてあはれかつそふ又や見んかた山きしの月と雪とに

十九日。こゝの人々、わかれのつらき心やりにとて、それゝにをくりける。

中嶋杜美右門公世でふぬし。

雨雪霏々日 相憐遠送君 行装翻去後 離恨與誰分

前路無由眺 經過全隔雲 爲今欲賦別 情極不成文

といふからうた作てをくりけるに、むくひせはやと、分と文とのふたつの文字をも
して、

雪にきるみのしろ衣たち分れ行ゝ 見なん人のたまつさ

このぬしふたゝひくにふりして、

たちわかれ又のあふせを玉川の岸邊の波のかけに契らん

となんよみける返し。

わかれても又の逢瀬はみちのくの野田の玉川なみのよりこん

齡香山徳玄寺の新發意寂秀、みくさのくし、つくりて給ふに、みくさの和歌をもてこた

ふ。

西山白雪共銜杯 興盡南天已欲回 如使笛聲在雲外 向來偏待鳳皇臺
このしゐん回と臺とを、

雪見つゝむかふ蓋いくめぐりめぐりてとはん君かうてなに
三徑蓬蒿幾送迎 交遊如水是平生 從今欲問相思意 千里江山共月明
となんありけるに、

又いつかみつのみちしはふみしたき君とあふかん月のくまなさ
別離盃酒一登樓 山外漫々萬里流 東海半天蓮嶽雪 羨君今日到三州
はたこの流と州とをとりて、

雲水の身はふしのねのゆきなかれめぐりても又とはん此くに
やまもと世獻のいはく。

又こゝに逢てふことはかた糸のよるへはいつと契おけとも
といふなる返し。
又いつと契しおけは逢ことは何かたいとのかけてとはなん

菊池教政のくしに、

之子幾年凌海濤 則今歸路吳山勞 由來詩賦故人癖 鄉國定教僧高濤
てふ引もて返し。

あさからぬ人の言の葉いつまでもかけてわすれしおくの浦なみ
くすし吉田懷貞のいへらく。

けふこゝをしておして行ともたちかへれあたゝら眞弓春はふたゝひ
かへし。

みちのくのあたゝら眞弓春は又君にひかれてたちかへりこん
きくち清茂の云、

逢まてとかけてたのまん八橋や水行蜘蛛手思ひ渡りて
となんありけるに、

別ては戀渡らなん八橋や水行蜘蛛手ふかき情を
又此ぬしのよめる。

又いつかこきも寄なんつなて繩かけてたのまんわか友舟

このかへし。

こゝに又かけてむやひのつなて繩さしてよりこんわか友ふね
きくち成章かさねてきませといふことを歌ひとくさのかしらにひともしをおいて、
七首のなかめ贈られける。

かきりあれはよし歸るとも春はくる雁にたくへよきたとおもはん
さらぬたに餘波そおしき玉くしけ二とせむすふ露の情は
ねにたてゝわれやなかなん郭公雲井のよ所に聞むとおもへは
手にふれておもひな捨そいそ菜つむ海士の形見のしるへ斗を
きみゆかは蜘蛛にかけて八橋の川瀬の月をおもひ渡らん
まとみせし夜半の契のけちやらて猶かき起す埋火のもと
せめてわかなくさめにせん年ふとも絶す三河の水くきの跡
となんありけるおなしさまにかへしものし侍らんとて、
雁かへる方はそことも春毎にしらぬ行衛を北としのはん
さして行袖はなみたの玉くしけ二とせなれし君にわかれて

ねては夢にさめてはうつゝ時鳥聞し夜頃の友やしのはん
手を打て年へすとはん磯菜つむ形見斗をしるへとはして
きそもとへ君がわたらはやつ橋の蜘蛛に月の宿るをや見ん
又こゝにまとひやせまし埋火のものと心をいかゝわすれん
せき遠くよし白川はへたつとも吹通ふ風の音信やせむ
なかしまきんつく。

不須三疊陽關曲 横笛贈來恨別促 君若試當明月吹 可懷離室屢剪燭
といふくしを作て笛をなん贈ける。そのかへりことにくはへてやる。
笛竹のよるく月にしのはなんそむけかたりしやとのともしひ

河嶋尙方の、

去年雪裏始逢君 今歳別君雪又紛 行見芙蓉峰上色 應思此日泣離群
かゝるしゐんのわきて情ふかうつくり聞へけるにいとゝ餘波もいやまさりてこの
こたへれいのふりに、
雪にとひ別て雪のふしのねを見つゝしのふの山はわすれし

まことやこそそのかんな月はかりに、このやとに行とふらひておもへはふたとせあま
り、こゝらの人々になつさひたり。

二十日。雨のふりていとゝものうく空のみうち見たるを、これや世にいふやらじと
て、雨は七日ひをふりなんとやの女翁のほゝゑみていへるに、

かきりある雨は七日に晴るとも宿の別の袖はかはかし

人のいさなふに行は、あるやとのやのうへのまひろき處にありて、うまのはなむけに
とて、さけさかなとりくして、あるしめけるわさに、日もはやくれなん頃、猶きそひてか
れこれおもふかきり集りて、いかにおかしくあらんともからに、大雪のなかを野行や
ま行わけゆくとならは、ふみたる道もなみしらぬ山路にまよひ、身もうしなひてん、此
年の日數もいまずこしやあらんたひ衣おもひたちとまりて、あらたまのとしたちて
んをまちてなど、ねもころに聞へければいらふこともなく、

ふる雪の情もふかき友かきの圓居もあかぬ宿の夕くれ

廿五日。けふも空よからしとて、これにかこちかましうおもふとちうちものかたら
ひ、

旅ころもたちこそわけれおもふことかたるにいとゝ心ひかれて

廿六日。此夜あけなはとくも出たゝんと、ひたふるにおもひさためつれば老たるわ
かきまめゝしき心に別おしみつゝ、こはかなしふたゝひ此世のたいめこそあらめ
なといへるに、いとゝ去年の冬より馴むつひぬる縣のなこりいふべうもあらず。

廿七日。かとしてせり。横濱てふうらつたひて、野邊地のみなとに行へけれとあれこ
そまされなつくものかはと、なかめある尾駁の牧も見まほしく雪のふるあとをたと
らんと、そのすちを分て朝夕見やりたる赤坂の岡邊にかゝれば、夏のころぬさたいま
つりしやふねとにうけひめのとりぬ雪の岨にたてり。

山の名のまはにの色を雪の下にうつまてそれと三の神籬

石神をへてぼんはなたひとふ野あり。こゝにふん月の頃、たままつるにそなふ粟
花をみなへしをの多ければかくいふとなん。きちかう水かけ艸にましり、女郎花の
野もせにさけは、これを盆花とこそいふめれ。

手折にし秋の花野の露は霜と日數ふりつむ雪の下草

妙見の石のほくらは雪のしたに埋て、鶏栖のみすさましう雪の中にたてり。田屋の

村を左に山路に入るこの林の中に石のたてるにおほひ作たるをおたてかみといひ、館八幡と申神おましませり。むかしは谷地中に坐し給ふをおかころまさしの夢のみさかありてこゝにうつし奉るそのはしめは大同の頃祭しといふ札あり、むかしいふ青蒜今いふ青平に着たり。春見し熊野のかんみやしろにまうてんとあないに雪ふみならさせてちとせふる大杉の根はおのつから御阪つくるをふんてのほる。うへ大同のはしめ祠ひ奉りしかと、其札くちて文明十八年にあらため作るもあり、うちにはみたやくしくわんせおんをひめたり。

ひろ前にふるしら雪は太熊の、浦のはまゆふいくへなるらし

又天魔神といふ祠におはしかたにたくふ石をあまたならへたり。寶永のころをさめたる札に、左藤次郎とかいたる名ともいまし世の人のとも見へす、よこなかれ子持なかれといふ山阪を行に、雪いたくふり來けり。とくなかる、山河岸への氷に雪のうすくと積たるに、鳥のふみたるあとひたにあれば、

水の面に數かく鳥のあとそ見る氷のうへに雪のふれは

沙子股になりて、春一夜宿りたる河のべのあやしの翁かやをとへは、男はすけのむし

ろとり、女は布うちをる音たへす。くるれはをとこは繩なひ、女はあさをの糸うみ居ならひて女をきなわれにとふ、おやたちはいまたありや、おやあらははやその國にいさね、われも子あまたもたり、近き山に入て、柳山子のわさして世を渡るを、寒き日はいか、なと、朝夕見まほしうおもへは、その親もさそや待らんといふに、こはくしのをしへにもそむきて、けふならすほしまゝに身をほ^(は)ふらかしたることをくひて、この女のいさめにはちらひていらへせんすべなう。

父母はなきかとそとふ世にまさは遠くあそはぬをしへおもへと

廿八日。館にますやはたのおほん神にぬかつき、圓流寺の上人をとふらひかたらふに、雪いやふれはいかゝとためらふに、やの翁入來て、けふ立ば身はしみ氷りなん、こよひもたき火にあたり、菅莖しきねと明なはとくものして、よはた行さきのみちはいとよからし、駒にこゝろして山阪ふみ越よなとねもころにいへば、

すゑまでのなさけをかけてこの宿にまことありけるたひそ嬉しき

夜ふけ人さたまるころ、波の音仄に聞へたるを、枕かみにふしたる翁の耳とくもなるは、ひんかしの海か西の海のなみ音か、ひんがしは晴れ西の波音聞へては、大雪やふら

ん風やたゝんといひてしはふきになもあみたとなへませせてけり。

あすは又風にたゝはや旅衣ゆきやはらはん神や牙へなん

廿九日。あさ日雪の太山にかきろふ頃やを出て小たふけ大峠前たふけなといふさかしき山みちの雪ふみしたきゆく。みたにのそこにけふり一すちたつは炭やくにやと見ればむらたてる眞木の中に、手代河^{テロ}てふ村のあるにこそ。

山ふかく誰かすみかまと見る斗けふりも細くあさけたくらし

やまゝのみねより尾よりしろき糸引はへたらんやうに雪のみち見へてたるは鹿の行かよひたるとなん。

雪もまた浅き山路をふみ分る鹿のかよひちふりもうつます

むかしその人やおちたりけん、左京沼とて大なる水海あるに、荒沼ならひあひたるをぬおのやうにいひなせり。ほとなうあら沼の塘をめぐり濱路になりて行ほとなう小田野澤になりぬ。こゝをゆく海へたのみちはいとひろう、西はやまゝ引つらなりて、ひんかしははかりもなき海原に、岸近うあらなみ寄せかへる磯になゝさかはかりのはしらに、よこ木を入れて十文字したるを立たるは山かせとくはまちに吹來て、ふ

とぎにかたをうしなふ人のためにせりけるとなん。いはゆるしるしのさほにこそあなれと、ふりかへり見つゝ遠さかれは、

遠方にそれとしるしの棹もまたさしてうつまぬ雪あさくして

ときのまにはやち吹來て、近きいそ山も見やられず、小井邊の渡に猶行末かきくれて、行なやみたゝすむ駒もふすはかりふゝき波風牙るはまみち

めに近き磯屋のほのかに見ゆとおもへは、見けつはかり煙いやたてるところをさして、やとつけといふかたは大井邊のはまやかた也。

すゑくらくしほやくけふり磯のなみたつをしるへに宿やとはまし

行かた遠く、ふゝきみのをうかつやうはけしければ、此筈やにとまる。みだすれいさごとくふり大蘭の莖をるをわさにすれは、おほゑへともいふにこそあらめとほゝゑめはあるし猶笑ふ。此名夷のいひしにやむかし此あたりにもはら住たりけんごゝの隣の浦を白糖といふもしかそれらかいひたるならんいまもオキヘシラヌカ夷のしまにありける名也。むしろうつ翁くれ行は檜の皮くたいて燈心にかへ、かすべするめ^たのあふら火ともしてければ、女は布をるうみそひき、又おほゑのさむしろをりぬ。

三十日。あさひらけ行ころ出たてと、山さかのみちゆきやられねはとて、半にうちのり、左に海右にたかやまの雪を見つゝたとるく、

やまゝの雪のなかめにのるうしの遅き歩もとき思ひして

白糠に至るやは濱のたかきしにたてならひせんさいめきたる籬のあるをさしのそけは、梅のふせ木にやあらん、雪に埋しを見つゝためらふに、牛曳見たまへ此雪はこん春のやよひならては消もし侍らぬといふに、

春かけて雪にうつまは梅花人しらぬかのしたにほはん

ちいさき岩山に、冬かれの梢しけうたてるにさゝやかなの鳥居岩のさし出たるにたてりけるは、ほんたのおほん神也。このたかいはの末より、いくはくのたるひかゝりたるは、玉のみはしらともいひてんか。

あら磯にみかける玉のみや柱ふとしき立る波のしらゆふ

あけなるいはむらにちいさきほくらをつくりのせ、ちいさき鶏栖を立て、赤岩明神と齋ひまつるゆへやあらん、もの見崎、屏風岩など見つゝ、過て、次左衛門ころはしといふその人のむかし落たりけるとぞ、そこをなかはに至れば、柴のかけはしをわたし、あめ

に雲ふむこゝちして、岐祖路の外に世にかゝるへしとはおもひかけきや、行あやうさ渚よりは高さいくそはくそや、はるくくと見きたす大岩の末に、ふり埋む嶺の梢は、雪の下草などのやうに、下枝には浪のうちかくるすかた風情ことなれと見やるに、めもからく足もうく斗やをらこゝを過れば、又坂ありけり、その名を岩石おとしといふ。つねに水あふれなかるゝにやあらん、すいさうをはり渡したらんか、ことく行ことのゆめあたはねは、牛追山かつらも來集りにのをときはなち、腰なる菅の小出で、ふ物の中より灰とり出で、氷の阪にまきちらしゝくたりかてら、手ことにとびくちてふものして、氷うちやふりてきたをところくにつけて、足のたよりとして、ふたゝひさかをのほりえて、あまたのうしをおひおろすありさま、これをしたより見あくれば、あやうさたとふべきにも、ものなうおそろしく寒し。こゝらの牛もいか斗からきおもひやしけん、牙へわたる空に玉なすあせしてやゝくたりはてぬ。おほあなといふところありむかし野かひのうし、此いはやとに入てはるゝといきゝてよこはまの邊にはひ出しとて、今そこをなんうしの澤といふと、そあけまきらかかたる。又うしのいはほもありとか、行みちの左右せまりてみしろきもならさる處を二口といふ、麥なほ

かけたるかと思ゆる瀧あり、すなはちそうめんか瀧と名になかしたり。しらすなのはまといふを行は、あしもとよりゆくりなうみひろよひろもさつと浪のたかくうちあくる、ごはいかにと見おとろきて、しはしたゝすめはのりつるうしおひ来て、人のきあつまるとへは、これなんぼつとあげとて、波のよりこぬまにうちこゆる磯邊にて侍る、いさ引しそきたるひまにとく越てといふ。此いそへのふし岩に、長やかによこたはる穴ありて、なみのうちいるゝが、かうくゝと神のひゝきたるやうに鳴り、水はちきの水あくるかごとく、鯨のしほふきよりうしほはきとはすかごとく、おかしうかへり見ればちとり鳴たり。〇圖あり「ぼつとあげとまりのやかた」とあり。

花とちり雪とくたけて又たくひあら磯浪に衝なく也

瀧あり、彌次郎穴といふ洞あり、中山といふ雪の岡のべにべんさいてんの鳥井ありけるもとに、あけまきにましりてたちやすらひて居れば泊といふ浦のやかたにほとやちかゝらんやのしげく見へたり。

たとりこし雪の中山わけ來ればこよひ泊の宿そちかつく

このあたりは蝦夷人のすみしふるあとゝいふはうべならん、夷やしきといふところあり、泊の浦につけは、空かきくれて雪のふり來ぬべう見へたりしかは、いまた日たかくこの浦のをさ種市といふあるしのもとに宿かりぬ。

しはす朔のあした。崗邊のやうに高きところをのほりて、東海山大乗寺といふなもあみた佛となふ寺のあるし、哲譽上人にまみへたり、この寺の門の前は、谷越へに橋かけ渡して、そこに水清く行なやむさまこと也。

みほとけのあかくむ袖や牙へぬらんかはは氷る冬の谷水

此谷水のほとりに、御所太神宮といふさゝやかのほくらあり、人にとへはいにしへなにと申奉るならん名をぼえしり侍らすみやのひとところいかなるおかたにやさすらへ来ておましましたしき。そのみやの御館を人ことに御所のみやととなへ奉る、みやかくれ給ひしかはそこにつかしてみやの御なきからおさめて、めのと小藤太といふもの、花折あか奉りて、なきたまをまつりてとしふるに、此浦のやはのこりもなう、大濤にうちこほたれん人もあまたいのちうしなはんはやしそけとまさしき夢のさとしありて、ければみさがのごとく、此たか岡ににげのぼりて、その日をまつにたかはすつなみより来て、ければ浦人おそりたふとみて、御塚を神といはひ、社をたてゝ御所の

みやと祭りたりしを、われをはしめものしらぬかゝるあまやまかつらが御所大神宮とあやしうもあかめまつりたいまつれり、おほん神の靈驗掲焉のみなることそ多かりける。その木村小藤太かすゑは、今も神につかへ奉るその家につるぎたちさびなから残りたるを遠つおやのもたるたからとたふとめり、こゝにある坂のほりて行といふ貴寶山とて老部の高倉の尾よりつらなれる山にいてはのくになる月山の神をうつしまつるそのはしめはいせのくにのあのゝつより來るふな人、おほんしめしもありとて三十いま二といふとしすけして廣貞といふか寛文のころわけのほりしをはしめに、今も水無月二十日に祭りすとなん。あふき見れとそいたゝきもつゆあらはれず、雪けの雲ふかうかゝるやと見るかうちに、雨とふりかはりてければ、えいたゝす、かへる小阪よりは下なるやねに石の地藏をすへたるはいかにと見ればむかし石の工かつくりあやまちたるをそきたを風の吹やらぬ料に又みほとけのみかたしろなれば、何となうやのうへにすへおきたるをすきやう者なとはたうときことにおもひ、なむやのむねのちそうそんとかねうちたなこゝろを合となん。
二日。あさこくものしてたゝはやとのそむに、きのふの空にをとれと雪あられふれ

は、人のぬきおける皮ころもをかりきて、ひつたて皮とて大なる熊のあら皮にひもつけたるをかたよりかけたれば、末はあまりてむかはきのことくのりたる馬のかしらまでかゝりてはきつゆさむからず、うつかことく雪あられませふり來るをさそふ磯山おろしはげしうふきむかふをしのきゝ行は、うまも人もしろたへに雪にさへ通り吹もをやまぬ風に、目いさゝかも見ることあたはず、野原の雪磯邊のあら浪のなかを、おのかしりたるみちをこそたどらめと、瀧の神籬そうせんの社の前をへて、馬門といふところを過れば、ふる河といふも雪に見へねば、

けふいくか雪のふる河埋れてたつとも波のいや氷るらん

北川南川といふ河のあはひより、矢萩かたけといふ見ゆるは、これも廣貞法師かひらきしといふ片道石川たな澤なといのちしぬへうおもひしてふとぎに行末もしられねば、はつか二里斗を行なやみて、出戸といふ邑につきしかば、やはなへてくゝの繩なひさゝめ(紗)の筵をるをわさにしてゐならひたり。こゝに宿て小夜中に、風猶はけしうとて芦のすたれして雪垣めくらしたれど、ひまあらければ雪のふき入てもねられず。

竹の名のさゝめさむしろしきたへの枕につもる夜半の白雪

四日。けふも雪ふりにふりて、ふゞきはけしうはま風のごゑ浪の音よりもたかし。ひゞき牙へわたればえいてたゞす火の邊にのみ在てあるしとかたる、此でとのほまよりは未申にやあらん、戌亥にやあらん、たかまきといふありといへるは、高牧にや侍らん山の尾のやうにしてほとりに水なかれ木立ふかう、をのづからのあら垣をつくりてけるそか中の原なれば、いにしへそこに牧ありて尾かみまだらに生ひみだれたる駒の産れしをなん、みかるとに奉りてもはら尾駮の駒といひ、うまきを尾ふちのみまきとなへわたり、高綱の騎し生賸は七戸よりといへは、これも此あたりよりいしてしといふ、此高牧の木立あれうすらきてければ、牧の駒ともとにむれ出て、おのかいかましき方にうつりて、尾駮と室の窪村とのあはひの相の野といふに求食行て牧となり、こゝもたよりよからねは野邊地に近き有度アツトになりてけるを、今は倉内クラウチの野良に放ちて牧となれと名は有度野に在りとそかたる。いつも冬來ればとりて其邊の村々にやしなひたて、やよひの末や、雪もけちはて、わか草青くもへ出るを見て放となん。いつの頃ならん、出戸よりいとあさましきまで大につねのうま四五かたけして牧の

駒ともをひし、とくひ人をも追めくる馬の出でければ、村の名もてとよひその馬の見あらためはかりし處を高架と名づけ、かたちひらかなりしとて、そこなる沼を平沼とよひ、馬の背いと長く七の鞍おくによりけければ、其おきみしところをくらうちと呼ふとぞ。此うまはゐころして埋みおきたりける、其つかを七くらといふといへり。なかむかしのころやんことなき君の仰とて、なゝくらのつかのしたにかくしたるうまのまことに大なりしかぞのしら骨ひとつとりてことのためひしま、御使をいさなひてつかほりこほちて背のほねにやありつらん、めくり二尺にあまりけるを持歸り給ふとなん。

五日。朝ひらき行ころ出戸邑をうしろにいてくとて、

又たくひ嵐もたへてしつかなるあさてとほその雪の明方

けふはうしにのりてみちも行こととからす雪をたとるくも水なしと云ふ小川のへたになりぬ。

夏はかれ冬は水のちかはて、水なし河の名になかるらし

老部川といふありこゝにも過來りつる浦の名のあるはいかにといへはをひへの山

のつるねよりおちなかるゝ水なれはしかいへるとゆくゝ高牧は掛棧地獄澤など
 そいふめる。むかつをのこなた烏帽子山といふがまそのすかたしてそかひより見
 ゆ、その高砂のしたつかたに、岡のこたく雪もふかゝらぬかたに、かれふの色のほのか
 にあらはれたるそれなん尾班のまきのふる跡とゆひして、人のさしをしへたり。い
 て、そこに分てんといへは雪ふかうしてなかゝふみわくべうもあらしかしとて、さ
 らに人もすゝまでよしいきたりともおかしきふしもつゆ待らしはたみちのみふみ
 あやまち、あらぬかたにたとりて、あら山中の雪の中に命やしなん、こん春を待てふた
 ゝひ見にこそ來れなといひもて、尾駁の村近くおふうべ尾駁うまきはみちの奥にあ
 らし、又その名もあらばうたかふかたはあらしなとむかしよりもいひまよひ聞へた
 り。かの山いと近う雪のおもしろうふれは、牛の上に見やり、○圖あり「ふなし山をふ
 た鳥の海で、
 ふ満とあり。」

かれ残るあしの花毛の色と見ん山のをふちの牧のしら雪

いと大なる湖あり此水上は細きなかれの落來て淀と成ぬ。この水海のとはあら海
 なれはあさな夕しほのみちくなるをりゝはもろゝのいそ波にいさなはれてい

り冬の半よりは鯉のあまた入くるをとらんとて、水の中に山田もる鹿火(鹿)家のやうな
 るちいさきやをはたち斗もつねに作ならへてけるに、雪のふりかゝりたるはおかし
 き風情なり。此小家の名を馬手マテといひて、夜もすから蛛あみといふものに中綱とい
 ふを張て、それに細き綱をひき、綱のくらとひとつにとり、馬手家の前ことにさしおろ
 して、こゝらのいをのあみに入て、中綱にあたるを引たる綱にはかりてさと引あくる
 となん。こと處にて左サ右ミといふは、魚とらんと標漕のやうに杭あまたをさしたるを
 いへと、こゝの海士は水海の中の小家をのみいへりいせの海にあまの馬手かたいと
 まなみとなかめ給ひしこゝろとはいかにやあらん、海士のはかせにとはまほし。を
 りしも氷おさるかたを小舟さしてこのまでやのめぐりをこきありくもおかしくう
 しをとゝめさせて、

舟しはしまてこととはんいとまなみすむはいせおの海士ならねども

をぶつむらにつきて水海のへたにある木村たれとかいふか宿とふ。こよひはゑみ
 しの御神とし越給ふの夕なれはとて、まさなことの氷頭の鱈(鱈)に、いはたかいませあさ
 らけき鯉のひれなから盛て、扇をぬさにとりをはり、此頃の雪にみなと口くはりて潮

の入こねはいをとるわさもせてなとうちいひてにしのいをものして夕のいひいたせり。

六日。ようへよりけふも雨ふれは、朝いして雪の中の雨は春ならぬ春雨めけと時しならねはものうくて、

けふは又ぬれてたゝましたひ衣きのふは雪にはらひしものを

やの翁まにかしらすし出してけふは雨猶ふらん又雨ましり雪のふりくへし、ふきやし侍らん、いふせくもいま一夜とゝまりてと、老のなさけくしういへは、翁とともさしくみてほた火のもとに在れば、翁ひけおしなて、云、わかとしはやむそちに老たり、やは遠つおやよりいくはくの年をうけつき慶安のむかしより浦の長となりぬ、吾がおほおほちは力世にこへてくにかみにめされて、すもをさとまてなりて力ある血すちなからあかもたる子もうまこもさばへかへるか力もあらてとなけき又此村の名ををふづと人はいへと、むかし尾のふち髪なる駒生れて、これをみやこにひかせ給ひて、をぶちのまきといひき、今も其處高牧とてあり。人くひたるその馬はうちとゝめて、そこになくくらといふうまつかもありつなと、なにくれとわかうへにとり

ませてかたる。翁かおくなき心も嬉しくて、

野かひせし尾ふちの駒のものがたり老の心のなつくうれしさ

まことや後撰集におとこのはしめいかにおもへるさまにかありけん、女のけしきもこゝろとけぬを見て、あやしくおもはぬさまなることをいひ侍りければ、「みちのくのをふちのこまも野かふにはあれこそまされなつくものかは」となかめありて、ゆかしき名ところを此十とせあまりこゝろにかけ来て、いま尋ね見ることのうれしく、

としふともおもひしまゝにみちのくの其名をふちの牧のあら駒

七日。室の雀をへて有度野を行て野邊地の湊に行みちありといへと、雪深くつもりてわけをよふへうもあらぬよしを人のいへは、もとしおなしみちをれいのこと牛にて田名部のあかたをさしてかへらんと、湯の邊を出て、此水海のすかたは羽うつ鳥の翅にたかふかたなく似たれば、鳥の海といへると夜邊の翁か物語にしたるは、うべとはおもへれときしべは氷のみにたる上に雪のつもれは、まほにも見やられず、こなたのきしより斧やうのものふりもて出行は、何わさするにやと見るに、氷うちやふり小舟つきおろしのり出ほね斗なるあしろやつくるふとてかやつけたる艇を氷

のうへに引めぐらしぬ。氷ぬさるかたには、白鳥あまた鴨をし鳥もうきましりたり。

なれも友にむれてそあさる鳥の海翅かくれに浪やたつらん

又しら鳥の聲たかう鳴しきるをかへり見かちに、

雪のうちにあさるすかたもしら鳥のそれと汀の聲のみはして

出戸の濱近う此村になれは、休らひてこと牛にのりておひ出むかふかたはいとくらく雪は雲の吹ちるかことくふり来て、行末のそこと見へねと、老たる牛はうまにならひてやあらんよく路しれはまかせつゝ行は、雪にふりうつまれて眼のみくろき牛追のしたかふも猶さむけにたとるく浪の聲うち冴る沖邊に衝むれ鳴たり。又磯つたふ聲もせりければ、

沖くらき波と雪とにゆくかたをいそへのちとり立まとふらし

やをら晴行と見やる高石とやらんのほとりを、鷺のひとつ飛行か、羽風尙さへ行音して又ふり出るに、

とひ來るもつはさはけしき山かせにふゝきをさせそふ雪のしらわし

瀧の明神のまへ近う牛あふかみかきなせる鏡見たらんかことにあたるひのうへを

はるくとうちわたるに、うしのひつめもたゝす行なやみふしかちにおきもあからねは、股さき牛もほろひなんとうし追のなくに、のるともえせてたゝすめは、こはいかかして牛の命もたすけてんとねんしわひて、

ひきかへすためしもあれはのらて行うしをみそなへ瀧の神垣 此瀧の神

とあまたゝひとなへていのり奉れはけにやうけ給ふにやあらんからくしてひのおもをうし引出てあなうれしとわれもいきかへりたるおもひして、冬の空にあせのこふ。此行さきはいとやすくうちものかたらひてことなう泊の浦につきたり。

八日。けふも雪ふれはえいてたゝすあるに、童あまた集てひこじろふはなにそと見れは、海すゝめとてかたち味村の大きにて、はね黒くはらしろきをとりにあらかふ也けり。この鳥海のうへに、いくらもむれありけば、見つゝ折句になかめたり。

うち寄るみつしほ波にすみなれてすさきの鳥のめをあさるなり

九日。きのふのことに海もそらもあるれはあるしとゝめぬ。

十日。ようへよりひねもす雨のをやみもやらてふりひるつかた雪となれはえしもいてたゝて、

浦の名の泊もとめぬ玉くしけふた夜もみよも雪のふれは

十一日。おなしう種市がやにかたりくれたり。

十二日。けふこゝをいてたははやといへと、巖石おとしてふ磯山の坂氷八重にみて雪は猶ふりかくしてあま山かつすらもえこそ行かよはねといふめれは、やのしりより小舟に車かひさゝせてゑみしかねふりにふたりのふなこともしりうたげして、かいやりく行。海の面のとかに、おかしき岩は人の作りたるやうにところくさし出であるに、眞木櫟枝さしかはし生ひ立るを雪のふり埋たるは、枝末くしらきぬにつみなせるかことくだとへつへうかたもあらすおもしろきに、岩のはさまよりなる、瀧はいと細くなかはに氷りあるは雪のくたけおつるやと、

ふり埋む雪より雪をこほすかと見へて巖にかゝる瀧なみ

しほ風あらしかたは雪ふかれてつもりもあへす山おろしのさとふき來るにさそはれて、岸の浪たかうあかるに吹こほしちりかゝりたるを見るく、になうおもしろかりければ、舟の中なる人々もこゝろありけに、めもはなたぬは、さもこそあるらめと、
風ふけは木々のはたれのちる雪をいつれか浪の花と見わかん

しほせにあはひたこづきめくる舟のこゝらあるか中にとぶやうに行は、鱗のあひきすといふを聞て此ことを句の上におきてそのさまをなかめたり。

まかちとりすさきをめぐりあさなきのひかたを海士のきはふよひ聲

治左衛門ころばし折戸巖石なといふ處のあやうさもあふき見れば、おもしろきところと海士さへせいふめるほとなう白糖の磯につきてやかたに休らひ、うまにて砂鉢川なとわたるに、此ほと雪に馬も行なやめは、いまた日たかう老部に宿つけり。やの窓より見れば磯邊に男女むれたてるはなに見るそとおもへは、松前の島にてはしかべといふ沖の大鳥をこゝにてはをはりといふ。この鳥にとられたるたかへの波にたよひありくをとりてんと、ちいさき舟にてこきありくを見んとせし也けり。

海士のかるみるめあやうく見ゆるかな鳥の汐瀬のからきおもひは

夕くれ行ころにごれるみきにしとき奉りおのれらもますの鱈していはひあまなから山の神祭るわさ家ことにして、けふは柴一枝たにとる人もあらで、つゝしみ居りなといへれば、

しほ木こり海につる身やまつるらん山祇の神わたつみの神

あとまくらに鳴く衛の聲にめさめて、夜を寒みつはさに霜やおくの海の河原の千鳥更てなくなり」といふ歌のふと思ひ出れば、袖かつぬれて、

なれもさそ翅に霜やおくの海の浦風寒く衛なくらし

十三日。あさとくやを出て、晴たる海へたを馬にてとく過れば、ひるたに千鳥の多く求食か、人の行さきたちてみなかた足して磯邊の沙の上をふみのやうにあとつけつけ虫をくひもて行はあしひとつあるやうにあへかにおかしく、

ふみつけしちとりのあとをそれとえもよみとくひまも浪の打けつ

あらかなみのさとうちよればよきうちよればしそきてさらにたちもあからぬを見るをさまれる世のしつけさをかけておもふ波にさはらぬ衛見るにも

山路にほとちかき小田野澤を過て、八重に氷るたるめぬまおぬまを左に、ひろ野のやうなる澤邊とおほしき深雪のなかをあしとくかいわくるやとおもへは、つゝらおりのさかしきをふみとめゝてまどひもはてぬは、よきこの五調そといへは、つねにはせありく山路なればと馬追のしりにたちていらへせりけるを聞て、

やまふかみしるてふ駒にまかせすはいつこをふみて雪の中路

さばかり近き山路なから雪にたとりくれて、すなこまたの村に入てしりたるかたに泊る。

十四日。夜邊より風おこりてたゆけなれば、ひるより出たつに、猶こゝろくるしく、青平の村長かもとにほたさしくべて寒さわするゝはかりありておなしう馬にて野原をくれは、田家てふ村はかきたへて、けふりのみいくむすひしてゆふけたくにやあらん。

宿近く行ともしらしふり埋む雪のしたやの煙たゝすば

釜臥かたけよりはるゝと吹來る風に、雪あられをとほして小笠たもともうがつやうに身寒さにえたへず、うまもいなゝきやすらひかちに、雪いとふかきかた岨みちに、のる駒もさそ衣を重ねても身に冴へ通るふゝき山かせ

田名部ちかく日はくらくになりぬ。

十五日。十府のすかこもやうのものになにくれととりくしてもてありくはとしのくれようぬ也。これを境飯ものといふはそのまかなひにやしけん盛岡のおほん(御稻)い

なきは、此十三日の日れいやうにこゝの縣の君より奉れり、吾妻院のためしにや。

十八日。このひとひつかうらふれにや、風おこりてけふや、起出るに、里人とふらひ来て、かく冴へわたる冬の空に、いかてかしらぬ旅路に出て、大雪にこゝろやましくたとらんよりは、去年よりなりむつひたる此縣に、としこへてきさらきやよひのころ、雪けちたらんをまち、浦山のかすまん空に、こゝろのとやかにたちてこそ、旅行みちのおかしさやそひ侍らん、心おちゐてましはたしつかにいとやすけなるところあり。いさことやとにといへれば、こは何ことも旅のならはしとて、まかせることまかせざるに、かく情もふかきものかと、なみた落て、とみかふみしたかひて、菊地道幸といふあき人のまこひさしのひるは、あかけなる窓近く埋火ありけるもとに、此夜うつり居て、清茂なととふらひきける圓居に、社頭雪といふことを、

埋みても雪に宮居はいちしるくきねかつゝみよふる鈴のこゑ

おなし旅なから住なれぬげにやいねかてにふる郷をおもふ

身しろき枕かみの灯をかゝけ、おき出てふみ見んと、のそめは、松前の島よりけさ來け

るとて、首子陸子かをさなう手ならひにかいたる歌ともあり。又鄧美かもとよりとてしたうつにふみかいそへて送けるを見つゝ、

玉つさにまつことなしとこのあしたうつ白浪のよるそうれしき

十九日。こよひの集ひに、名所の雪と戀とをいくたの雪、

ふり埋む雪にはみちも浪速なるいくたひ人やふみまよふらん

いくた、戀。

おしからぬ命も戀にかれやらていかに生田の杜のした草

はつせやま、雪。

初瀬山雪に尾上もこもりくや埋ぬかねの聲幽なる

はつせやま、戀。

はつせ山祈るたもとの時雨でもつれなき色を嶺の椎しは

二十日。けふも雪いやふりて市人たちわつらふ。

關路雪。

都出てひなの長路にふり積る雪も日數もしら河の關

驛路雪。

たひ人の雪に朝たつほとみなみ歸るに末の深きをそしる

雪末深。

雪はまた淺芽のかれ葉すゑ見えてふりもかくさぬ野邊のひとすち

寄雪戀。

しら雪のつもる恨はいつの世の春を待てかどけんとすらん

廿三日。火たきやに大なる鱈をかけて、烟にすゝけたるはあへたらといひて年越ん
料のまさなこと、又この夜すゝとりしてあはせともせり。

この夜邊のまとゐに、 橋上雪。

谷河の氷る淺瀬は埋れて小橋をよそにゆきのかち人

廿六日。けふはとしの市とて、なにくれかふ人いとしけうたちぬ、こよひちとりのう
たよみてんとて、 嶋千鳥。

風寒きしほせの波のよるゝは遠嶋わたり衝鳴なり
浦のちとり、

たへすたゝ妻とふちとり行かへりあはぬ夜とこのうらみてそなく
濁のちとり、
すむ鶴になれもならひてわかぬ浦の浪のよるへにちとり鳴也

廿七日。この夜まとゐに、 すみかま。

益等雄かあしたはつま木こり積て夕はそれと嶺の炭かま
すみかまの業に朝夕妻木こるをのゝ里人いとまやはある

遠炭竈、

一むすひ又ふたむすひみね遠くなひくけふりも細き炭かま

月もいまをちの高嶺にすみかまのけふりにくらき影や見すらん

廿八日。とふらひ來ける人々と共に、海邊歲暮といへることを、

春もはやちかの浦なみ立かへる年をふたゝひとゝめてもかな

いさりする海士のたくなはくり返すためしも浪にくるゝ一とせ

廿九日。小なれはことしもけふにくれなんとす。むかし戴叔倫といふ人わかこと
に旅にいてゝこよひはかり石頭となんいへるうまやにやとりて、うきこゝろやりに

やありけん、

旅館誰相問

寒燈獨可親

一年將盡夜

萬里未歸人

寥落悲前事

支離笑此身

愁顏與衰鬢

明日又逢春

といふくしを作れりけるをおもひいて、あまた、ひすしかへして、

としをおしみ春やまつらんことさへくからもやまともおなしころに

あけなはあら玉のとしのはしめなからこの國のふりとて、しはすにあれば、わたくし
大といふことをして、むつきの朔のよを除夜にさたむれは、いまたとしはくれはてぬ
こゝちすれと、こよひをかきるならひに猶おしまれたり。

寛政六年甲寅正月よりみちのおく田名部のあかたふりをしるし、やよひのころ、おほ
はたに至り、烏剱山にのほりたるまでをかいのせられたは、奥の手ふりと名附ぬ。

奥の手風俗

道の奥の吉多郡尾駸のみまきに近き釜ふしかたけの麓なる柘寧府の縣に珠匣あけてふたとせの春をむかへ、明玉のとしは三とせをへて、ことし寛政六といふ朝裳吉木兄のとし、五日の風うそふきおこす寅のはるむつきの朔にあたるけふを去年にかそへ入てけるためしは、くにかみの遠つみおやとか奈麻余美の甲斐の國より此みちの奥磐手の郡安太多良山のほとりに軍いたしてたゝかひに飭摩のちらぬとて、その稻城にとし越給ひなん料になにくれのまかなひありけれと、それのとしの斯播須の日數はつかあまり九日ありて、餘波なう年の暮なんとすれば、まさなこともとゝのはてしゝともうれへあへれば、けふのことくむつきの一日を、こそのみそかとなして、おほんほきことありたりけるより、今の世かけて、うらうらやまゝ里までも、もはら此まねひして、たかき賤しきをそへなう、いまた年はくれはてぬおもひに、とはあき人の行かへしけう、弓絃葉さゝねと、小松にしめ曳はへて、くれ行門々に福取權とて、あり

「蓬委刀利香波たかんばのついまつを串にさし雪のうへに立ならへたるひかりに軒
くのかた」とありたかんのついまつを串にさし雪のうへに立ならへたるひかりに軒
はの雪もけちゆくかと思やられ、かのくまは、おほ白ふせてひつめ(マ)のゆふとりかけた
るとし繩引めくらしあるはみたまにひたいまつるころ、われもつゆはかりあはせ
とゝのへさゝけぬかつきて、

奉る椎のはつかの手酬草あはれみたまを旅にまつらん

なることもみな此里のふりにならひて、行としをけふのこよひにおしみて、

月も日もえこそとゝめね暮て行としのをふちの駒のあしなみ

けふはこよみの二日なから日のはしめ、月のはしめ、としの始ともいふためしなれば、
うしのくたちよりおき出て麻の上下にともしひとりて、こゝらの人々うちむれて、み
やしろのかきりをかみありくに、たちましりて、わか水くまんと、老たるわかき男女河
つらにきそふもおかしくて、

こまかへるすかたをたれと水かゝみわかみつむすふ春にうつりて

朝開きゆく空のけしき、ことさらのとやかに

あまの戸の明る二日を國ふりの春のはしめといはふ里の子

又ことなれるためしもめつらしき春なれば、

國の風ふきもつたへて玉くしけあくる二日をつのはしめと

桂文かしこき御世の恵みのいたらぬくまやはある。かゝるひなのさかひまで至れ
る春の長閑さは、おほんいつくしみのなみ八洲のほかまで流るためしを、あふきみふ
しみかしこければ

をさめますためしを四方にみちのくのあたゝら眞弓春やたつらん

宵うち過るころほひ、雨そゝきの雫ほのかに音したるは、長閑さに雪のけぬるにこそ

あらめと、おもひのほかに雨のふりぬれば、

したとくる雪よりつたふ玉水の音かと聞は、夜半の春雨

三日。けふも二日にいはふ夜邊よりさらにをやみもやらぬ雨のいとゝしめやかに
ふる朝戸をしあけて、

春雨の軒のいと水たへすたゝよるはすからにふり明しぬる

さらぬたに、れいのとしよりはかゝらぬ雪の雨にけたれてたへす人の行かひせり
けるすちは、こひちなとふみ出て、かゝらは野邊の草木もめくみなんとひとりこたれ

て、

わかくさのしたにやもへんしら雪の心とけたる今朝の春さめ

四日。けふは三日なりせちふなれは、いりまめにゑひすめきさみ入れ、松の葉こき入
て、まめはやすこと葉は去年の日記にあれば、かいらしぬ。とふ灰からもやをらけ
ちはつる比、人のとひ來しまとゐに、山早春といふことを、

春たちてけふみかの原また寒く薄き霞の衣かせ山

五日。けふの四日にこよみの春たては、戯れうた作る。

手を折てことしの日數かそふれはひふみよいつか花や咲らん

六日。けふは、五日なりやはしらのうへなるところに、枝たかき松を立て、そかもと
には鱒(大費)のをさ鮭のおほにへつみ重ねてけるに、たかまとより雪のいたくふり入て、い
をの上にもつもりぬれはうちたはれたるふりに、

よる波の色にたくへて雪のいをひれふり渡る佛にみゆ

七日。けふは六日なれば、わかかなのためしもよそに友垣の圓居に早春霞といふこと
を、

袖呀へて霞の衣きのふ今日春といふきの山は雪ふる

早春鶯を、

梅はまた咲ぬ梢にや、春の來居聲のみ匂ふ鶯

八日。けふにくふめる七くさの粥もしほつけのたかなを、せりなとにつみませてけ
れとわかめかり入てなめる里もありとか。

つむ草のそれにはあらて和布かる春の浦人おなし例に

澤若菜。

ふる雪も淺澤の邊にとけ初て水もわかかなの色やうつさん

雪中若菜。

しるべあらは分ても見ましいつこをか雪はふりつむ野へのわか菜を

九日。けふは八日也。菊池成章のもとに、若菜のうたやあらんいかになととひやり
しかはそのいらへはあらて、つとめてかい聞へたり。

時ならずかたらふ夢よほととぎすねなからつめる若菜なりけり

といひおこせけるにこたへて、

郭公夢にねのひの松ならて君はよとのにわかにつむらし

又このぬしごとし五十になりてけるなとかねて聞へて

老の浪よるもおもはて海士の子かいそなの若菜つむもはつかし

とありける返し。

老のなみよるともあらて摘はやすいそなはちよのわかにならまし

けふはとりの日也とて酉といふ文字をみきはかりの紙にかいて門の戸にさかさま
におしたり。こは鶏のかたにいさゝひきてけるためしにひとし。こよひおほ雪ふ
りて、

十日。けふの九日のあした行かひたへてさらにみちもなう猶軒の下のみひたにあ
りきぬ。夕くれて清茂公世なと至れるに集ひてなかめたり。

やゝ春の日を重ねてもむねあはぬ寒さやいかに毛布の里人

湖餘寒。

來る春の光うつせとかゝみ山雪けにくもる鳩の海つら

氷始解。

はる風の吹こそ渡れあつ氷岸邊はとけぬ山河のみつ

窓前梅。

おこたらぬまなひおもへと雪の色にやかて咲つく窓の梅かえ

十一日。大畑のみなとべは船たまの祝ひ此里はけふの初町市を町といふをもとゝして賤
しきものゝやはみなけさより曆の日にたゝしうつれと貴き館は、こんはつかのめだ
しよりといふめり。大なる水木の枝いと長き柳のしなひを、山なせる雪にさしてう
るおとこわか友ならんになうかたらひ、酒のませゑひなきしつゝわかれ行ふりこと
におかしければたはれに、

青柳の糸にみつ木を折そへてこれもわかれにむすふものとして

人ことにさゝやかなるかれぬげもてありくは、鹽針、館かゝる三品かふためしなれば
みなしけり。近き浦曲より來けるものらいさ歸なん、日もくれんといへは、月の夜也
何いそかずもあらんいな空うちくもりぬ、雨やふりこん、雪にやあらんといふを聞て、
けふのためしに、かのうりけるしほあめはりを詠ぬ。

あめもよの空とないひそしほくもり出つとも月のさはりあらしな

十二日。過つる夜邊あすは夜さりかならずとひ來てときくち清茂にかたらひて更
るまで音信もあらさりけるは契のたかひけるにやとおもふにけふなんつとめて、ふ
み來けるを見れば黒羽玉の夜邊は、たまくしけふたゝひとほそ叩つれと、こたへさら
にあらさなれば、人はいつこにと外にたゝすみて、

三河なる二見の道を行かへりまよふころをおもひやれ人

とそかい聞へたる、こはいかに、奥ふかう埋火のもとに夜くたち行まで、炭さしそへ待
わびてけるに、間遠にし在てえしらさりけることゝくゐて此返しせり。

おもひやれふたみの道のひとすちに待しかひなくあはぬつらさを

このゆふべ。人々ともになかめたり。春窓。

月やまつ梅の匂や吹いるゝおろさぬ窓に通ふ夕かせ

春床。

咲花のちるとし見しはおもひねの夢の夜床に春風そふく

春戀。

すみれつみ花をかことにいひよれと人の情の色そつれなき

けふは、子日なりければ、

ねの日する小松は雪に埋れて霞そなひくちよのためしに

十三日。目名といふ、近き村のうはそくら三とせに、一たひの例なる獅子まひてふわ
さして、高やかなるしらにきてに、熊野の御札さして、笛つゝみにはやし門々に入あり
くは、松前の嶋なるみやつこらかとしく舞にひとし。又其の嶋の、三年神樂のある
ふりにおなしありやりやのこじからしゝかまいつたしゝかまふたつとうたひ、又う
ちたはれては、おさんごよれゝせんげをまもるこはそのむかし、新谷千軒とて、赤坂
の崗のひろ野に、とみ榮へたる里のありたりける、其あらやの小路よりとうたふへけ
れと、いひあやまちしとなん。せんけは、千軒にや、さんごは、參宮米ちまきにちまきを此と
いひ仙臺のほとりにては、はなり。和歌山なにかしのにあむろつくれるにむれ入て、
なよね或おはなるといふ、はなり。獅子頭冠りてはひさこを口にくみ水をはるとて、
まづうばそくひとり、太刀のつかに念珠かけて、扇をかさしづゝおしすり、つるきたち
ぬきもて、ほうしにきほひまふ。獅子頭冠りてはひさこを口にくみ水をはるとて、
うちこぼし、はたさうしはしらくひもて、くまゝのこりなう、このやのしはうのます
かゝみ、いのれは神もいはひとゝまる。綾を曳へ、錦をしいて、ござとふませよか、くう

たひく〜てやのうへのすまゐにもほりぬ。麻苧一つかはかりくひたるるときにうたひけるは、「青柳の糸をはかけてよりかけてよりかけたるはあをやきの糸」とこゑくこえさにはやしけるもめつらしくて、

いくちとせ長きためしを青柳のいとくりかへしうたふたのしさ

かくてあるししけるに、みなゑひてさりぬ。此日、

鶯出谷。

うくひすも心やとけぬ谷水の波の初花うち出てなく

谷鶯。

もへ出る谷のかけ草はつかにも音にたてゝ鳴春の鶯

水邊柳。

河風にふかれてなひく青柳の糸もよるせの波のしからみ

隣家梅。

中籬を越へてこそめの色ふかくみきりに匂ふ梅の一枝

十四日。きのふうすつけるもちひを水木の朶ことに粟穂まゆ玉つけたるも、又柳の

糸につらぬけるもやのためしにやよりてんうつはりのうへに、やつかにみのりたるあはふあれは夏引の手曳の糸のこもりたるに、お桑まゆの柳の糸なからひしく〜と貫かけたるに、

さをひめの春のかさしの玉穂つらぬきかくる青柳のいと

夕附行ころちいさきおしきやうのものに、益等雄の春田うつさまをかたしるにつくりて、すきくは持たせて、これを童の手にとりもちて、門々にむれ入り、「春のはしめにかせきとりまゐりた」と呼ぶに、こちの方からといふ。あきの方からといらふは去年見しにふりことならず、近き里にて此かせきとりは、も〜ふぬさは、いわゐるとよめのこほり〜に在にひとしうあけまきに、みのうちき、こしに鳴子かけて、つえつきさはにむれありきければ、それらか友にあひて、雌なるか雄かといふに、おとりとこたふれは、鬮鶏のふるまひをなしけるにおちて、めとりとのいらへすれば、さあらはたまごをわたすへしとて、ひたにもらひたるもちひなとみなとられけるとなん。さりければ、梓鶏にや、又業人にや、鹿踊といひける人もあれといかなるためしにや、夜くたち亥子の比にもなりぬれば、いをのひれあるは、いをの皮にてもあれ、もちとともこれをやいぐ

しのやうなるものにさしはさみて戸さしあるとあるかたにさしありきぬ。これをなんやらくさとそいひける。○圖あり、さけの魚の皮、あるはひれにてもち豆の皮この良久佐といふわか父母の國にてせちふの夜かとののはしらに豆のからにいはしの頭をやきさし、ひらきとならべてさせるとき、終もさふらふや、いかしもさふらふながながにまし、て、やらくさとはやすに似たる、又斯波郡などのやらくちずりには、いさゝかことかはれといつらふるきためしにこそ。

十五日。男童は、けふをはしめに、菅大臣のみかたしるを家のくまにまつり、女童は、ひなまつりをそせりけるふりは、松前にかつゝにたり。ひるつかた、うへにゆかたびらをきて、紅のすそたかくからげはきまきにわらうつふんで、田植のむれり。女の聲をそろへて、えもとさえもがほうたんだ、一ほん植れば千本になる、かいとのおせのたねとかや「ほい」と鳴子うちならしてさりぬ。こは去年見しにことならねと、早苗とるにも此うたもはらうたへはかゝることおや、「風流のはしめやおくの田植、眼とはせをの翁のうへもいひけり。○圖あり、正月のごい、はこれにまつの葉を、手にも

だ、えも、た、ひて、抗、すり、か、鳴、子、う、ち、な、ら、し、ほ、う、植、し、と、る、男、姿、の、ふ、り、と、街、道、の、早、稲、の、た、ね、を、こ、う、に、て、は、藤、九、郎、と、い、ひ、仙、臺、に、て、は、や、ん、十、郎、と、い、と

此夜月前梅といふことを、

折とらは花も朧の色や見ん月の夜かけにかすむ梅か枝
梅か香もつゝむにあまるこよひかな霞の袖の月と花とは

十六日。けふは白粥なめるためし也。わけて此日は、田うへの多くむれありき、家々に入みちたり。この夕圓居して、

關路鶯。
都人霞とともにたちぬらんまたしら河の關のうくひす
逢坂や行も歸るもめつらしとこゝろとむらん鶯の聲

山家鶯。
隠れすむ太山のいほろおとろかぬよしうくひすは人くともなけ
やま里も正木のかつら來る春の恵にもれぬ鶯の聲

山残雪。

ふしなひく竹のはやまに世は春の色とも見へす残るしら雪
よそめには花と霞めと春もまた至らぬ山やのこる白雪
十七日。七の句題をよめる。山もかすみて、

榮行御世の春とやなひくらんこかね花咲やまも霞て
鳴うくひすの、

花と見て折られぬ雪の梅か枝に鳴鶯の聲さむけ也
かきねのやなき、

山賤かした枝たはめて結そふる籬根の柳春風そふく
花のたよりに、

春雨のふるそ嬉しきあすは又ぬれて紐とく花のたよりに
ちりつむ花の、
風ふかは袖にちりつむ花の雪はらはてつゝめしかの山こへ
春のなかめは、

こきませて柳根のいろくを都はこのめ春のなかめに
とまらぬ春の、

とゝむれととまらぬ春の色みせて行衛も夏に近き川水
十八日。ひねもす雨ふる。此夜夏の詠を、咲るうの花、

かけまよふ月の桂の河なみのよるともわかつてさける卯の花
このさみたれに、

さしなれて往來もやすの川長も此五月雨や渡りわふらん
河邊涼しき、

夏はいつはらひ盡して御稜する川邊涼しき夕風そふく
此夜菊池政高のやかて旅に行てん料に、かねてよき日とりて、かりに首途せりとて、和
歌山敍容のやまで、あまつゝみ、小笠はきまきなといたして、あるししけるその花かめ
に、なにくれの木ありけるに、柳をこゝろありけにさしませ、まさなことのなかに、年魚
のありけるは、いにしへ紀貫之のうし都佐の國の任はてゝ、みやこ邊にかへり給ふ、あ
ら玉のとしのはしめにかくなんほし鮎をたうひ給ひしことともありけるを、いまお

もひあはして此あゆてふことをもと末のかしらにおいてわかれのまねひしてな
めたり。

あをやきの糸引むすひ行たひのゆくほともなくくりかへせ來み

二十日。けふはめたしのためしあかたのまつりこち給ふ君のもとにありとかやこ
とにまゆたまのもちどりをさめあはほひえほよりとりて人にもみたまにもそなふ
かみさまの人はけふをせに曆の日うつりてけり。

山里めけにやに雪けちてとしふる梅の木あれは、

山のはの木々ははつかにめたしても垣ねの梅の花もにほはす

廿一日。歸路烟霞晚といふことを、

柴人の歸る家路の夕けふりかすみそなひく遠の一村○秋田本かすまぬ末
やしるべなるらん

廿二日。たゝん月のはしめわかやま紋容のもとより不盡のかたかきけるをかりて
けふなんその家にかへしつかはすとてふみのおくにひやる。

人もそ樂しかるらん時しらぬ布士を神世のすかたとは見て

この夜きよしけなりあきらとひけるまといして秋の句題七くさをよめる。

あへるたなはた、

ひととせを思ひ渡りて銀浪こよひを淀にあへるたなはた

あかつきつゆに、

宮城野の曉露にふしぬれて起なる袖や萩か花すり

機をるむしの、

もゝ艸の花の錦をくれはとりあやはたをる虫のこえく

みやこの月を、

玉簾のひまもるかけやいかならんわきて都の月のくまなき

月はうき世の、

のかれすむ太山の奥の庵の戸を月はうき世の外としらすや

秋のかた見を、

くれて行秋の形見をみちしはの露さへ頼て霜とおくらし

廿三日。この三日はかり冴へかへり埋火のもとのみさらてありけるに中島公世の
もとより此ほとはいかにはた日ころかり見つる日記けふなん返しやり侍る。又そ

かあとのまきく、かしたうへなとせうそこにいひて、おくに

みかきなす人のこと葉の玉くしけふたゝひ末の猶見まくほし

とありける。うたのかへし。

恥かしな人の言葉の光もて藻くすを玉とかけてめつるは

廿四日。わかやま紋容のやに、菅大臣をまつり奉るとて、うはそくすゝふりて、まねか

ふりに、ふと(大祝詞)のと唱ふれは、あるし鉢の木の紅梅のもとに、ぬさととりて、はらひよみつき

けるかたはらに在て、

うちはらふ幣の追風吹さそひ手向の梅の匂ふ此宿

廿五日。あしたより雪ふり夜は猶さむく、川のべの宿なれば、冴へもことさらなとか

たらふに鳥の聲せりけり。

なれもさそつはさの雪や拂らん河風寒くふくろうのなく

廿六日。成章のやよりこよと人來りしかと、頭やみていたらす。

廿七日。けふもこゝちよからねは、ことはもらしぬ。

廿八日。夜半よりふりもをやまの雪あけて見れば、ふたさかみさかにやふりけんき

へあへぬに猶そひて、いやたかう軒のたけはかりふりみちてけるを見つゝ、屏るに山
本保列とふらひ來て云、あか父禰編てふはいかいの連身まかりて、三十のとし月をな
んふれと、垂乳爲のおやのかふこのいとわすれかたうつねすらおもふに、わきてけふ
はその日なれば、じかるへからん言葉の手向もせはやとおもへともはへあるひとと
もいてこねはすへなし。わか父も人にひめて歌なんよみしことあれと、まほにはあ
らしかしなときやうのこゝろふかき翁なれば、そのぬしにかはりて、

在し世にめてこし宿の梅のはなその香や、莓の下にしのはん

こゝちよからねは成章のやをとふらはて、けふなんとへとたかひて、あはてそかへる

夕くれつかた、

ふみ分て雪のとほそを叩けともあはてそ君か行衛しられぬ

廿九日。けふ近きわたりにたひ衣いてたちぬる、日ころ待つるにつれなくて、よへの

ありつる歌の返しとて、成章。

來ぬにまつつらさくらへよ雪のよの逢ぬ思ひのみちをたとりて

きよしけのやをとふらひて、とくかへりつるを、又かたらふことのありとて、そこをも

とめこゝにやと尋ねわひて小夜すからまちて、ちよを過さんこゝちに、

風ふけは人は音せてうち叩く柳の糸のよるのつれなさ

といふうたを此日ふみに聞へたりける。返し。

おもひやれ柳の糸のかく斗ひきたかへたるよるのつらさを

三十日。あさ日うらくとてれりごん一日の料とてけふに市たちてけり。こよひの集ひに、冬の句題みくさを木葉なかるゝ、

風にちりはてゝ木葉なかるゝ山河の水の心も冬にうつりて

雪をたもとに、

ゆくゝも花とやめてんふり初る雪を袂につゝむたひ人

春のとなりの、

花さかん春の隣の近けれと越るはおしきとしの中垣

きさらきの朔。むつきのやうにとしとりとおとこ女やくのとしのうきをはや過してん料にけふに越るきのふをふたゝひしはすのおもひにその身のいはひして、一とせはきのふのみそかにはつることくなにこともせちみのふりにわか水もむすふ

やも有とか。

二日。あしたのま雪ふりて、やをら晴行比、かねてことかたらひつる檜原の雪も見なん、柚形も見なん、又ねりその綱に雪車して、柚木曳きたすも見てんと、あるしをはしめたれゝもいさなへは出たち、栗山村より山路を分る、雪ことにふかし。

雪ふかし秋はおちくりやまかけにひろひし路やいつこなるらん

なにの神のおましにや林ありけるに小鳥むれあさり、囀る聲毎におもしろくて、

つれなくも友にさそはで鶯の聲にさきたつ春のもゝ鳥

雪はけしきはかりふれときへかてに、たか袖もましろし。

白妙の山わけ衣二月の空冴へかへり雪そいやふる

宇會禮山に行へきみちをふみもとめ出て、大枸栗てふ崗邊にのほりて、北のうなはらをのそめは、ちりはかりの雲もなう、涌山のたけ、なにくれの埼もよく見やられて、

降つもる雪のたかねは浪遠く霞にけらし夷の島やま

ゆきゝて檜原の茂り合たるみちも下枝は雪ふり埋れて、いとさむくたゝすみで、

卷向三輪の山麓はいかに雪ふかく春のひはらの奥そかすまぬ

あいさにやあらん、たかへにやあらんはまちをさしてうちむれ行か乳鳥と見ゆるま
てちいさく見やり、

澳津鳥なれもつはさや牙へぬらんうそり山かけ雪ふかくして

去年わけたる、笹長峰てふさゝふもいつさかむさかの雪のしたにふみならされてそ
こともしらねは

生ひしける篠のなかみち埋れて雪のうへのみ分るかち人

夕日かたふくころ、菩提寺につきぬれはあまたあるいほりとも、かいうつもれ岩間
くにもへわたるけふりも、雪にふりけたれたるやと見ゆるに、鐘うつこゑの聞へた
り。

ふりつみし雪には寺もしらなくにうつまぬかねの聲のたふとさ

三日。とのくらしきより、鈴ふる聲、みす經の聲さへわたるにましりて、鼯鼠の鳴も耳か
ましく、世中のほかの静さに、

すましてしこゝろの月をなれも又めて、落來るむさゝひのこゑ

とくものしてとさいたつあないのいへは、明行ころ、濁へたの、林崎のふもとより、雪の

下にありともしらぬ、ぬ水海の上を渡らんと、權ふんで、大雪ふみならしゆけは、さらに水
ぬたるおもひもあらねと、去年の夏小舟にさほさし、筏のりくたし、みわたしの一里ば
かりならんを、野原などのやうにふみならし行かひをしたり。さりけれど、あやうさ
やはかりけん、ところくすちたかはぬしるしとて、高やかか枝のさしたるは、あや
まちてことかたにふみ入は、湯のふちくと涌かへるふちあれは也。されはこそ、雪
の中にけふたちなひき、さはかりあつき水もたへてゐさるかたに湯の氣たちのほる
おそろしと見るく、半に至れば、山子桐人をいふ也とも、むかふ岸邊よりこなたさまに來け
り。

しほならぬ海の氷のあやうさもいさし、ら雪を分るかち人

となかめて、近づけは笠とり雪ほうしぬいて、雪の上にぬかさしあて、かく聞つれば、
待わひていかくとむかへきつるなとうちいひて、それらはごしかんじききりかんじ
きなど、おもひくふんで、とくきませとて、さきたちて山かけに入ぬ。やをら岸邊
になりて、山に入て、おほつくしの山かけにおほひなる家人トカカリに作る家をいふかけて、かたは
らに、鳥居の笠木雪のなかにあらはれたるは、おほやますみの神をそ祭り奉る○桐山 賤冬籠

圖の栖家^ノの仙人らおほかひこかひの木を夏より秋かけて伐り、いつきむきなゝきやき、ひとたけふたゝけの檜の枝うちけたなるを曳いてんと雪もてつほらのみち作り打むれり。山かせさと過て、ひはらの雪ふきおとすに、行末もさやかに見へす。

風渡る雪は梢に残りなく晴てふゝきにくもる太山路

尾より嶺、みねより谷を行みちありて、日のうらゝにてれば、四十唐めてうつゝきなと、小鳥あさりたるもおもしろくて、

鶯はすむやすますや谷の戸をたゝく小鳥の聲にこたへぬ

大なる湖あれと雪見わくへうもあらねと雪けぬれば、しら鳥鴨なとむれりけるとな、あないのかたりぬ。小つくし山の家戸にしはしやすらひて、みや木引いつるを見れば、四乳鶉^{コウチ}とて名ある鶉にうしの皮のはやをつけて、みや木六十あまりのつみのせて、よね七十のたはらつゝたるおもさを益雄ひとりか力して引くたし行。よつち、こゝらきそひつゝ飛やうにくたるをどからぬ料にとて、前たつみちつくりか、檜の枝をりしきくたしあふき見れば、そひへ立るいはねより雪をとばして、はやぶさてふ雪船に、あまたつみ上げておとしたるを、たかゆくやはやふさわけのとうちたはれ、此雪、

車のとさは鳥なとのおとすに似たれば、うへはやふさの名はあるにこそありめとしはし雪のたか岡に見たゝすみて、

たかねより麓のみちに飛くたる鶉のはやふさ鳥ならねとも

雪のなかにけふりひとすちたちのほるは、このそりひくものゝ、一曳ひきてはものたうひ、二引ひきてはくとて、そのもふけして、おほなべに湯をかへらかし、ひわりこのやうなるものをわばとて、これひとつに、ゆつけくふめるかために、かまばとて、よつちみち、はやふさみちもみなそれゝにありける也。此火の邊には壁などぬりたらんやうに、みそをいたくまきのそぎたのあつけなるに、ひたぬりにぬりあぶり、これをこつばみそとて、あまたがはし、さしのべてものなめぬ。○圖あり「こつばみそ」「たんばやき」かれのしるしをせり「どし繩をむすひて大小をしり、日かくむくつけに、よねふた楯ち月のそくをしるしてむつきのはしめにかけたと云々」かくむくつけに、よねふた楯ちかうひとりか、ひと日のうちにくふは世中にたくふかたなきちからくへせりけるわさなれば、さもこそあるらめ。この山をおりのほりてゆけば、興一郎家戸とて、山あひに日くれ風吹は、

ちるは花つもるは月のかけとかつ太山の木々に春風そふく

雪のしたに在る柚小家に入て、爐のもとにまとゐして、こよひはこゝにねなんとやまをさにいへば、うちゑみて、安きこととてあら男の(布)の山衣きたるか、いひかしぎてうして、うくひすやうのいひがひして、もり、梶のをりしやくして、ふものに汁もりわけちたり。此折しやくしは、そま山かつらがもたる具ともおもほへす。清らかにうつくし、山おしきのせてさし出したり。○折しやく雨のふりくにやとおもへは、やねは木の皮とりつかねてふきたれは、火のいきつよう雪のしたとけて氷もりすとてひましけるにやあらん。やのくまは、いとふとき柱のとき氷、いくもともたちて、かく斗牙へ行山中なから人すめはよきむろとおほへたり。更れは、かれらかぬきおける麻きぬなとり集め、木の皮のみのをたゝみ、枕にとりおほひふしたれといとひもなう、野火のこたく火をたきたてゝ寒つるよはともおほへすひましらめは、

ふりつもる雪より明て出る日の光はをそき○秋田本ひか槇のあら山四日。朝とく神にも奉るにほうし木打もあやし。此山にて、十二月の十二日に山の神祭るとて、なにくれのもの、木の皮あるはわらもて皿むすひといふものして、それに盛てそなふとなん。山子らふたりきつとて、木をくりたるにのそみ飯とり入て、細き并してうすつきもちとして、火のうちにうちくべ、たんばやきとて、ひるのかてに

とてくれたり。ゆくゆくあふきていや高きをたいしやくといふ山見ゆ。路の右ももすもゝの林あり、むかしはやもありつらん、梅も咲つるか、いまは一もと二もともや残たらんとどゝまりくかたるを聞て、

梅はいつ盛なるらんしら雪のつもるか上に春風のふく山本にやのふたつあるを、中新田といひ、木のあはひくゝに雪の埋たるを、長下ナガゲといふとなん。そりひきすてゝ、林の中に女の聲にうた唄ふに、斧うつ音も聞ゆるは春木伐といへは、

花さかんかた枝は残せ又も来て太山のこのめはる木きるとも釜ふしかたけを左に、籠を分て、尾越のみちをくれれば、沖のかたに、舟のあまたひきつらなりて居るは、海扇を綱もてとるといふかけしことことなり。

春風の追手もあるを帆立貝あまの引手にまかせてそよるいにし夏宿りし城ヶ澤たなふの菊池うちか遠のはまやかたに出て、しばし休らひ、うそり川わたるとて、

鳥の名の宇曾利河風また寒く吹渡るらし氷みにけり